

私立大学図書館協会東地区部会

研究部報告書

2006年度

2007年3月

研究部担当理事校

国士舘大学附属図書館

# 目 次

項目名又はページ番号をクリックいただくと  
該当ページをご覧ください

## 《2006 年度研究部活動報告》

運営委員会	4
運営委員・研究分科会代表者合同会議	6
研究会	6
研修委員会	7
研修会	9
研究分科会	9

## 《2006 年度研究分科会活動報告》

1. 分類研究分科会	11
2. 逐次刊行物研究分科会	14
3. パブリック・サービス研究分科会	16
4. 図書館運営戦略研究分科会	19
5. レファレンス研究分科会	21
6. 理工学研究分科会	24
7. 相互協力研究分科会	25
8. 西洋古版本研究分科会	28
9. 企画広報研究分科会	30
10. 和漢古典籍研究分科会	33
11. 北海道地区研究分科会	35
12. メタデータ研究分科会	37
13. 情報リテラシー教育研究分科会	39
14. Lラーニング学習支援システム研究分科会	41

## 《研究分科会刊行物一覧》

## 《2006 年度研究分科会月例会について（報告）》

## 《研究講演会》

## 《研究会（交流会）》

## 《研修会》

2006 年度研修会 2006 年 9 月 26 日（火）～9 月 27 日（水）	51
テーマ：変化するレファレンスサービスの現状と課題	
第 1 日目（9 月 26 日）	
・大学図書館のレファレンスサービスの現状と課題（田村 俊作）	53
・デジタルレファレンスの展望と大学図書館（齋藤 泰則）	56
・記録する・使う・伝えるーレファレンス協同データベースの試みー（山元 真樹子）	63
第 2 日目（9 月 27 日）	
・体験的レファレンスサービス論ー友達 100 人できるかなー（高梨 章）	82

- ・レファレンスツールとしてのパスファインダー  
   －東京学芸大学附属図書館の事例－ (村田 輝) ……88
- ・国際基督教大学のレファレンスサービスサービスの変遷 (松山 龍彦) ……92
- ・今後のレファレンスライブラリアンの役割とその育成  
   について：意思決定を行う立場から (市古 みどり) ……93

《2006 年度研修会の総括と回顧》 (研修委員長 浮塚 利夫) ……96

《2007 年度 研究部活動計画 (案) 》 ……97

《関係規程》

研究部細則	……………	98
研究分科会申し合わせ	……………	100
研修委員会規則	……………	102

# 《2006 年度研究部活動報告》

## 1. 運営委員会

運営委員 (任期 2005 年 4 月 1 日～2007 年 3 月 31 日)

委員 秋沢 久美子 (駒澤大学)  
五十嵐 明子 (法政大学)  
石原 智子 (慶應義塾大学)  
市川 美香 (昭和女子大学) (2005 年 4 月 1 日～2005 年 6 月 30 日)  
前之園 香世子 (昭和女子大学) (2005 年 7 月 1 日～2007 年 3 月 31 日)  
佐藤 研一 (立正大学)  
関 達朗 (東京経済大学) (2005 年 4 月 1 日～2005 年 5 月 31 日)  
久世 泰子 (東京経済大学) (2005 年 6 月 1 日～2007 年 3 月 31 日)  
長岡 三智子 (早稲田大学)  
野口 真生 (大正大学)

研究部担当理事校 国土館大学

### 第 1 回 2006 年 4 月 11 日 (火) 15:00～17:00 於: 国土館大学

1. 2005 年度研究部決算報告について
2. 2006 年度研究部活動計画 (案) について
3. 資料組織研究分科会の休会手続きについて
4. 2006/2007 年度研究分科会について
5. 2005 年度研究分科会活動報告について
6. 2005 年度研究分科会会計報告について
7. 研究分科会予算繰越金について
8. 研究分科会マニュアル 2006 年度版について
9. 2006 年度第 1 回運営委員・研究分科会代表者合同会議について
10. 2006 年度部会総会行事について
11. 研究講演会の講演者について

### 第 2 回 2006 年 5 月 19 日 (金) 13:00～14:00 於: 駒澤大学

1. 2006 年度第 1 回研究分科会代表者との合同会議について
  - (1) 2006 年度私立大学図書館協会東地区部会研究部活動計画 (案) について
  - (2) 2006 年度私立大学図書館協会東地区部会研究部予算 (案) について
  - (3) 2006 年度研究会 (交流会) 開催計画 (案) について
  - (4) 2006 年度研究分科会活動計画書について
  - (5) 研究分科会マニュアル 2006 年度版について
  - (6) 研究分科会関連業務の分担について
  - (7) 2006 年度私立大学図書館協会スケジュールについて
  - (8) WWW 情報資源提供サービス並びに利用の概要について
  - (9) 研究分科会代表者名簿の確認について
  - (10) 2006 年度第 1 回運営委員・研究分科会代表者合同会議議事次第について
2. 2006 年度東地区部会総会・館長会・研究講演会について
3. 資料組織研究分科会 HP の取り扱いについて

### 第 3 回 2006 年 6 月 9 日 (金) 12:20～12:50 於: 鶴見大学

1. 2006 年度研究講演会最終打ち合わせについて

2. 2006年度研究会（交流会）開催について

**第4回 2006年 7月 7日（金） 15：00～17：15 於：東京経済大学**

1. 2006年度研究会（交流会）について
2. 2006年度夏期研究合宿（集中研究会）実施計画について
3. 研究部予算について
4. 研究分科会予算について

**第5回 2006年 10月 13日（金） 14：30～17：30 於：昭和女子大学**

1. 2006年度研究会（交流会）について
2. 夏期研究合宿の開催地について
3. 研究分科会会員追加募集について
4. 会員異動担当理事校について
5. 研究分科会特別助成金について
6. 研究分科会助成金について
7. 研究分科会予算の執行について
8. 2006年度第2回運営委員・研究分科会代表者合同会議について
9. 研究部報告書の構成について
10. 研究部報告書の協会HPへの掲載について
11. 2007年度研究講演会の講師と演題について
12. 次期運営委員の推薦について
13. その他  
(1) HPへのプライバシー・ポリシー掲載について

**第6回 2006年 11月 10日（金） 11：10～12：55 於：法政大学**

1. 2006年度第2回運営委員・研究分科会代表者合同会議について
2. 2006年度研究会（交流会）の運営について
3. 2006年度研究分科会夏期研究合宿（集中研究会）実施報告について
4. 分科会助成金の改訂について
5. 研究分科会予算の支出について
6. 研究分科会運営上の問題点について
7. 2007年度研究分科会報告大会の意見について
8. 2007年度研究講演会の講師と演題について
9. 研究分科会会員追加募集について

**第7回 2006年 12月 15日（金） 15：00～16：20 於：大正大学**

1. 2006年度中間決算について
2. 2007年度研究部活動計画（案）について
3. 2007年度研究部予算（案）について
4. 研究分科会会員追加募集について
5. 特別助成金交付基準（案）について
6. 次期運営委員について
7. 2007年度研究講演会の講師について

**第8回 2007年 3月 14日（水） 14：00～17：00 於：国土館大学**

1. 次期運営委員（2007-2008年度）及び研修委員（2006-2007年度）について
2. 2006年度研究部活動報告及び2006年度中間決算報告について
3. 2007年度研究部活動計画（案）及び2007年度研究部予算（案）について
4. 研究分科会会員追加募集について
5. 研究部担当理事校の引継について
6. 更新担当理事校の引継について
7. 月例会担当理事校について

8. 研究分科会マニュアル等の改訂について
9. 研究分科会予算繰越金の縮減について
10. 研究分科会の課題について
11. 研修委員会の活動について
12. 協会HPについて
13. 役員会の報告について
14. その他
  - (1)次期運営委員・研修委員等について

## 2. 運営委員・研究分科会代表者合同会議

第1回 2006年 5月 19日(金) 15:00~16:40 於:駒澤大学

1. 2006年度研究部活動計画(案)について
2. 2006年度研究部予算(案)について
3. 2006年度研究部研究会(交流会)について
4. 2006年度研究分科会活動計画について
5. 研究分科会マニュアル2006年度版について
6. 分科会関連業務の分担について
7. 繰越金について
8. 2006年度スケジュールについて
9. WWW情報資源提供サービス並びに利用の概要について
10. その他
  - (1)研究分科会代表者名簿について

第2回 2006年 11月 10日(金) 13:05~14:30 於:法政大学

1. 2006年度研究会(交流会)について
2. 夏期研究合宿(集中研究会)について
3. 夏期研究合宿開催地について
4. 研究分科会会員の追加募集について
5. 研究分科会への助成金改訂について
  - (1)分科会助成金について
  - (2)特別助成金について
6. 研究分科会予算の支出について
7. 研究分科会運営上の問題点について
8. 研究部報告書原稿・会計報告書等の提出について
9. 『研究部報告書 2006年度版』の協会HPへの掲載について
10. 次期運営委員について

## 3. 研究会(交流会)

日時:2006年 11月 10日(金)

会場:法政大学多摩キャンパス 百周年記念館国際会議場

参加者:46校 60名

講演:

演題:「魅せる図書館ホームページ」

跡見学園女子大学 文学部助教授

福田 博同

研究分科会活動報告 I

演題:「国立国会図書館のレファレンス協同データベースについて」

レファレンス研究分科会

昭和女子大学図書館

嶋崎 尚代

國學院大学図書館  
桜美林大学図書館

古越 慶子  
三上 彰

研究分科会活動報告Ⅱ

演 題：「ILLの現場から－大阪大学附属図書館生命科学分館見学レポート」

相互協力研究分科会

杏林大学医学図書館

清水 ゆかり

4. 研修委員会

研修委員（任期 2006 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日）

委員長 浮塚 利夫（明治大学）

委員 岡野 純子（慶應義塾大学）

和田 貴敏（中央大学）

御園 和之（早稲田大学）

光富 健一（東京理科大学）

木下 幸子（国士舘大学）（2005 年 4 月 1 日～2007 年 3 月 31 日）

オブザーバー 関 秀行（慶應義塾大学）

第 1 回 2006 年 4 月 18 日（火） 14：00～17：00 於：明治大学

1. 研修委員会の流れ（この 1 年間）について
2. 2006 年度研修委員会の日程と会場について
3. 2006-2007 年度研修会の日程と会場および見学先について
4. 2006-2007 年度研修会テーマについて
5. 2006 年度第 2 回以降の研修委員会について

第 2 回 2006 年 5 月 9 日（火） 14：00～17：00 於：東京理科大学

1. 2006 年度研修会の日程と会場及び見学先について
2. 2006-2007 年度研修会テーマについて
3. 第 3 回研修委員会について
4. その他  
(1) 第 4 回～第 6 回研修委員会について

第 3 回 2006 年 5 月 29 日（月） 14：00～17：00 於：早稲田大学

1. 2006 年度研修会テーマについて
2. 今後の進め方について
3. 第 4 回研修委員会について
4. その他  
(1) 第 5 回・第 6 回研修委員会について

第 4 回 2006 年 6 月 7 日（水） 14：00～17：00 於：中央大学

1. 2006 年度研修会テーマについて
2. 今後の進め方について
3. 第 5 回以降の研修委員会について
4. その他  
(1) 第 6 回以降の研修委員会について

第 5 回 2006 年 6 月 29 日（木） 15：00～17：10 於：慶應義塾大学

1. 研修会場実地検分
2. 2006 年度研修会について
3. 研修会当日の役割分担について
4. 第 6 回研修委員会について

第 6 回 2006 年 8 月 30 日（水） 15：00～17：10 於：慶應義塾大学

1. 2006年度第1回研修会について
2. 講師の昼食・懇親会参加および使用機器について
3. 2006年度第1回研修会プログラム(案)について
4. 2006年度第1回研修会アンケート(案)について
5. 2006年度第1回研修会オリエンテーション資料について
6. 休憩時の飲み物等について
7. 研修会コマーシャルについて
8. 研修会当日の講師控室実地検分について
9. 研修会当日の集合時間について
10. 次回研修委員会について

**第7回 2006年9月14日(木) 14:00~17:10 於: 慶應義塾大学**

1. 次期研究部担当理事校について
2. 2006年度第1回研修会について
3. 2006年度第1回研修会プログラム(案)について
4. 2006年度第1回研修会アンケート(案)について
5. 2006年度第1回研修会オリエンテーション資料について
6. 2006年度第1回研修会タイムスケジュールについて
7. 会場実地検分
8. 研修会場設営の記録について
9. 次回研修委員会について

**第8回 2006年10月26日(木) 15:00~17:10 於: 国士舘大学**

1. 2006年度第1回研修会の総括と反省について
2. 2007年度研修会テーマについて
3. その他  
(1) 次回研修委員会について

**第9回 2006年12月6日(水) 14:00~17:00 於: 明治大学**

1. 2007年度予算(案)について
2. 2007年度研修会テーマについて
3. その他  
(1) 第10回~第12回研修委員会について

**第10回 2007年1月17日(水) 14:00~17:00 於: 東京理科大学**

1. 研修会レジュメの協会HP掲載について
2. 2007年度第1回研修会について
3. 2007年度第2回研修会テーマについて
4. その他  
(1) 第11回・第12回研修委員会について

**第11回 2007年2月28日(水) 15:00~17:00 於: 早稲田大学**

1. 研究部担当理事校の引継日程について
2. 2007年度第1回研修会について
3. 2007年度第2回研修会テーマについて
4. その他  
(1) 第12回研修委員会について

**第12回 2007年3月15日(木) 15:00~17:00 於: 国士舘大学**

1. 研究部引継ぎについて
2. 第8回運営委員会の報告について
3. 2007年度第1回研修会について
4. 2007年度第2回研修会について



## 5. その他

(1)2007 年度第 1 回・第 2 回研修委員会について

### 5. 研修会

日 時： 2006 年 9 月 26 日 (火) ～27 日 (水)

会 場： 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール

テーマ： 変化するレファレンスサービスの現状と課題

参加者： 117 校 1 機関 148 名

内 容：

第 1 日 (9 月 26 日)

基調講演 「大学図書館のレファレンスサービスの現状と課題」  
慶應義塾大学 文学部教授 田村 俊作

講 演 「デジタルレファレンスの展望と大学図書館」  
明治大学 文学部助教授 齋藤 泰則

講 演 「記録する・使う・伝えるーレファレンス協同データベースの試みー」  
国立国会図書館 関西館事業部図書館協力課  
協力ネットワーク係副主査 山元 真樹子

第 2 日 (9 月 27 日)

講 演 「体験的レファレンスサービス論ー友達 100 人できるかなー」  
関東学院大学 図書館本館運営課長 高梨 章

事例報告 「レファレンスツールとしてのパスファインダー  
ー東京学芸大学附属図書館の事例ー」  
東京学芸大学 学術情報部情報管理課学術資料係長 村田 輝

事例報告 「国際基督教大学図書館のレファレンスサービスの変遷」  
国際基督教大学 図書館グループ長 松山 龍彦

講 演 「今後のレファレンスライブラリアンの役割とその育成について  
ー意思決定を行う立場からー」  
慶應義塾大学 信濃町メディアセンター事務長 市古 みどり

### 6. 研究分科会

次の 14 研究分科会が、月例研究会、夏期研究合宿等の活動をおこなう。

(2006 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日)

- (1) 分類研究分科会
- (2) 逐次刊行物研究分科会
- (3) パブリック・サービス研究分科会
- (4) 図書館運営戦略研究分科会
- (5) レファレンス研究分科会
- (6) 理工学研究分科会
- (7) 相互協力研究分科会
- (8) 西洋古版本研究分科会
- (9) 企画広報研究分科会
- (10) 和漢古典籍研究分科会
- (11) 北海道地区研究分科会
- (12) メタデータ研究分科会
- (13) 情報リテラシー教育研究分科会
- (14) Lーラーニング学習支援システム研究分科会

研究分科会月例会担当理事校 立正大学  
研究分科会更新担当理事校 昭和女子大学

# 《2006 年度研究分科会活動報告》

## 1. 分類研究分科会

代表者：藤倉 恵一（文教大学）

会員数：5機関5名（2007年3月31日現在）

会員：正会員

伊藤 民雄（実践女子大学）

鈴木 学（日本女子大学）

高澤 玲子（獨協大学）

藤倉 恵一（文教大学）

堀 はな恵（鶴見大学）

年会費：3,000円

延べ出席者数：54名（内訳：月例会10回・夏期集中研究）

研究分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/bunrui/>

### 1) 基本テーマ

件名、シソーラス、Indexing 理論等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究という基本テーマとする。

今期は近年の分科会研究成果を基盤として、わが国における標準的な図書分類法である日本十進分類法（NDC）を理論的に拡張・性能向上が可能であるかどうか、またその影響はどのようなものであるかなどを検証したい。

### 2) 活動の概要

上の基本テーマは、前期（2004－2005年度会期）および前々期（2002－2003年度会期）の研究テーマを継承して設定したものである。

前々期は Bliss Bibliographic Classification 2nd ed.（以下「BC2」）の、前期は Dewey Decimal Classification（以下「DDC」）の諸版のそれぞれ教育分野を対象に、日本十進分類法（以下「NDC」）との比較研究を行ってきた。BC2は厳密なファセット分析のもとに複合主題を表現し、DDCは誕生時こそNDC同様の列挙型分類法でありながら近年の改訂でファセット分析の手法を採り入れつつある。いっぽうNDCの改訂方針は、基本的に記号法は変えずに下位項目の展開が中心である。新主題に対しては一見して対応できているように見えるが、単に名辞が追加されたり変更されていたりするからそう思えるに過ぎない（と推測できる）。

そこで今期は、NDCの新訂9版（以下「NDC9」）にBC2やDDCで有効性を確認した記号法や分析合成の手法を実装する実験を行う。

分類研究分科会は2年間を(1)研究テーマに沿った文献の精読を通じて参加会員の基礎レベルを整える、(2)主たる研究テーマの研究・検証を行う、(3)研究成果の発表および総括の3つの期間に分けて活動する。

### 第1期

2006年度は期の始まりであるから第1期の活動に重点を置いた。まず概論として以下の文献（図書）を精読した。

- ・ 主題組織法概論：情報社会の分類／件名 丸山昭二郎，岡田靖，渋谷嘉彦著 紀伊國屋書店，1986

続いて、夏期研究合宿は第2期のテーマであるNDCの構造を探る段階に入るが、並行して第1期の課題として以下の文献の精読を行った。

- ・ 川村敬一「一般分類法における主類の選定と順序:その哲学的小よび社会歴史的背景の考察」日本図書館情報学会誌 50(1), p.1-25 2004
- ・ 原田勝「ドキュメンテーションの現在」情報の科学と技術 p.280-284 2003
- ・ 北克一「主題情報の検索:総論」情報の科学と技術 54(7), p.334-340 2004
- ・ 大場利康, 川鍋道子「図書における主題検索:NDL-OPACでの検索と国立国会図書館の取組み」情報の科学と技術 54(7), p.341-347 2004

夏期研究合宿後も分析合成型分類法に関する基礎知識を確認することを目的として以下の文献の精読を行った。

- ・ 光富健一「情報の組織化とファセット分類法」情報の科学と技術 32(2), p.109-114 1994
- ・ 眞下勇「『Facet』概念と『主題』概念についてー『現代図書館分類法』を求めてー」TP&Dフォーラムシリーズ 2, p.56-59 1994
- ・ 小林康隆「デュイ十進分類法第20版780:音楽ー分析合成型分類法の実務的有効性についてー」TP&Dフォーラムシリーズ 2, p.38-55 1994
- ・ 萬谷衣加「BC2 (Bliss Bibliographic Classification 2nd ed.) 分類を付与する試み」TP&Dフォーラムシリーズ 12-14, p.95-110 2005
- ・ 光富健一「統制索引言語の必要性」情報の科学と技術 46(11), p.613-618 1996
- ・ 河島正光「多元方式分類」現代の図書館 25(2), p.71-75 1987
- ・ Foskett, D.J. and Foskett, Joy. Bliss Bibliographic Classification 2nd ed. Class J: Education (分類研究分科会 2003年度訳; BC2クラスJ教育序文)

## 第2期

夏期研究合宿は分科会OBを交え、「NDCの根幹をとらえる」をテーマにNDC9の改訂方針およびその批判を中心にNDC9刊行後のレビューや批評の文献を検討した。

具体的には1990年代の前半、日本図書館協会分類委員会が『図書館雑誌』上で提示した改訂試案に対し、日本図書館研究会の整理技術研究グループを中心とした各研究者たちが『図書館界』誌上で批評を行うという動きがあったので、それぞれを対照させつつ検討した。結果として、実際にその批判や指摘された問題点のいくつかはNDC9の改訂に反映されていることを確認した(しかしなお問題は残されている)。

NDCの改訂に関して精読した文献は以下の通り。

- ・ 「日本十進分類法第9版試案の概要」図書館雑誌 (全11回)
- ・ 「NDC9版を考える」図書館界 (全6回)
- ・ 吉田暁史「NDC9版(案)の検討」図書館界 45(4), p.372-377 1993
- ・ 千賀正之「新訂9版(NDC)のあらまし--分類表改訂とその効用」びぶろす 46(9), p.212-215 1995
- ・ 相原信也「日本十進分類法新訂9版の刊行までの経緯とその制作過程について」図書館雑誌 p.976-979 1995
- ・ 石山洋「NDC新訂9版の目指したもの--新時代への基盤確立と伝統の継承」図書館雑誌 89(12), p.974-975 1995
- ・ 野口恒雄, 吉田暁史「NDC9版の批判的検討」図書館界 48(2), p.70-77 1996
- ・ JLA分類委員会「NDC新訂9版の補訂について」図書館雑誌 90(3), p.180-182 1996

また、今後具体的にNDCの教育分野を研究するにあたり、NDCにおける複合主題の扱

い、ファセット化の先行研究および NDC と DDC の比較を行った文献などを精読した。

- ・ 浅野十糸子「NDC(日本十進分類法)における複合主題の表現について」 塚女子短期大学紀要 19, p.23a-13a 1984
- ・ 石塚栄二「NDC の総記共通区分における面の複合」 図書館学会年報 22(2), p.49-52 1976
- ・ 平田伸夫「日本十進分類法新訂 9 版の課題」 中京大学図書館学紀要 24, p.15-25 2003
- ・ 吉田暁史, 蔭山久子「NDC8 版「教育」の検討--ファセット分析手法を用いて」 図書館界 36(3), p.127-133 1984
- ・ 若林元典「比較分類学の試み--NDC の教育と DC の Education」 駒沢大学文学部研究紀要 37, p.1-14 1979
- ・ 若林元典「比較分類学の試み-2- NDC の教育と DC の Education」 駒沢大学文学部研究紀要 41, p.1-37 1983

さらに 2007 年度の活動の準備として、「出版年鑑」における教育分野の分類別出版点数調査を開始した。2007 年度は引き続き出版点数の調査結果をもとに NDC9 改訂の妥当性を検証する作業に入る予定。

### 3) 刊行物及び事業

#### ア. TP&D フォーラム 2006 (第 16 回整理技術・情報管理等研究集会) の共催

1991 年に日本図書館研究会整理技術研究グループにより始められた TP&D フォーラムは第 2 回から分類研究分科会が共催者となり運営に参画してきた。2006 年度は文京区本郷にて開催し、分科会現・旧会員から 5 名が実行委員として当日の運営の中核を果たした。

TP&D フォーラム 2007 (第 17 回整理技術・情報管理等研究集会) も東京での開催となる。分科会代表である藤倉が実行委員長として選出され、分科会現・旧会員を中心に実行委員会を組織、現在開催準備中である (8 月 25~26 日、文京区本郷で開催予定)。

#### イ. 日本図書館協会分類委員会への意見提案

夏期研究合宿の検討を通して、NDC9 の改訂後も残る課題がいくつか確認された。これらの諸問題について、10 版改訂作業中である日本図書館協会分類委員会に対し、1 月 20 日付で分科会からの要望という形で提言を行った。

その後、3 月 8 日付で分類委員会より分科会宛回答が寄せられた。今後も日本図書館協会分類委員会との連絡は継続する予定である。

#### ウ. 分科会設立 50 周年記念事業の継続

2004 年 11 月 13 日に開催した分類研究分科会設立 50 周年記念シンポジウムの記録につき 2006 年度中の刊行を目指し記念事業実行委員会で編集作業をしてきたが、記録編集上の諸般の事情により編集作業が遅れている。現在シンポジウム記録の校正作業中であり、近日中の刊行を予定している。

文責：藤倉恵一 (分類研究分科会代表)

## 2. 逐次刊行物研究分科会

代表者：岡田 光世（東邦大学）

会員数：4校4名（正会員4名）

会 員：岡田 光世（東邦大学）

小室 啓子（文教大学）

高野 麻子（専修大学）

田村 直規（鶴見大学）

年会費：5,000円（正会員）/2,000円（ML会員）

例会開催回数：10回（夏期集中研究会含む）

延べ参加者数：49名

研究分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org./e-kenkyu/chikukan/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

- ・電子ジャーナル、オンラインデータベースの効果的な広報や提供方法の研究
- ・図書館における学術資料としての逐次刊行物の研究
- ・逐次刊行物の効果的な蔵書構成についての研究

#### 2) 活動の概要

前期からの継続参加者がいないため、今期参加者の興味ある問題を中心に活動をおこなった。特に電子ジャーナルへの関心が高かったため、各大学の現状を報告し問題点について話し合いながら、後期活動に向けて研究テーマを検討した。また積極的に他分科会との交流活動もおこなった。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

4月例会（第497回） 4月21日（金） 東洋大学（川越キャンパス）

- ・自己紹介
- ・東洋大学川越図書館見学
- ・本年度研究計画の検討

5月例会（第498回） 5月17日（水） 専修大学（生田キャンパス）

- ・事務連絡
- ・専修大学図書館見学
- ・研究テーマの検討
- ・集中研究会企画検討

6月例会（第499回） 6月21日（水） 文教大学（湘南キャンパス）

- ・事務連絡
- ・文教大学湘南図書館見学
- ・講演『逐次刊行物研究分科会 今昔物語』  
「昔はよかった、か？」 浜田賢一氏（文教大学湘南図書館 目録係）  
「逐刊今昔物語」 中村保彦氏（文教大学湘南図書館 目録係）

7月例会（第500回） 7月19日（水） 東邦大学医学メディアセンター

- ・事務連絡
- ・講演「東邦大学における電子ジャーナルの現状について」  
江幡歌奈子氏（東邦大学医学メディアセンター情報管理部門）
- ・東邦大学医学メディアセンター、東邦大学医療センター大森病院内 からだのと  
しょしつ見学
- ・文献レビュー

8月例会（第501回）8月7日（月）～8日（火） 夏期集中研究会

- ・関係機関施設見学
  1. アカデミーヒルズ六本木ライブラリー
  2. 日本図書館協会
  3. 中央大学図書館（多摩キャンパス）

10月例会（第502回）10月18日（水）鶴見大学図書館

- ・事務連絡
- ・夏期見学会報告
- ・文献レビュー
- ・PULC 版元説明会報告
- ・鶴見大学図書館/新規導入システム見学

11月例会（第503回）11月15日（水）文教大学（湘南キャンパス）

- ・事務連絡
- ・私立大学図書館協会東地区部会研究部 2006 年度研究会（交流会）報告
- ・大学図書館問題研究会神奈川支部例会参加報告
- ・文教大学の PULC 参加について
- ・文教大学逐次刊行物係 業務の流れについて

12月例会（第504回）12月14日（木）国士館大学図書館（世田谷キャンパス）

<図書館運営戦略分科会との合同開催>

- ・自己紹介
- ・洋雑誌の契約について
- ・国士館大学図書館見学

1月例会（第505回）1月17日（水）専修大学図書館（生田キャンパス）

- ・事務連絡
- ・研究テーマの検討
- ・図書館システム iLiswave の説明
- ・生田分館見学

2月例会（第506回）3月14日（水）東邦大学医学メディアセンター

- ・事務連絡
- ・電子ジャーナル導入後の問題点
- ・図書館システム LINUS/NC の説明
- ・今期の反省

## 2) 刊行物及び事業

今年度は特になし

### 3. パブリック・サービス研究分科会

代表者：東家 由朗（上智大学）  
会員数：18校20名  
会員：佐藤 庸子（関東学院大学・会計担当）  
二塚 恵里（国立音楽大学・旧合宿担当・HP担当）  
千家 慶子（國學院大学）  
田辺 朋子（国士舘大学・合宿担当）  
藤原 美佳（駒澤大学）  
清水 暁美（相模女子大学）  
長谷川 真弓（上智大学・旧HP担当）  
東家 由朗（上智大学）  
吉野 恵子（女子栄養大学）  
大川 龍太郎（成城大学）  
阿部 尚子（清泉女子大学）  
坂下 明子（創価大学）  
成田 暁（大東文化大学）  
杉田 典子（東海大学）  
小松 泰亮（東京家政学院大学・副代表）  
塚本 明（東洋大学・合宿担当）  
今井 智子（文化女子大学）  
水野 里永子（文化女子大学・副代表）  
椎名 ちか子（明治学院大学・会計担当）  
辻本 幸彦（立教大学）

年会費：8,000円  
例会開催回数：10回（夏季研究合宿を含む）  
延べ参加人数：188名  
ホームページURL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/public/>

#### 活動

##### 1) 基本テーマ

当分科会では図書館界の最新動向や、図書館員としての専門性を高めるための基礎となる情報を提供する。講義から知識を養い、討議やケースメソッドを通じてコミュニケーション能力や感性を養う。「知識」「技能」「感性」を備えた図書館員が当分科会から巣立っていくことを願っている。

##### 2) 活動の概要

月例会は、講義とグループ研究の2本立てで構成している。18大学の図書館員が所属しており、講義の中で興味をもったトピックや、情報交換から得たものを足がかりに討議し、研究を行った。また、会員が所属する図書館見学・事例紹介も積極的に実施した。

###### ①講義

慶應義塾大学国際センター事務長（前三田メディアセンター事務長）加藤好郎氏（世話人）が、テーマの選定と講師の手配を担当している。

講師は、加藤氏本人他、慶應義塾大学の教員または職員に依頼するケースがある。講義録も会員の分担で作成し、ホームページ上でも公開している。



## ②グループ研究

所属図書館での日常業務、月例会での講義内容、会員と情報交換の中で、各自が研究テーマとして興味をもったことを夏季研究合宿で発表した。それをもとに以下の三つのテーマに別れグループ研究を開始した。( )内はグループ研究リーダー。現在、1と3は合同で研究活動を行っている。

1. 図書館員・司書・アウトソーシング (辻本幸彦 立教大学)
2. 学生対応・利用者サービス (坂下明子 創価大学)
3. 図書館評価 (千家慶子 國學院大學)

## 資料

### 1) 月例会

4月例会：4月10日(月) 慶應義塾大学(三田)

- ①オリエンテーション
- ②自己紹介
- ③各担当決定

5月例会：5月15日(月) 慶應義塾大学(三田)

- ①慶應義塾大学三田メディアセンター見学
- ②「アウトソーシング時代における大学図書館の戦略」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長
- ③「私立大学図書館における国際交流活動の現状と今後」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

6月例会：6月12日(月) 慶應義塾大学(三田)

- ①「大学図書館経営からみたリスクマネジメント」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長
- ②「大学図書館におけるアーカイブス」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長
- ③「大学図書館におけるアーカイブスの必要性：宗家文書を中心に」  
倉持隆氏 慶應義塾大学三田メディアセンター貴重室兼選書担当

7月例会：7月10日(月) 慶應義塾大学(三田)

- ①「大学図書館における著作権問題：その現状と今後」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長
- ②「図書館コンソーシアムとは：大学図書館のサービス充実に向けて」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長
- ③「大学図書館におけるサービスの評価指数」  
加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

夏季研究合宿：8月21日(月)～23日(水) 文化学園軽井沢山荘

- ①各会員の個人発表(業務紹介、課題、研究テーマなど)及び質疑応答
- ②グループ分けによる討議、及び発表  
「図書館員・司書・アウトソーシング」グループ  
「学生対応・利用者サービス」グループ  
「コンソーシアム」グループ  
「図書館評価」グループ

10月例会：10月16日（月） 慶應義塾大学（三田）

①「Librarian2.0を目指して」

田邊稔氏 慶應義塾大学メディアセンター本部システム担当

②「大学図書館における電子媒体の充実とコンソーシアムについて」

加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

11月例会：11月13日（月） 明治学院大学（白金） 慶應義塾大学（三田）

①事例紹介「明治学院大学社会学部現代GPプロジェクトへの図書館の取り組み」

三上耕一氏 明治学院大学図書館利用サービス課長

宮城玲子氏 明治学院大学図書館利用サービス係主任

②明治学院大学図書館見学

③「OCLCの活動とは」

加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

④「OCLC NetLibrary 日本語コンテンツ搭載計画について」

新元公寛氏 紀伊国屋書店 OCLC センター センター長

⑤「レファレンスサービスの新たなモデル」

田村俊作氏 慶應義塾大学文学部教授

12月例会：12月11日（月） 清泉女子大学（品川） 慶應義塾大学（三田）

①清泉女子大学図書館見学

②「今、大学図書館に求められていること：国レベルの政策から」

加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

③「デジタルデータの作成：蓄積と活用」

原田隆史氏 慶應義塾大学文学部助教授

1月例会：1月15日（月） 慶應義塾大学（三田）

①慶應義塾大学法科大学院図書館見学

②「ケースメソッドを用いた図書館員教育の有効性」

加藤好郎氏 慶應義塾大学国際センター事務長

3月例会：3月8日（月） 駒澤大学（駒沢・深沢） 慶應義塾大学（三田）

①駒澤大学駒沢キャンパス図書館見学・ビデオ紹介

②駒澤大学深沢キャンパス日本館見学

③「慶應義塾大学における情報リテラシー教育

:KITIE、日吉、資料検索法を中心に」

市古みどり氏 慶應義塾大学信濃町メディアセンター事務長

③「Project Next-Lの目指すもの」

原田隆史氏 慶應義塾大学文学部助教授

#### 4. 図書館運営戦略研究分科会

代表者：櫻井 友美（国士舘大学）

会員数：3名

会 員：海老原 徹（横浜商科大学） 山上 良子（目白大学）

年会費：5000円

例会開催日数：10回（夏季集中研修を含む） / 延べ参加者数：31名

分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/senryaku/index.htm>

##### 活動概要

###### 1：基本テーマ

各大学図書館における「中・長期構想」の作成に携わることを想定し、それに見合う図書館運営への意識を育成することを目指す。

###### 2：活動の概要

図書館各業務のアウトソーシング適性について多面的に考察し、あるべき大学図書館像を提示することを主題とし、現行の図書館業務把握と整理を行っている。

集会活動は、「討議」を中心とし「人の意見を聞く」「自分の考えを発言する」と言うことに重点をおき、今後図書館運営に携わる際の基礎能力を高めている。

##### 月例会

4月例会 4月15日（木） 昭和女子大学 13：30～17：00

- ・ 自己紹介
- ・ 2004・2005年研究活動について
- ・ 新体制の選出
- ・ 2006年研究活動について
- ・ 図書館見学
- ・ 懇親会

5月例会 5月18日（木） 目白大学 13：30～18：30

- ・ 事務連絡（会費等）
- ・ 夏季研修合宿について
- ・ 年間活動計画について
- ・ ガイダンス・利用教育について
- ・ 目白大学図書館見学
- ・ その他

6月例会 6月15日（木） 国士舘大学 13：30～18：00

- ・ 合同会議報告
- ・ ホームページについて
- ・ 夏季研修について
- ・ 受入整理業務について
- ・ 国士舘大学図書館見学
- ・ その他

- 7月例会 7月20日(木) 横浜商科大学 13:30~18:30
- ・ 夏季研修について・今後の活動について
  - ・ 資料の選書について
  - ・ 資料の廃棄について
  - ・ 横浜商科大学図書館見学
  - ・ その他
- 8月例会 8月21日(月)~22日(火) 紀伊國屋書店・江戸川大学
- ・ 21日:紀伊國屋書店 13:00~19:00
  - ・ 営業本部 ライブラリーサービス営業本部 藤規幸男部長より  
「戦略的パートナーとして図書館の機能と役割の向上を目指して」
  - ・ 22日:江戸川大学 13:00~18:00
  - ・ 全面アウトソーシングの実例見学
  - ・ 「図書館業務向上に関する対応策について」
  - ・ 状況説明受け図書館見学
- 10月例会 10月20日(木) 国士舘大学 13:30~18:00
- ・ 事務連絡
  - ・ 夏季研修合宿を踏まえて
  - ・ 図書館業務のアウトソーシングについて
  - ・ 今後の活動計画について
- 11月例会 11月10日(金) 法政大学 15:00~19:00
- ・ 2006年研究会交流会参加
  - ・ 講演「魅せる図書館ホームページ」
  - ・ 研究分科会活動
  - ・ 意見交換会
  - ・ 法政大学図書館見学
  - ・ 事務連絡・その他
- 12月例会 12月22日(木) 国士舘大学 13:30~18:00
- ・ 逐次刊行物分科会との合同例会
  - ・ 自己紹介
  - ・ 洋雑誌についての事例報告(契約・予算・選定等)
  - ・ 国士舘大学図書館見学
  - ・ 懇親会
- 2月例会 2月15日(木) 横浜商科大学 13:30~18:00
- ・ 事務連絡
  - ・ 各図書館業務とアウトソーシング適性の分析
  - ・ その他
- 3月例会 3月12日(月) 目白大学 13:00~18:00
- ・ 事務連絡
  - ・ 各図書館業務とアウトソーシング適性の分析
  - ・ 今期の反省
  - ・ その他

## 5. レファレンス研究分科会

代表者 : 三上 彰 (桜美林大学図書館)  
副代表 : 古越 慶子 (國學院大學図書館) 中山 紗恵子 (駒澤大学図書館)  
会員数 : 9名 (9大学)  
会 員 : 古越 慶子 (國學院大學図書館) 飯島 恵子 (専修大学図書館)  
小坪 守 (立教大学図書館) 三上 彰 (桜美林大学図書館)  
中山 紗恵子 (駒澤大学図書館) 中澤 恵子 (日本女子大学図書館)  
西村 亜希子 (白鷗大学図書館) 嶋崎 尚代 (昭和女子大学図書館)  
竹澤 弘恵 (聖心女子大学図書館)  
年会費 : 5,000円 (正会員)  
例会開催回数 : 10回 (夏期研究合宿含む)  
延べ参加者数 : 89名  
研究分科会ホームページ URL : <http://www.jaspul.org/e-kenkyu/reference/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

- ・レファレンスと利用者教育、情報リテラシー教育等の関係性について  
レファレンス業務における経験が、より効果的な利用者サービスに結びつくよう、  
実践例をあげながら、これらをリンクさせた活用法を検討していく。
- ・デジタルレファレンス、および、レファレンス協同データベースについて

#### 2) 活動の概要

前半の月例会では、各大学図書館における利用者教育・ガイダンス等の実施状況と、  
オンライン・データベース、オンライン・ジャーナル等の電子情報源の導入状況について  
報告を行ない、現状や問題点を共有した。

夏期研究合宿では、デジタルレファレンスと、レファレンス協同データベースのこと  
について、国立国会図書館関西館、京都大学図書館等の見学を行なった。11月に行なわ  
れた2006年度の研究会では、夏期研究合宿で見学した国立国会図書館のレファレンス  
協同データベースとデジタルレファレンス、日常業務におけるこれらの活用法等につい  
て発表を行なった。

12月以降の月例会では、2007年度の活動報告・研究報告に向けた活動として、まず  
文献レビューを行ない、研究テーマと共同研究活動について、その実施方法等の検討を  
行なっている。

これ以外に事例研究等も随時行ない、レファレンス能力の向上にも努めている。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

4月例会

2006年4月28日(金) / 國學院大學図書館 参加者数: 11名

- ・前代表・副代表より2004~2005年度の分科会活動内容の報告

- ・各会員の自己紹介
- ・分科会運営体制の検討および役割分担の決定
- ・今後の研究活動と、会場校等のローテーションについて
- ・図書館および関連施設の見学

#### 5月例会

2006年5月23日（火）／ 駒澤大学図書館 参加者数：9名

- ・各大学における利用者教育についての現状報告
- ・夏期研究合宿について
- ・研究部運営委員・分科会代表者合同会議の報告
- ・図書館見学

#### 6月例会

2006年6月16日（金）／ 桜美林大学図書館 参加者数：9名

- ・各大学における利用者教育についての現状報告
- ・夏期研究合宿について
- ・図書館見学

#### 7月例会

2006年7月20日（木）／ 昭和女子大学図書館 参加者数：9名

- ・レファレンス事例研究
- ・夏期研究合宿について
- ・大串夏身先生講演会
- ・図書館見学

#### 夏期研究合宿

2006年9月14日（木）～15日（金）／ 参加者数：8名

- ・国立国会図書館関西館見学
- ・京都大学図書館見学
- ・大谷大学図書館見学
- ・協同データベースとデジタルレファレンスの活用法について
- ・2006年度研究会（11月に開催）における発表の準備

#### 10月例会

2006年10月13日（金）／ 聖心女子大学図書館 参加者数：9名

- ・各大学におけるオンライン・データベース導入状況について
- ・夏期研究合宿の会計報告
- ・2006年度研究会（11月に開催）における発表の準備・リハーサル
- ・図書館見学

#### 11月例会

2006年11月13日（月）／ 専修大学図書館 参加者数：9名

- ・各大学におけるオンライン・データベース導入状況について
- ・レファレンス事例研究
- ・専門機関探訪について
- ・研究部運営委員・分科会代表者合同会議の報告
- ・図書館見学

### 12月例会

2006年12月21日（木）／ 立教大学図書館 参加者数：8名

- ・文献レビュー
- ・専門機関探訪について
- ・研究テーマ・共同研究活動について
- ・図書館および関連施設見学

### 1月例会（専門機関探訪）

2007年1月25日（木）／ 参加者数：9名

- ・国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館見学
- ・国立西洋美術館研究資料センター見学

### 3月例会

2007年3月12日（月）／ 白鷗大学図書館 参加者数：8名

- ・文献レビュー
- ・研究テーマ・共同研究活動について
- ・図書館見学

## 2) 刊行物及び事業

- ・ニュースレター発行

掲載内容は、前回例会の記録、次回例会のレジュメ、図書館見学記等  
現役会員とOB・OG会員（購読希望者）向けにメールにて配信

## 6. 理工学研究分科会

代表者：内山光子（日本大学）

会員数：4名（正会員：3名／正MLネット会員：1名）

会員：内山光子（日本大学）

新谷睦（芝浦工業大学）

小林瑞希（中央大学）＊梅澤貴典→浅井京子→小林瑞希へ会員変更

山田美佐子（青山学院大学） MLネット会員

年会費：なし

例会開催回数：4回

延べ参加者数：12名

研究分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/rikogaku/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

理工系資料の研究と探索法

#### 2) 活動の概要

- ・電子ジャーナルや各種データベースを中心にした理工系ガイダンスモデルを探る。
- ・2005年度に発表した理工学文献探索ガイダンスの内容充実を図る。
- ・シナリオ（ノート）の作成やバージョンアップしたデータベースの内容修正を行う。
- ・データベース・電子ジャーナルのPPを新規作成し、ガイダンスモデルに追加する。
- ・正会員が少数となったため、メーリングリスト（以下ML）による活動を中心に行った。なお、一大学で2度の会員の交替があり、ML会員が1名減となり、正会員が1名増となった。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

6月例会 6月13日（火） 芝浦工業大学（豊洲校舎） 参加者3名  
芝浦工業大学新図書館 見学

他の研究分科会にも参加者を募集したところ、1名が見学に参加した。

図書館だけでなく、キャンパス全体の見学を行った。

11月例会 11月13日（月） 日本大学（駿河台） 参加者3名  
文献ガイダンス研究：作成PPの修正部分確認

会員の交替に伴い、現在までの活動経過の確認と今後の作業について確認した。

12月例会 12月12日（火） 中央大学（後樂園） 参加者3名  
文献ガイダンス研究：特殊資料別PPの作成についての検討

3月例会 3月22日（木） 芝浦工業大学（大宮） 参加者3名  
文献ガイダンス研究：修正PPの発表と検討

分担した修正PPの合評と今後の活動についての検討

#### 2) 刊行物及び事業

「理工学文献探索データベース Rikoo!」 <http://www.rikoo.jp/index.php>



## 7. 相互協力研究分科会

代表者 : 清水 ゆかり (杏林大学医学図書館)

会員数 : 2007年3月末現在 8名

会 員 :

[正会員] 清水 ゆかり (杏林大学医学図書館) 2006年4月入会

[正会員] 豊島 寛 (麗澤大学図書館) 2006年4月入会

[正会員] 佐藤 和栄 (立教大学人文科学系図書館) 2006年9月入会

[正 ML ネット会員] 高木 直子 (清泉女子大学附属図書館) 2006年4月入会

[正 ML ネット会員] 青木 仕 (順天堂大学図書館) 2006年8月入会

[正 ML ネット会員] 石橋 好重 (北里大学医学図書館) 2007年3月入会

[個人会員] 大谷 健人 (日本大学生物資源科学部)

2006年4月正会員として入会 7月異動のため個人会員へ

[個人 ML ネット会員] 鶴田 香織 (大東文化大学) 2006年12月入会

※ 菊地 祐子 (東京薬科大学情報センター)

2006年4月正会員として入会 7月異動のため退会

年会費 : 正会員 5,000円 正 ML ネット会員 1,000円

例会開催回数 : 9回 (夏期研究合宿を含む)

延べ参加者数 : 38名

研究分科会ホームページ URL : <http://www.jaspul.org/e-kenkyu/sogokyoryoku/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

私立大学図書館 ILL の現状分析

#### 2) 活動の概要

ILL の現状分析をテーマに、ILL に関連すると思われること全般について、例会や ML を中心に活発に意見と情報を交わした。

また人的ネットワークを広げることを大切にした。

相互協力は人的ネットワークが命だからである。

まずは身近なところから知るために、会員の所属する図書館のシステム状況や運営状況、ILL における問題点等を随時報告し合い、他館に対する認識を深めた。

例会は基本的に会員の所属する大学を持ち回りで会場とし、会場となった大学の図書館見学を必ず設けるようにした。

また、著作権法について、近年伸びているクロネコメール便を使用した際の到着状況調査結果についてなど、現場に役立つ情報を参考文献等で提示することによって、新たな知識を得られる会となるよう努めた。

進んで他の分科会との交流に努め、7月には昭和女子大学図書館におけるレファレンス研究分科会主催の講演会に参加、12月には同じくレファレンス研究分科会と合同で立教大学の図書館4館を見学している。

夏期研究合宿では、大阪大学附属図書館生命科学分館と国立国会図書館関西館の見学を実施し、一番の目的である阪大生命科学分館では、ILL 受付件数全国トップ

の現場を実際に見学することによって、ILL 業務に対する知識を深めると同時に、国立大学図書館員諸君との交流を図った。

11月の私立大学図書館協会東地区部会2006年度研究会では「ILLの現場から：大阪大学附属図書館生命科学分館見学レポート」と題し、夏期研究合宿の報告をPPTと作成した見学ビデオを使用して発表し、成果をあげた。

1月からは「図書館のホームページから見た相互貸借業務の分析」を共同研究のテーマに掲げ、私立大学図書館協会東地区部会249校をHP上から調査することから始めている。

また今後共同研究をするに当たり、情報の共有化を図るため、3月、wikiに相互協力研究分科会のページを立ち上げた。[http://wiki.livedoor.jp/yukari\\_kyorin](http://wiki.livedoor.jp/yukari_kyorin)

## 資料

### 1) 月例会テーマ

[4月例会]

2006年4月20日(木) / 東京農業大学 参加者数：7名

- ・ 第14期相互協力研究分科会マニュアルと活動内容の説明
- ・ 事前アンケートを用いた自己紹介
- ・ 役割分担決めと引継ぎ
- ・ 図書館見学

[5月例会]

2006年5月18日(木) / 東京薬科大学 参加者：4名

- ・ 事務連絡・報告
- ・ 研究テーマについて
- ・ 夏期合宿について
- ・ 図書館見学

[6月例会]

2006年6月22日(木) / 麗澤大学 参加者：4名

- ・ 事務連絡・報告
- ・ 5/19第1回運営委員・代表者合同会議の報告
- ・ 夏期合宿について
- ・ ILLと著作権問題について
- ・ ヤマトクロネコメール便到着状況調査報告

[7月例会]

2006年7月20日(木) / 昭和女子大学 参加者：2名

- ・ 私図協事務局との話し合い
- ・ 夏期合宿について
- ・ 今後の活動について
- ・ レファレンス研究分科会主催昭和女子大学大串夏身教授による講演会「レファレンスと昨今の図書館事情について」に参加

[夏期合宿]

2006年8月30日(火)～31日(水) 参加者：計5名

- ・ 8/30 大阪大学附属図書館生命科学分館見学
- ・ 8/31 国立国会図書館関西館見学

[10月例会]

2006年10月20日(金)／順天堂大学 参加者：5名

- ・ 新会員の紹介
- ・ 合宿の反省・感想等
- ・ 研究会発表について内容確認・討議
- ・ 図書館見学

[12月例会]

2006年12月21日(木)／立教大学 参加者：5名

- ・ 事務連絡・報告
- ・ 11/10の第2回運営委員・代表者合同会議の報告
- ・ 研究テーマについて
- ・ レファレンス研究分科会との図書館合同見学

[1月例会]

2007年1月18日(木)／杏林大学 参加者：3名

- ・ 図書館見学
- ・ 事務連絡・報告
- ・ 相互協力研究分科会マニュアルの改訂について
- ・ 研究テーマについて(テーマ決定)

[3月例会]

2007年3月16日(金)／清泉女子大学 参加者：3名

- ・ 研究テーマについて(アンケート項目と調査館の検討)
- ・ 旧島津公爵邸見学
- ・ 図書館見学

## 2) 刊行物及び事業

今年度はなし。

## 8. 西洋古版本研究分科会

代表者：金田 陽治（成城大学）

副代表者：五島 正美（中央大学）

会員数：6名

会員：泉 浩三（東京薬科大学）

伊原亜由美（日本データベース開発㈱、立教大学図書館業務受託職員）

金田 陽治（成城大学）

五島 正美（中央大学）

坪谷 卓浩（日本体育大学）

松尾 亜子（早稲田大学）

年会費：5,000円

例会開催回数：10回（夏季集中研究会を含む）

述べ参加人数：65人

### 活動

#### 1) 基本テーマ

- ①西洋古版本に関する書誌学的研究（書誌学的知識の習得をも含む）
- ②資料収集、整理、保存、展示など、図書館で実際に古典資料を扱う際に必要な知識の習得

#### 2) 月例会概要

まず始めに、ヨーロッパの活版印刷の歴史についての基本的文献を読み、その後詳細目録の作成を学んだ。それらの知識を基に、各自が所属する機関で所蔵している古典資料について、個人研究・発表を行なっている。

#### 3) 月例会テーマ

##### 4月例会

4月28日（金） 明治大学中央図書館 参加者7名

- ①前年度からの引継ぎ
- ②図書館見学

##### 5月例会

5月24日（水） 成城大学図書館 参加者6名

- ①前年度の研究発表の紹介
- ②今年度の活動計画

##### 6月例会

6月22日（水） 早稲田大学中央図書館 参加者6名

- ①合宿内容検討
- ②西洋印刷史基本文献まとめ1  
文献名：フェーヴル、マルタン著『書物の出現』
- ③図書館見学

##### 7月例会

7月19日（水） 中央大学中央図書館 参加者6名

- ①夏季集中研究会打ち合わせ
- ②西洋印刷史基本文献まとめ2

③図書館見学

9月夏季集中研究会

9月11日（月）～12日（火）

早稲田大学中央図書館 参加者（延べ人数）：20名（講師含む）

雪嶋宏一氏（早稲田大学図書館）を講師に招き、詳細書誌の作成演習を2日間に渡り行なった。

10月例会

10月24日（火） 立教大学図書館新座保存書庫 参加者6名

①夏季集中研究会で作成した書誌の発表

11月例会

11月14日（火） 印刷博物館 参加者6名

①企画展示「近代印刷のあけぼの—スタンホープと産業革命」他見学

12月例会

12月 8日（金） 立教大学図書館新座保存書庫 参加者6名

①書誌調査 Johnson's Dictionary

②施設見学

1月例会

1月16日（火） 東京薬科大学情報センター 参加者6名

①個人研究発表1

②個人研究発表2

③センター所蔵貴重書見学

3月例会

3月20日（火） 日本体育大学図書館 参加者6名

①個人研究発表3

②個人研究発表4

③図書館見学

## 9. 企画広報研究分科会

代表者：富田喜恵（中央学院大学）

会員数：10名（正会員：8名／正ネット会員：2名）

会 員：石川敬史（工学院大学） 佐藤朝子（東洋英和女学院大学）

清水弥生子（東洋学園大学） 関口千登世（城西大学）

高橋瑞江（桜美林大学） 遠山有紀（学習院大学）

中山絵里（東洋大学）

鏑木恵美（東京国際大学/ML 会員） 生野諭（多摩美術大学/ML 会員）

年会費：5,000円（会員）／ 2,000円（ML 会員）

例会開催回数：11回（夏期集中研究会含む）

延べ参加者数：85名

研究分科会ホームページ URL: <http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

図書館広報研究と共同利用ツールの開発・運用及びパスファインダーバンクの運用管理

#### 2) 活動の概要

- ① 「パスファインダーバンク」の運用管理。バンクへの登録依頼を前提に、パスファインダーの全国調査を行った。また、登録規定の見直しや、雛型の作成により、バンクの利用活性化を目指した。
- ② 各館で共同利用できる新しい広報ツールの企画として葉、ビニール袋の製作に向けて準備をすすめた。
- ③ パスファインダーの普及目的と、実践的な広報関係の講習会開催に向けて準備をすすめた。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

##### 4月例会

2006年4月19日（水）／ 昭和女子大学

参加者13名（前期会員5名含む）

- ・ 自己紹介
- ・ 前期会員より引継ぎ
- ・ 運営委員の決定
- ・ 図書館見学

##### 5月例会

2006年5月12日（金）／ 工学院大学

参加者8名

- ・ 今後の例会スケジュール調整
- ・ 今期のテーマ検討
- ・ 雑誌『専門図書館』からのパスファインダーバンクについての原稿依頼の件
- ・ 図書館見学

## 6月例会

2006年6月15日(木) / 東洋英和女学院大学

参加者8名

- ・ 次回例会の内容検討
- ・ 企画広報研究分科会 HP のリニューアルについて
- ・ 代表者会議報告
- ・ 夏期研究会について
- ・ 主催講演会についての詳細検討
- ・ Lib.PR の運営について
- ・ 図書館見学

## 7月例会

2006年7月6日(木) / 第17回国際文具紙製品展 専門セミナー 東京ビックサイト

参加者7名

- ・ パソコン・手書きを効果的に活用した『売れるPOP』作成のノウハウ  
(株)POP 研究所 代表取締役 中山政男氏
- ・ 新規・固定客獲得のための定期講座・イベント運営ノウハウ  
(有)メモリーメモリー 代表 高松ますみ氏

上記のセミナー受講

- ・ 夏季集中研究会について

## 夏季集中研究会

2006年9月5日(火)6日(水) / 工学院大学

参加者8名

- ・ パスファインダー調査結果報告
- ・ 分科会ホームページリニューアル
- ・ パスファインダーバンクの運用規程検討、改定作業
- ・ 主催講演会について

## 10月例会

2006年10月12日(火) / 桜美林大学

参加者7名

- ・ Lib.PR の HP の改訂、追加作業
- ・ パスファインダーバンクのアンケート結果報告と今後について
- ・ 各自作成パスファインダーのテーマ決定
- ・ 主催講演会について
- ・ 図書館見学

## 11月例会

2006年11月14日(火) / 東洋大学白山キャンパス

参加者8名

- ・ 代表者会議報告
- ・ パスファインダーバンクのサイトリニューアルについて
- ・ 主催講演会について (講師・時期・場所決定)
- ・ 図書館見学

### 12月例会

2006年12月12日（火） / 学習院大学

参加者6名

- ・ 今後の分科会スケジュール詳細決定
- ・ 製作物（葉・ブックカバー・ビニール袋）の製作について
- ・ パスファインダーバンク HP のリニューアル画面構成について
- ・ 主催講演会について
- ・ 図書館見学

### 1月例会

2007年1月26日（金） / 中央学院大学

参加者7名

- ・ 広報グッズの製作班と講演会班に分かれて各自検討
- ・ 広報班⇒製作物決定、デザイナー及び業者選定
- ・ 講演班⇒企画書作成打ち合わせ、講師講演会下見について

### 2月例会

2007年2月26日（月） / 城西大学

参加者7名

- ・ 広報グッズ作成版と講演会版に分かれて各自検討
- ・ 広報班⇒葉2種と、ビニール袋作成を決定。デザイナー選定。
- ・ 講演班⇒企画書作成と、スケジュール詳細詰め

### 3月例会

2007年3月27日（火） / 東洋英和大学（六本木キャンパス）

参加者6名

- ・ 各自作成したパスファインダー雛形の確認。  
パスファインダー新規登録大学への依頼確認。
- ・ 広報班⇒ビニール袋作成業者選定など
- ・ 講演班⇒牟田さん講演会参加報告、企画書完成

## **2) 刊行物及び事業**

- ・ 今年度は特になし



## 10. 和漢古典籍研究分科会

代表者： 山田裕之（多摩美術大学）

会員数： 9名 + 講師1名

会 員： 石崎由香利（昭和女子大学）                      井上玲子（中央大学）  
          志村久美（大正大学）                                鈴木京子（専修大学）  
          関原暁子（東京家政学院大学）                    永瀬洋子（駒澤大学）  
          沼田晃佑（身延山大学）                            細野美里（立教大学）  
          山田裕之（多摩美術大学）  
          高橋良政講師（日本大学）

年会費： 2,000円

例会開催日数： 10回（夏期研究合宿を含む）

延べ参加者数： 80名

研究分科会ホームページURL： なし

### 活動

#### 1) 基本テーマ

日本・朝鮮・中国で刊行された古籍についての書誌学的研究を通じて、大学図書館員としての知識の深化、技能の向上を図る。研究成果の社会への還元も目指す。

#### 2) 活動の概要

- ・ 古籍・書誌学について知識を得る為、基礎的文献をテキストとして輪読。  
今年度テキスト： 廣庭基介，長友千代治著『日本書誌学を学ぶ人のために』 世界思想社，1998
- ・ 書誌作成実習。会場提供担当校の会員が事前に配布した関連資料に基づいて会員が各自調書を作成、月例会の場で照合をする形。また会場校所蔵の古籍についても改めて調書を作成してみる。適宜講師の批評・指導を受けた。
- ・ 外部見学会を実施。初心者が多い今年度の分科会の現状を鑑み、書誌学的学習のみに止まらないより広範な古籍についての知識を実際的に得ようとする試み。博物館や美術館、古書街等を巡り技術史的側面、貴重書の世界から流通の現況に至るまで多様なアプローチで理解を深めた。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

第1回：2006年4月14日（金） 於立教大学図書館・参加9名

- ①会員自己紹介。2006年度運営担当者の決定、会計引継ぎ等
- ②今年度活動方針・スケジュールの策定
- ③沼田会員による調書作成の実演

第2回：2006年5月26日（金） 於多摩美術大学上野毛図書館・参加9名

- ①2006年度会費徴収
- ②テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読
- ③館蔵古籍の中から各自選択したタイトルについて調書を作成。講師の指導を受ける  
・『薄雪物語』ほか出品16タイトルの内
- ④会場校図書館見学

第3回：2006年6月23日（金） 於駒澤大学図書館・参加8名

- ①夏期研究合宿の日程・内容の検討

②テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読

③館蔵貴重書の電子化作業見学（業者説明）

④調書作成実習

・濯足文庫資料 10 タイトルの内から選択

⑤会場校図書館見学

第4回：2006年7月11日（火） 於大正大学図書館・参加8名

①テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読

②調書作成実習

・『節用集』（駒沢大学図書館蔵）

・『二人若衆對紫色』（大正大学図書館蔵）ほか

③会場校図書館見学

第5回（夏期研究合宿）：2006年8月2日（水）～4日（金）

於身延山大学図書館・参加7名

①会場校図書館見学

②2日間に亘る調書作成実習

③同大望月真澄教授による講演「身延文庫の来歴」拝聴

④関連諸施設見学

⑤和紙漉き体験学習

第6回：2006年10月20日（金） 於中央大学図書館・参加8名

①テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読

②調書作成実習

・『刺字集』（中央大学図書館蔵）ほか

③会場校図書館見学

第7回（見学会）：2006年11月17日（金） 参加10名

①印刷博物館見学

②神田神保町書店街探索

③東京古典会入札会展観を見学（於東京古書会館）

第8回（見学会）：2006年12月12日（火） 於静嘉堂文庫・参加8名

①「中国・日本の貴重書」展見学（学芸員解説）

第9回：2007年1月26日（金） 於昭和女子大学図書館・参加6名

①テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読

②調書作成実習

・『青標紙』（昭和女子大学図書館蔵）

・『伊勢物語』数種ほか館蔵資料から選択

③会場校図書館見学

第10回：2007年3月23日（金） 於東京家政学院大学・参加7名

①テキスト『日本書誌学を学ぶ人のために』輪読

②調書作成実習

・『日用食性』（東京家政学院大学図書館蔵）ほか

③次年度研究発表についての企画立案

④会場校図書館見学

## 2) 刊行物及び事業

なし

## 1 1 . 北海道地区研究分科会

代表者：京谷 正博（札幌学院大学）

会員数：7名

会 員：森 俊司（札幌大学） 宮川 淳子（北星学園大学）  
田鎖 晴英（北海学園大学） 酒井 哲哉（北海学園大学）  
宮崎 隆志（北海道医療大学） 照井 俊秀（酪農学園大学）

年会費：無料

例会開催回数：6回／延べ参加人数：91名

研究分科会ホームページ：無し

### 活 動

#### 1) 基本活動テーマ

- ①大学図書館の利用と相互協力を促進する研究
- ②図書館業務の改善と図書館職員の資質向上を目指した研究
- ③その他、大学図書館における諸課題についての研究

#### 2) 活動の概要

本研究分科会の活動は、会員個人による研究報告と、北海道地区私立大学図書館協議会の研修事業への共催・参加から成り立っている。

例会での個人研究報告は、①「札幌学院大学図書館における情報リテラシーガイダンスについて」と題し札幌学院大学で初年度導入教育として行われている全学共通科目「論述・作文」という講義と図書館とが連携して実施している情報リテラシーガイダンスについて、その企画から実施の概要、札幌学院大学図書館における利用者教育の課題と展望についての報告と、②「オペレーションリサーチの勉強」と題して図書館業務の効率化を目的としたオペレーションリサーチの手法、特に合理的な工程管理への応用についてであった。

研修事業の第1回目は、高等学校で「情報」を学んだ生徒が大学に入学することになり、大学図書館としてどのような対応が必要か探るため、「高校の情報教育と大学図書館の情報リテラシー」と題して、高等学校で「情報」の授業を担当している教諭から実際に高等学校で行われている「情報」の授業内容についての講演をいただいた。

第2回目は、大学として外部資金の導入が叫ばれる中、図書館としてどうすれば外部資金の導入を行うことができるかを探るため、「大学図書館における私学助成金の活用」と題して、丸善株式会社の補助金導入コンサルタント部門の担当者から文部科学省を中心とした各種補助金の概要についての説明と、補助金獲得のための図書館事業の計画や申請手続について事例を基にした講演をいただいた。

第3回目は、大学図書館が直面している問題として、他の事務系部署との人事異動、人員削減、アウトソーシング等、図書館職員の在り方そのものが問われている。このような状況の中で、なぜ専門の職員による運営が必要なのかを

「大学図書館職員の専門性を考える」と題して、道地区私大図書館協議会加盟館からのアンケートに基づく講演を、藤女子大学図書館情報学課程講師の下田氏からいただいた。

### 3) 来年度への課題、展望

地区研究分科会としての特徴を出せるように、大学図書館の利用と相互協力を推進する研究と、図書館業務の改善、図書館職員の質的向上を目指した研究、利用者の情報リテラシー能力向上を目指した研究を展開したいと考えている。

#### 資料

##### 1) 月例会テーマ

- 第1回例会 5月12日 酪農学園大学 参加者：6大学6名  
テーマ：「今年度の活動計画について」  
報告者：京谷正博（札幌学院大学）
- 第2回例会 7月14日 北海学園大学 参加者：11大学25名  
テーマ：「高校の情報教育と大学図書館の情報リテラシー」  
報告者：奥村 稔（北海道札幌北高等学校教諭）
- 第3回例会 9月22日 札幌学院大学 参加者：6大学8名  
テーマ：「札幌学院大学図書館における情報リテラシーガイダンスについて」  
報告者：京谷正博（札幌学院大学）
- 第4回例会 10月13日 札幌学院大学 参加者：15大学19名  
テーマ：「大学図書館における私学助成金の活用」  
報告者：前野 崇（丸善株式会社教育・学術事業本部  
環境デザイン事業部企画・管理室）
- 第5回例会 11月24日 札幌学院大学 参加者：6大学6名  
テーマ：「オペレーションズリサーチの勉強」  
報告者：宮崎隆志（北海道医療大学）
- 第6回例会 12月11日 藤女子大学 参加者：13大学27名  
テーマ：「大学図書館職員の専門性を考える」  
報告者：下田尊久（藤女子大学図書館情報学課程講師）

##### 2) 刊行物及び事業

北海道地区大学図書館協議会『会報』（北海道地区研究分科会の報告を掲載）

## 12. メタデータ研究分科会

代表者：鈴木 学（日本女子大学）

会員数：3機関 3名（2007年3月27日現在）

会員：（正）MLネット会員 3名

鈴木 学（日本女子大学）

池内 みさを（札幌大学）

藤巻 淑子（獨協大学）

ML投稿数： 196本

※月例会を開催しないため二年度分のMLへの投稿本数を示す（3月末現在）

### ○2006年度の活動

今期で3期目を迎えたメタデータ研究分科会では、以下の二つを活動方針としている。

- ・ 現在話題となっているメタデータについて、その成立過程から理念、実際の運用・適用について研究・調査を行う。また、メタデータだけではなくその周辺領域についても研究の対象とする。メタデータそのものの技術的視点のみならず、その理念哲学等についても探求していく。
- ・ 研究対象の柱となるものはメタデータであるが、具体的な研究対象とする文献や実例等は参加者の討議の上随時決定し取り上げていく。

これは分科会設立当初から変わらない。少ない会員数ではあるものの、活動方針に沿って研究活動を進めている。2年度の活動を大まかに3つに区切り年度の研究計画を立てているが、今年度については、前期のメンバーがそのまま継続して参加しているので、研究課題も継続することとした。前期は実際にメタデータを記述することそれ自体を目標としてきたので、今期はそれに引き続いて、前期の体験的記述から、さらに記述数を増やすとともにその使い勝手を検証することを課題としている。ちなみに、前期の課題は以下の通り。

#### ・ 課題

各図書館目録規則およびメタデータ規則でウェブサイトの目録を作成する実験。

#### ・ 主旨

実際のインターネット情報資源の目録を作成してみることで、それぞれの情報資源のどの部分をどのように解釈できるのかを捉える。さらには、分野ごとでのメタデータ規則の共通点および差異を実感することを目標とする。

#### ・ 方法

実際に記述するにあたっては、DC-lib準拠の「メタデータ記述システム」を開発し、各要素に対する入力を行うことでメタデータを生成するシステムを利用した。システムへの入力にあたって問題となった点を検証し、さらに記述の助けとなるような仕組みにはどのようなものがあればよいかを検討した。それらをシステムに反映できるように考察している段階である。この作業は引き続いて来期への課題として位置づけている。

### ○まとめ

前期のまとめとして報告したメタデータの活用については、現時点においても依然として

明確な像として捉えるには至っていない。そんな中、旧分科会所属者を代表として学会での発表を行えたことは一つの研究成果であるとともに、活用事例として今後検証していく内容を伴う。またそれを糸口として今後の具体的な開発へと発展していくことが望まれる。

・2006年度日本図書館情報学会春季研究集会

「図書館員の勉強会と連携したメタデータ実験システム」

兼宗 進（一橋大学総合情報処理センター）

開催日時：2006年5月27日（土） 10時30分～17時20分（発表：14：00～14：30）

開催場所：大東文化大学 板橋キャンパス

次年度も引き続いて課題に取り組み、メタデータが図書館活動とどのように結びつくのか見極めていきたい。またメタデータを通して、改めて目録の果たすべき役割は何であったのか、あわせて見直す必要もある。

また最近のメタデータに関する具体的な動きを捉えるため、下記の会議に出席した。図書館目録的な指向ではなかったもののメタデータを使った様々な取り組みを確認した。

・第32回デジタル図書館ワークショップ（平成19年3月9日(金)）

会 場：筑波大学東京キャンパス

研究発表

(1)教育図書館における複数コレクションの提供 江草 由佳（国立教育政策研究所）

(2)AIRwayプロジェクト：機関リポジトリ活用のためのリンキングサービスの構築

嶋田 晋（筑波大学附属図書館）ほか

(3)メタデータスキーマの再利用を指向したスキーマ設計支援システム

庄山 和男（筑波大学）ほか

講 演

「RDFとメタデータの相互運用」神崎 正英（ゼノン・リミテッド・パートナーズ）

パネルディスカッション

「メタデータの相互運用は本当に可能か」

パネリスト：中井 万知子（国立国会図書館）村田 良二（東京国立博物館）

五島 敏芳（国文学研究資料館）神崎 正英

コーディネータ

宇陀 則彦（筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科）

参資資料

The Dublin Core Metadata Initiative（ウェブサイト）

<http://dublincore.org/index.shtml>

Library Application Profile（ウェブサイト）

<http://dublincore.org/documents/library-application-profile/index.shtml>

研究図書館目録の危機と将来像－3機関の報告書から－

渡邊 隆弘（帝塚山学院大学）

カレントアウェアネス（季刊）

以上

### 13. 情報リテラシー教育研究分科会

代表者：内堀勇二（立教大学）

会員数：5名

会員：荒井啓太（桜美林大学）、伊藤親子（中央大学）、溝渕雄一郎（杉野服飾大学）  
樋口知義（東洋大学）、内堀勇二（立教大学）

年会費：3000円

例会開催回数：9回

延べ参加者数：26名

研究分科会ホームページURL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/joholite/index.html>

#### 活動

##### 1) 基本テーマ

「情報検索ガイダンスにおける業務マニュアル骨子の整備化」

##### 2) 活動の概要

図書館員が主体となって行う「情報リテラシー教育」に関しては会員校の各大学共に業務がマニュアル化されておらず、現担当者に頼りきりとなっている現状を認識し、業務の継承性の問題が浮き彫りとなった。この状況を鑑みて、「情報検索ガイダンスにおける業務マニュアル骨子の整備化」を基本テーマとし、研究を進めていく。

#### 資料

##### 1) 月例会テーマ[月日・会場・テーマ等]

###### 第一回月例会

月日：4月21日

会場：学習院大学法経図書センター

テーマ：第三期役員選出、第二期～第三期引継ぎ業務の確認

###### 第二回月例会

月日：6月20日

会場：立教大学図書館本館

テーマ：「担当者教育」「ガイダンス効果の測定」についての研究調査

###### 第三回月例会

月日：7月26日

会場：杉野服飾大学附属図書館

テーマ：研究テーマの絞込み（「担当者教育」のみへ）  
夏季集中研究の準備

###### 夏期集中研究

月日：9月5日、6日

会場：桜美林大学新宿キャンパス

テーマ：大学図書館組織としてのガイダンス業務の流れの確認  
会員校のガイダンスの実演

#### 第四回月例会

月日：10月25日

会場：東洋大学川越図書館

テーマ：研究テーマの決定「ガイダンス業務のマニュアル化」  
中間発表の形式の確認

#### 第五回月例会

月日：11月29日

会場：中央大学後楽園キャンパス図書館

テーマ：研究テーマ範囲の決定「図書館員が主体となる情報リテラシー教育」  
※ 新入生オリエンテーションレベルの内容を除く  
中間発表の準備

#### 第六回月例会

月日：12月20日

会場：立教大学図書館本館

テーマ：「中間発表」の準備とその媒体に関する「アンケート」の企画

#### 第七回月例会

月日：2月21日

会場：杉野服飾大学附属図書館

テーマ：「中間発表」の最終確認とその媒体に関する「アンケート」の決定  
次年度の分科会年間予定の確認

#### 第八回月例会

月日：3月22日

会場：桜美林大学新宿キャンパス

テーマ：「研究報告書」のモデル文書の確認  
「中間発表」HP公開と「アンケート」の回収経過確認

## 2) 刊行物及び事業

『情報リテラシー教育研究分科会報告書』

以 上



## 14. L-ラーニング学習支援システム研究分科会

代表者：阿部潤也（東京歯科大学）

会員数：5校5名

会 員：阿部潤也（東京歯科大学）

小田切夕子（麻布大学）

金子和代（早稲田大学）

佐藤稔彦（駒沢大学）

田代陽子（日本女子大学）

年会費：3,000円

例会開催回数：4回

延べ参加者数：29名

研究分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/11s/>

### 活動

#### 1) 基本テーマ

大学図書館員の自己点検、自己評価、自己研鑽を目的とした学習支援システムの構築ならびに評価、分析

#### 2) 活動の概要

体系的な学習ページを、より一層充実させることを目指した。WBT (Web Based Training) の基本ツールとして Xoops を採用してきたが、e-learning に特化した Moodle への移行を検討してきた。また、学習者が楽しく学べることをポイントとし、RPG によるレファレンス業務演習プログラムの開発に取り組んだ。

### 資料

#### 1) 月例会テーマ

##### 第1回例会

2006年6月2日（金）13：00-17：30 日本女子大学（目白キャンパス）

1. 事務連絡
2. 今期研究テーマ設定
3. その他

##### 第2回例会

2006年8月30日（水）11：00-18：30 東京歯科大学（千葉キャンパス・稲毛）

1. 事務連絡
2. 問題形式の検討
3. 図書館見学
4. その他

##### 第3回例会

2006年12月8日（金）13：00-18：00 麻布大学（相模原）

1. 事務連絡
2. ソフトの検討
3. 問題の検討
4. 次回例会までの作業課題
5. 図書館見学
6. その他

##### 第4回例会

2007年2月22日（木）13：00-18：00 一橋大学（国立）

1. 事務連絡
2. サーバーのレンタルについて
3. Moodle の検討
4. 問題の検討
5. 図書館見学
6. その他

## 2) 刊行物及び事業

第7回インターネット活用教育実践コンクール・社会教育部門に応募し、佳作に選出された。

<http://www.netcon.gr.jp/>

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/02/07022310.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/02/07022310.htm)

### 【Lラー的学習ページ】

<http://www.tdc.ac.jp/lib/lis/>

### 【模擬試験ホームページ】

<http://ml.lss.tama.ac.jp/cgi-bin/tqindex.cgi>

### 【L-ラーニングとは】

図書館員のリテラシーやスキルアップのための自己学習を”L-ラーニング”と命名した。これは、e-ラーニング (WBT=Web-Based Training) を利用したオンライン教育の手法をヒントに考え出した造語である。L-ラーニングのLはLibrary Librarian Literacy をイメージしている。

## 《研究分科会刊行物一覧》

分科会名	分類 研究分科会	逐次刊行物 研究分科会	パブリック・サービス 研究分科会	図書館運営戦略 研究分科会
書名 又は 誌名	なし	逐次刊行物研究分科会報告	問い、学び、行動する図書館員を目指して-2004-2005年度パブリックサービス研究分科会活動報告	なし
刊行 頻度		隔年（その期で1回）	隔年（その期で1回）	
価 格		2,000円（最新号59号）	無料	
発行 部数		200部	100部	
配布 対象 ・ 頒布 方法 ・ 在庫		継続購読約100。会員や当該号執筆者へは無料で頒布、代金支払は銀行口座振替。在庫は要確認、57号より一部について分科会HP上で公開	分科会会員，分科会会員所属機関，私立大学図書館協会関係者，国立国会図書館，国立情報学研究所等の関係機関に配付。	
発行 目的 ・ 主な 内容		逐次刊行物にかかわる研究の公表および分科会の活動報告。 会員の研究発表講演録、分科会活動の概要報告。	2004-2005年度（2年間）の研究・活動の記録および報告。研究報告大会発表資料，共同研究論文（3論文）掲載（リスクマネジメント研究，コンソーシアム研究，人材育成研究）	
コメ ント ・ 今後 の 刊行 予定		第59号より、逐次刊行物研究分科会HPにて全文公開。	パブリックサービス研究分科会HPにて全文公開。	

分科会名	レファレンス 研究分科会		理 工 学 研究分科会	相 互 協 力 研究分科会
書名 又は 誌名	レファレンス研究分科会 ニュース	レファレンス研究分科会 報告2004～2005	理工学情報探索データ ベース Rikoo	相互協力研究分科会報告 (ISSN0916-0078)
刊行 頻度	月1回	不定期		隔年（2年に1回）
価 格	無料	無料	無料	無料
発行 部数		100部		
配布 対象 ・ 頒布 方法 ・ 在庫	分科会会員、OB・OG会員 (購読希望者)宛てに、 メール添付文書にて配 信。	分科会会員、分科会会員 所属機関、途中退会した 会員、OB・OG会員、国会 図書館、都立図書館、専 門機関探訪で訪問した機 関などに配布。 在庫は数十部。	Webによる公開 <a href="http://www.rikoo.jp/index.php">http://www.rikoo.jp/in dex.php</a> 頒布対象は特になし。	国立国会図書館、その期 の会員、次期会員、各期 の代表者、他 在庫：創刊号から10号ま で各3冊
発行 目的 ・ 主な 内容	事務連絡、前回の例会の 記録、研究発表レジュ メ、図書館見学記等	グループ研究、専門機関 探訪、講演記録、事例研 究等	主な理工系資料を冊子、 Web情報も含めて分野 別、形態別に出し、 データベースを作成し た。分野はNDCの自然科 学と工学のみとし、医 学・薬学は対象から外し た。作成に当たっては データ更新を可能とする ためにCGIを利用した管 理者用フォームを作成し た。現在データを更新中 である。	研究活動の成果をまとめ る意味で報告書の形式と して残し、また、参加し ていない人にも役立つよ う努める。
コメ ント ・ 今後 の 刊行 予定			分科会会員によるデータ 新規登録・更新作業を随 時実施中。	毎期ごとに刊行の予定。

分科 会名	西洋古版本 研究分科会	企画広報 研究分科会		和漢古典籍 研究分科会
書名 又は 誌名	なし	Pathfinder Bank	Lib.PR:図書館広報実践 支援サイト	なし
刊行 頻度		随時更新	随時更新	
価 格		無料	無料	
発行 部数				
配布 対象 ・ 頒布 方法 ・ 在庫		Webによる公開 <a href="http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/pfb/">http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/pfb/</a>	Webによる公開 <a href="http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/libpr/">http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/libpr/</a>	
発行 目的 ・ 主な 内容		目的：利用者教育に役立つ共同利用ツールの提供。 内容：図書館や研究機関等が個別に作成しているパスファインダーをWeb上に収集し、共同利用を可能にしたサイト。	目的：図書館広報に関する知識を共有し、図書館の広報活動に役立つ。 内容：利用者に伝わる広報のポイントを紹介し、さらに広報にそのまま使える便利なツールを集めたサイト。	
コメ ント ・ 今後 の 刊行 予定				

分科 会名	北海道地区 研究分科会	メタデータ 研究分科会	情報リテラシー教育 研究分科会	ラーニング 学習支援システム 研究分科会
書名 又は 誌名	北海道地区私立大学図書 館協議会会報	なし	『情報リテラシー教育研 究分科会報告書』第2 号, ISSN1349-2055	なし
刊行 頻度	年1回発行		単発	
価 格	無料		無料	
発行 部数	100部		100部	
配布 対象 ・ 頒布 方法 ・ 在庫	協議会会員館および関係 団体に配布		現会員・前期会員、研究 対象となった大学に配布	
発行 目的 ・ 主な 内容	北海道地区の私立大学図 書館間の意思疎通をはかり、共通問題について討 議する。内容は、会務報 告、東地区研究分科会の 活動報告、加盟館の現況 (統計と動向) からな る。		2004-2005年度の当分科 会の活動報告書。発表し た内容や2年間の活動成 果を掲載したもの。	
コメ ント ・ 今後 の 刊行 予定				

## 《2006 年度研究分科会月例会について（報告）》

研究部担当理事校 国土舘大学附属図書館 【2005 年度 4 月から担当】  
月例会担当理事校 立正大学情報メディアセンター 【2005 年度 4 月から担当】

### 1. 月例会・夏期研究合宿開催状況

研究分科会名称	月例会開催数	夏期合宿（集中研究会）開催期間
分類研究分科会	10	8 月 30 日～9 月 1 日
逐次刊行物研究分科会	9	8 月 7 日～8 月 8 日
パブリック・サービス研究分科会	9	8 月 21 日～8 月 23 日
図書館運営戦略研究分科会	9	8 月 21 日～8 月 22 日
レファレンス研究分科会	9	9 月 14 日～9 月 15 日
理工学研究分科会	4 (*1)	
相互協力研究分科会	8	8 月 30 日～8 月 31 日
西洋古版本研究分科会	9	9 月 12 日～9 月 13 日
企画広報研究分科会	10	9 月 5 日～9 月 6 日
和漢古典籍研究分科会	10	8 月 2 日～8 月 4 日
北海道地区研究分科会	6	
メタデータ研究分科会	(*2)	
情報リテラシー教育研究分科会	9	9 月 5 日～9 月 6 日
L-ラーニング学習支援システム研究分科会	4	

(\*1) 月例会以外、メーリングリスト投稿本数：43 本

(\*2) メーリングリストを活動基盤としているため、月例会を開催しない。  
メーリングリストへの投稿本数：196 本

### 2. 2006 年度中の動き

#### 研究分科会会員追加募集（2006 年度臨時実施）

研究分科会会員勤務先の人事異動等に伴う退会により、分科会会員数が減り代表者から分科会活動に影響するとの声があり、運営委員・分科会代表者合同会議にて、追加募集を行う可否を諮った。結果、今年度臨時措置として私立大学図書館協会東地区部会加盟図書館宛に追加募集を実施した。

### 3. 今後の課題

研究分科会は 2 年ごとに更新されるが、継続会員が一人もいない分科会が増えてきている。会員数の減少や継続会員の不在で、分科会の運営に悩んでいる代表者も少なくない。

継続的な研究活動を行っていくためには、現行の分科会成立要件を見直し、発足時の会員数を増やす必要があるのではないか。そのために休会となる分科会があれば、類似の研究テーマを持つ分科会との合併を促がすなど、研究部が主導的な立場から手段を講ずることも必要であろう。併せて、募集時期・募集回数の見直し、募集条件の緩和など、応募が増えるような何らかの対策を取ること、また、会員が継続して参加できるよう加盟館に対し積極的な働きかけを行うこと、更には、分科会の活動期間や研究報告大会の開催方法

について抜本的な見直しを行うことも必要かもしれない。

研究活動は負担だが、知識を得たい、情報交換の場が欲しいという声は多い。図書館勤務年数は長くても初めての業務につくこともある。研究を目的とする分科会のほかに、実務に直結した研修的な分科会が加われば、活動も活性化するのではないか。経験年数にかかわらず誰もが参加しやすい環境となるよう、研究部には柔軟な対応をお願いしたい。



## 《研究講演会》

### 私立大学図書館協会 2006 年度東地区部会研究講演会

日 程：2006 年 6 月 9 日（金） 13：45～16：45  
会 場：鶴見大学 鶴見大学会館 B 1 メインホール  
参加者：216 名

- |              |   |             |
|--------------|---|-------------|
| 受 付          |   | 13：00～      |
| 1. 開会の辞      |   | 13：45～      |
| 司会者（研究部運営委員） | 早稲田大学図書館                                | 長岡 三智子      |
| 2. 挨拶        |   |             |
| 研究部担当理事校     | 国士館大学附属図書館 館長                           | 廣野 行甫       |
| 3. テーマ       |   |             |
| (1) 講演       | 「Google が図書館に与えるインパクト<br>－Web の進化との考察－」 | 14：00～15：00 |
|              | 一橋大学総合情報処理センター 助教授                      | 兼宗 進        |
| 質疑応答         |   | 15：00～15：15 |
| <休 憩>        |   | 15：15～15：30 |
| (2) 講演       | 「ハイブリッド環境下におけるレファレンス<br>サービス支援ツールの開発」   | 15：30～16：30 |
|              | 慶應義塾大学文学部 教授                            | 田村 俊作       |
| 質疑応答         |   | 16：30～16：45 |
| 4. 閉 会       |   |             |

※講演のレジメは、「私立大学図書館協会会報」128号に掲載予定。

## 《研究会（交流会）》

### 2006 年度研究会（交流会）

日 程：2006 年 11 月 10 日（金）

会 場：法政大学多摩キャンパス 百周年記念館（13 号館）国際会議場

参加者：46 大学 60 名

受 付 開 会		14 : 30～
1. 開会の辞		15 : 00～
司会者（研究部運営委員）立正大学情報メディアセンター		佐藤 研一
2. 開会挨拶		
法政大学図書館 館長		公文 溥
3. (1) 講演		15 : 05～16 : 10
・演 題：「魅せる図書館ホームページ」		
・講 師：跡見学園女子大学文学部 助教授		福田 博同
・質 疑		16 : 05～16 : 10
(2) 研究分科会活動報告 I		16 : 10～16 : 30
・演 題：「国立国会図書館のレファレンス協同データベースについて」		
・発表者：レファレンス研究分科		
昭和女子大学図書館		嶋崎 尚代
國學院大学図書館		古越 慶子
桜美林大学図書館		三上 彰
(3) 研究分科会活動報告 II		16 : 30～16 : 50
・演 題：「ILL の現場から-大阪大学附属図書館生命科学分館見学レポート」		
・発表者：相互協力研究分科会		
杏林大学医学図書館		清水 ゆかり
・(2)(3)に対する質疑		16 : 50～16 : 55
意見交換会		17 : 05～18 : 35
会 場：法政大学多摩キャンパス 百周年記念館（13 号館）研修ホール		

※講演のレジメは、「私立大学図書館協会会報」128号に掲載予定。

## 《研修会》

### 2006年度研修会

日 程： 2006年9月26日（火）～9月27日（水）  
会 場： 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール  
参加者： 117大学1機関 148名  
テーマ： 変化するレファレンスサービスの現状と課題

#### 《開催趣旨》

デジタル情報の流通が増大し、図書館を取り巻く環境が大きく変化しています。利用者は図書館に来館してサービスを受けるだけでなく、インターネットによって来館しなくてもサービスを受けることが可能となり、レファレンスサービスにおいても、デジタル通信メディアを利用した試みがなされるなど、情報源や情報提供のありかたが急激に多様化しています。

インターネット上の検索エンジンを用いればデジタル情報を容易に入手できるとはいえ、図書館員は様々な情報源を活用して適切な利用者支援を行うためのスキルが求められています。このような変容の中で図書館の果たす役割は増えこそすれ減るものではないのですが、専任職員の減少傾向にみられるように新たな知識やスキルの習得が厳しいという環境が続いています。

今回の研修ではレファレンスサービスに焦点を当て、進展著しいデジタル情報化に対応したレファレンスサービスの最新動向と、一方で、図書館員にとっては自明であるレファレンスサービスの有用性が利用者には十分に認知されていないという現実に対し、図書館と利用者の溝を埋める方策などを、あわせてこの機会に考えてみたいと思います。

今後のサービス内容を検討する一助となれば幸いです。

#### 《プログラム》

第1日（9月26日）

- |   |                                       |             |
|---|---------------------------------------|-------------|
| * 受付                                      |                                       | 9：45～10：15  |
| * 挨拶・オリエンテーション                            |                                       | 10：15～10：30 |
| 会場担当校挨拶                                   | 慶應義塾大学メディアセンター所長                      | 杉山 伸也       |
| 研修委員長挨拶                                   | 明治大学図書館総合サービス課長                       | 浮塚 利夫       |
| * 基調講演：「大学図書館のレファレンスサービスの現状と課題」           |                                       | 10：30～12：00 |
|   | 慶應義塾大学文学部 教授                          | 田村 俊作       |
| * 講演：「デジタルレファレンスの展望と大学図書館」                |                                       | 13：30～15：00 |
|   | 明治大学文学部 助教授                           | 齋藤 泰則       |
| * 講演：「記録する・使う・伝える<br>ーレファレンス協同データベースの試みー」 |                                       | 15：30～16：40 |
|   | 国立国会図書館 関西館事業部 図書館協力課<br>協力ネットワーク係副主査 | 山元 真樹子      |

- \* 懇親会 : 会場：慶應義塾大学三田キャンパス  
ザ・カフェテリア 北館1階 16:50～18:20

第2日 ( 9月27日)

- \* 講演：「体験的レファレンスサービス論  
ー友達100人できるかなー」 10:00～11:30  
関東学院大学 図書館本館運営課長 高梨 章
- \* 事例報告：「レファレンスツールとしてのパスファインダー  
ー東京学芸大学附属図書館の事例ー」 13:00～13:45  
東京学芸大学 学術情報部情報管理課学術資料係長 村田 輝
- \* 事例報告：「国際基督教大学図書館のレファレンスサービスの  
変遷」 13:50～14:35  
国際基督教大学 図書館グループ長 松山 龍彦
- \* 講演：「今後のレファレンスライブラリアンの役割と  
その育成についてー意思決定を行う立場からー」 15:00～16:00  
慶應義塾大学 信濃町メディアセンター事務長 市古 みどり
- \* まとめとアンケート 16:00～16:10

## 大学図書館のレファレンスサービスの現状と課題

田村 俊作  
(慶應義塾大学文学部)

1. はじめに
2. 大学図書館におけるレファレンスサービスの発展
  - ・ 阪田によるレファレンスサービスの発展段階
  - ・ 実態調査が語るもの
3. 現状と課題
  - ・ デジタル化の影響
    - 直接サービスの変貌
    - 間接サービスへの影響
  - ・ NIIの影響
  - ・ 大綱化・改革の中で
4. 今後に向けて
  - ・ レファレンスサービスの位置づけ
  - ・ 直接サービスの再編成
  - ・ 間接サービスの重要性

### 参考文献

- 1958 北島武彦「大学図書館のレファレンス・サービス：実態調査報告」『図書館学会年報』vol.5, no.2, p.94-110
- 1975 毛利和弘「参考業務の基礎資料：参考業務実態調査報告」『私立大学図書館協会報』no.65, p.63-133
- 1979 長澤雅男, 常盤繁「大学中央館における参考業務の実態」『東京大学教育学部紀要』no.18, p.101-117
- 1988 戸田慎一, 長澤雅男「大規模大学中央館における参考業務の実態：昭和62年度調査」『東京大学教育学部紀要』no.28, p.211-232
- 1989 戸田慎一, 長澤雅男, 海野敏「中規模大学図書館における参考業務の実態：1988年度調査」『東京大学教育学部紀要』no.29, p.121-145
- 1993 阪田蓉子「わが国の大学図書館におけるレファレンス・サービスの発展」『現代レファレンス・サービスの諸相』三浦逸雄, 朝比奈大作編 日外アソシエーツ, p.105-130
- 2000 池谷のぞみ他『大学図書館におけるレファレンスサービスの実態：1999年調査』東洋大学社会学研究所, 102p

関連年表

1933(昭和8)	東京帝大、学生援助のための案内係を置くとの報告
1944(昭和19)	京都帝大に文献調査掛
1951(昭和26)	日本図書館学校(慶應義塾大学)でチェイニー氏によるレファレンスサービスの講義
1952(昭和27)	慶應義塾図書館にレファレンスルーム開室
1953(昭和28)	国立大学図書館改善要項
1954(昭和29)	国際基督教大学にレファレンスルーム開室
1955(昭和30)	私立大学図書館協会東地区部会に閲覧・参考分科会発足 早稲田大学に読書相談室および参考室開室
1956(昭和31)	私立大学図書館改善要項
1961(昭和36)	東京大学附属図書館改善計画案 公立大学図書館改善要項
1964(昭和39)	大学図書館職員講習会
1966(昭和41)	『大学図書館実態調査結果報告』刊行開始
1970(昭和45)	「大学の研究・教育に対する図書館の在り方とその改革について」(国立大学協会第一次報告)
1973(昭和48)	「学術振興に関する当面の基本的な政策について」(学術審議会第三次答申)
1979(昭和54)	図書館情報大学開学
1980(昭和55)	「今後における学術情報システムの在り方について」(学術審議会答申)
1986(昭和61)	学術情報センター設置
1988(昭和63)	国立大学図書館の事務部課名変更
1991(平成3)	大学設置基準一部改正(大綱化)
1994(平成6)	Netscape Navigator発売
1995(平成7)	Windows95発売
1996(平成8)	「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」(学術審議会建議)

表1 レファレンスサービス実施率の変化

	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2003
国立大学	70.3	76.0	74.0	79.4	88.7	86.8	89.8	91.6	95.3
公立大学	37.8	45.5	46.0	68.5	81.0	74.6	80.8	71.6	80.7
私立大学	43.0	38.4	47.3	65.9	81.4	78.2	79.3	75.9	81.7
全体	48.4	46.3	56.9	70.9	83.8	80.5	82.3	79.3	84.7

注:1970年度の数値は発表者が算出

出典:『大学図書館実態調査結果報告 昭和41年度-』文部省大学学術局情報図書館課,1968-

表2 1館平均サービス件数の変化

	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2003
国立大学	4,828	7,050	3,082	2,543	2,421	3,079	4,469	3,614	3,014
公立大学	3,483	1,054	592	789	950	1,217	2,138	1,709	1,741
私立大学	3,599	1,771	1,229	1,041	1,284	1,170	1,767	1,757	1,544
全体	3,979	3,383	2,069	1,621	1,670	1,780	2,594	2,264	1,936

出典:『大学図書館実態調査結果報告 昭和41年度-』文部省大学学術局情報図書館課,1968-

## ARL加盟大学におけるレファレンス処理件数の推移

	1991	1994	1995	1996	1997	2000	2001	2002	2003	2004
アイビー・リーグ校										
ブラウン	N. A.	N. A.	68,765	<b>82,180</b>	81,293	54,963	58,729	54,032	44,383	<b>35,644</b>
コロンビア	N. A.	N. A.	154,429	154,167	128,733	<b>125,633</b>	234,882	<b>251,330</b>	199,022	211,309
コーネル	N. A.	N. A.	<b>238,941</b>	195,014	192,909	133,774	133,679	128,005	127,360	<b>110,122</b>
ペンシルベニア	N. A.	N. A.	391,332	374,480	<b>402,910</b>	272,267	286,573	271,808	<b>220,173</b>	220,367
イエール	N. A.	N. A.	358,164	<b>421,612</b>	310,901	159,366	136,598	133,045	113,360	<b>103,169</b>
注：ダートマス、ハーバード、プリンストンはデータがないため除外										
州立大等										
ラトガース	N. A.	N. A.	324,104	252,599	<b>352,057</b>	160,285	<b>135,255</b>	149,606	145,194	<b>122,443</b>
ミシガン	N. A.	N. A.	<b>322,654</b>	293,922	253,495	221,597	204,310	218,066	<b>182,649</b>	197,385
インディアナ	N. A.	N. A.	<b>643,240</b>	490,890	488,631	496,808	469,820	446,836	308,360	<b>280,436</b>
パークレイ	N. A.	N. A.	<b>218,723</b>	210,050	204,664	196,817	174,767	<b>136,053</b>	159,294	171,624
スタンフォード	N. A.	N. A.	<b>297,134</b>	180,756	165,505	<b>108,240</b>	119,190	112,343	N. A.	N. A.
MIT	N. A.	N. A.	<b>110,343</b>	107,121	101,982	66,112	70,198	64,282	61,008	<b>53,338</b>
ジョージア工科	N. A.	N. A.	124,092	<b>130,584</b>	93,849	52,515	48,478	41,705	38,515	<b>14,031</b>
バージニア工科	N. A.	N. A.	104,815	<b>141,597</b>	113,401	42,964	35,518	<b>26,590</b>	28,306	26,971
ARL全体										
メジアン	133,022	153,607	151,878	157,563	<b>158,294</b>	117,027	105,087	100,656	96,228	<b>87,896</b>
インターネット 関連の 出来事	CD-ROM+ オンライン 検索 サービス	Netscape Navigator 登場	Windows 95発売							

出典：ARL Statistics. Interactive Edition. [http://fisher.lib.virginia.edu/arl/index.html] (最終アクセス2006. 9. 24)  
1991～1994については、全体のメジアンのみ公表されている。

表4 利用者が好む情報源

	実数	%
Web	1,014	71.2
図書館	298	20.9
先生・友人	40	2.8
会社の情報源	14	1.0
自己所有情報源	59	4.1
合計	1,425	100.0

# デジタルレファレンスの 展望と大学図書館

2006年9月26日  
私立大学図書館協会東地区部会研究部研修資料

明治大学文学部 齋藤泰則

## 目次

1. デジタルレファレンスを取り巻く状況
  - 1) 高等教育を巡る状況の変化
  - 2) Webサービスの発展
  - 3) 質問回答文化の醸成
2. デジタルレファレンスの考察
3. デジタルレファレンスの再定義

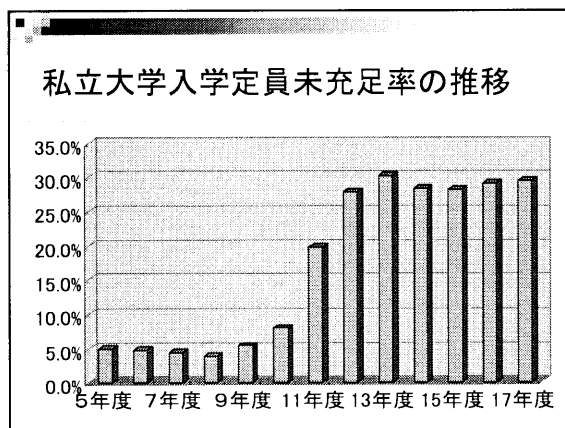
### 1-1) 高等教育を巡る状況の変化

- 18歳人口の減少 ⇒ 入学定員未充足の私立大学が約3割 ⇒ 大学経営戦略の見直し
- 大学改革と競争的環境 ⇒ 文部科学省による助成対象の選別

### 私立大学の入学定員未充足率の推移

(日本私立学校振興・共済事業団調べ)

	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
大学数	385	401	410	419	425	439	450	471	493	508	521	533	542
入学定員未充足の大学	19	19	18	16	23	35	89	131	149	144	147	155	160
未充足割合	4.9%	4.7%	4.4%	3.8%	5.4%	8.0%	19.8%	27.8%	30.2%	28.3%	28.2%	29.1%	29.5%
短大数	494	493	491	491	490	486	489	460	449	435	416	400	383
入学定員未充足の短大	15	18	58	86	139	181	238	287	245	209	190	184	158
未充足割合	3.0%	3.7%	11.8%	17.5%	28.2%	37.2%	50.7%	58.0%	54.6%	48.0%	45.7%	41.0%	41.3%

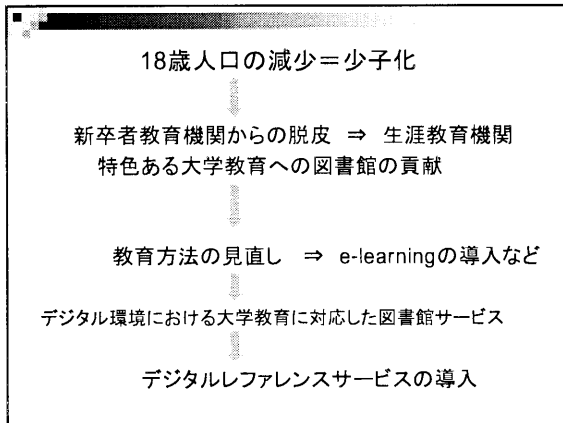


### 文部科学省による国公立大学を通じた 大学教育改革の支援

- 特色ある大学教育支援プログラム  
平成18年度予算額: 35億円(平成17年度予算額: 33億円)  
→ 各大学・短期大学が実施している大学教育の改善に資する取組を、更に充実・発展する特色ある優れた取組を選定・支援するとともに、広く社会に情報提供を実施
- 現代的教育ニーズ取組支援プログラム  
平成18年度予算額: 46億円(平成17年度予算額: 30億円)  
→ 各種審議会からの提言等を踏まえ、社会的要請の強い政策課題に対応した大学・短期大学等における優れた取組を選定・支援するとともに、広く社会に情報提供を実施  
(公募テーマ(案): 地域活性化、環境教育、知的財産関連教育、キャリア教育、e-Learning)

出典: 文部科学省 国公立大学を通じた大学教育改革の支援  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/index.htm)





## 1-2) Webサービスの発展

- Web1.0からWeb2.0へ  
集合知、folksonomy、SNS
- Wikipedia  
巨大な百科事典の形成
- 大学図書館へのGoogleの参入  
図書館蔵書のデジタル化

## Web2.0の特徴

- 1) サービス提供者であること。
- 2) データソースをコントロールすること。
- 3) ユーザの無意識の参加を促すこと／  
集合知を利用すること。  
ユーザによるデータの生成・蓄積・分類・評価
- 4) ロングテールを理解する。

## 集合知としてのWeb情報源

- Folksonomy、social tagging  
学問分類に依拠したtaxonomyとは異なり、ユーザの主観により、コンテンツにタグというメタデータを付与
- SNS (social networking service)  
インターネットを通じたコミュニティ形成型サービス  
Technorati, Hatena::Bookmark

## Web2.0技術の応用例

### SIMILE Timeline project

「SIMILE」とはSemantic Interoperability of Metadata and Information in unLike Environmentsの略)。

このプロジェクトは、W3C、MIT Libraries、MIT CSAILの共同研究で、The Andrew W. Mellon Foundationの支援の下に複数のプロジェクトが進められており、「Timeline」はその1つ。

出典：CNET Japan. “想像力を刺激する「時間軸」をめぐる試み”

## Web上の質問回答コミュニティサービス

**OKWave**  
質問総数 200万件以上、平均回答数 3.5件、満足率 88%  
利用者の方々からの「質問」と「回答」を通じ、世の中のあらゆる問題の解決と、人と人の相互協力のリレーション作りを目指すQ&Aサイト。

**教えて！Goo**  
質問総数： 200万件以上、回答率99%、満足率86%  
教えて！gooは、参加するユーザー同士が「Q」質問と「A」回答をやり取りする大規模Q&Aコミュニティサイト。  
解決された疑問はサイト上に蓄積。

**Oyogi**  
ユーザーがかかえている質問をネット上の専門家(yogi)たちに投げ、答えてもらうためのWebアプリケーション。  
Oyogiには、1) 専門家の皆さんに専門分野(レジュメ)を投稿してもらい検索できる形で登録する、2) Webベースのインスタントメッセージャーを使用してリアルタイムで協力し教え合う、3) 質問したり回答したりする、4) 1、2、3の内容をリアルタイムで検索する、などの機能がある。

(出典 CNET Japan “Web 2.0の旗手：専門家に質問できるノウハウ集サイトOyogi”)

## 百科事典 Wikipedia

- ネット上で誰でもどこからでも自由に文章を書き換えられるシステムWikiの技術を使って、共同で編集するフリーの百科事典。現在、200以上の言語で作成、日本語版は24万項目、英語版は127万項目。
- 特徴:  
その記述内容もレファレンス資料として無視できない精度をもつ。新たな項目が日々追加され、その数が増え続けており、既存の項目についても、最新の知見が反映される仕組みの備わったシステム。
- 問題点:  
その記述内容の正確さ・信頼性(典拠性)であるが、専門家が書き手として参加していること、誤りを発見したい即座に修正できるシステム ⇒ 既存の百科事典に匹敵する精度を確保。

## Googleの戦略と大学図書館

### Googleの図書館プロジェクト

#### プロジェクトの目標:

- 図書館プロジェクトの目的は、著者および出版社の著作権を守りながら、より多くのユーザーを書籍、特に絶版になった書籍のように、ユーザーが他の方法では検索できない書籍を、より簡単に見つけ出すことを支援。
- 最終的な目標は、出版社および図書館と連携して、全ての言語で、全ての書籍を検索可能にすること。それにより、ユーザーは新しい書籍を発見しやすくなり、出版社も新しい読者を開拓。

出典: "図書館プロジェクト - 世界中の書籍の図書カード カタログ"  
<http://books.google.co.jp/intl/ja/googlebooks/library.html>

Google ブック検索

## Googleの図書館プロジェクト提携図書館

### University of California

カリフォルニア大学の10カ所のキャンパスに点在する100を超える図書館に収蔵された数百万冊の書籍をスキャンしてデジタル化し、これらの蔵書を完全に検索可能にする計画

### Harvard University

### University of Michigan

### The New York Public Library

### Oxford University

## 1-3) 質問回答文化の醸成

Web上の質問回答コミュニティサービス

+  
ソーシャルネットワークイングサービス

+  
Wikipedia & Google図書館プロジェクト

見知らぬ他者に質問し、回答を得る  
見知らぬ他者から質問を受け、回答を提供する

↓  
日本社会における質問・回答文化の醸成?

↓  
図書館のレファレンスサービスへの認識につながるか??

## レファレンスサービスとの差別化?

集合知に基づく新たな情報源の登場  
Wikipedia、OKWave、教えて!Go

↓  
クイックレファレンスのツールになりうる?

↓  
図書館のレファレンスサービスとの  
差別化を図れるのか???

## 3. デジタルレファレンスの考察

1) デジタルレファレンスの特性

2) 利用者から見た情報源としての図書館

3) ライブレファレンスの効果

4) レファレンスライブラリアンのスキル

### 3-1) デジタルレファレンスの特性

	デジタルレファレンス	レファレンスデスクモデル
相互作用	非同期(メール、WWW) 同期(ライブ)	非同期
時間・場所	24時間・非限定	開館時間内・館内
質問類型	探索質問、調査質問	案内指示的質問、即答質問
相互協力の形態	協同デジタルレファレンス QuestionPoint レファレンス協同データベース 事業(NDL)	協力レファレンス

### 3-2) 利用者から見た情報源としての 図書館と図書館員

- 1) 利用者を取り巻く情報環境の多様性(図1)  
出典: Abels, E. "Information seekers' perspective of libraries and librarians." *Advances in Librarianship*, 28, p.151-170 (2004)
- 2) 図書館は情報源の一つに過ぎない。(図2)  
出典: *College students' perceptions of libraries and information resources*. OCLC 2006 p.1-5
- 3) 検索エンジンへの依存度が高い。(図3)  
出典: *ibid.*, p.1-11
- 4) 図書館員による支援への期待(図4)  
出典: *ibid.*, p.2-7
- 5) 図書館の情報源には信頼性を期待(図5)
- 6) 図書館員からの支援への信頼度は検索エンジンに比べ高い(図6)  
出典: *ibid.*, p.2-12

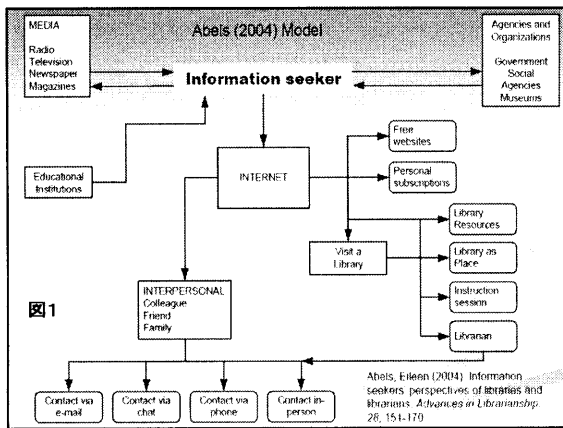


図2 Familiarity Ratings for Information Sources—  
by College Students and Total Respondents

Please rate how familiar you are with the following sources' places where you can obtain information.

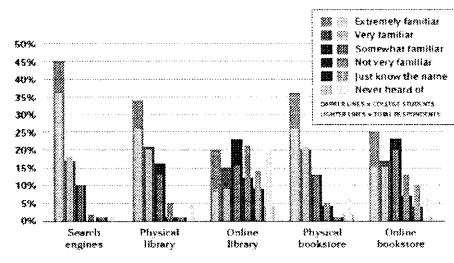


図3 Information Sources Considered and First Choice—  
by College Students and Total Respondents

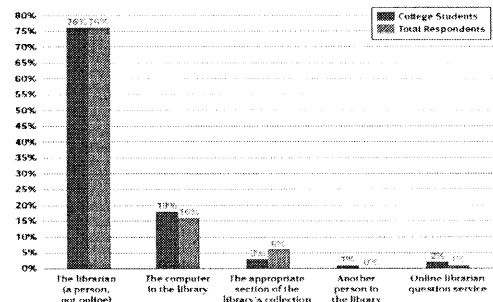
Next time you need a source or place for information, which source or sources would you consider? Select all that apply. And, which source/place would be your first choice?

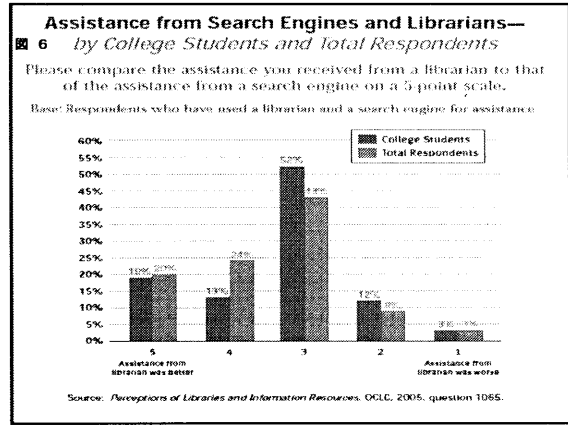
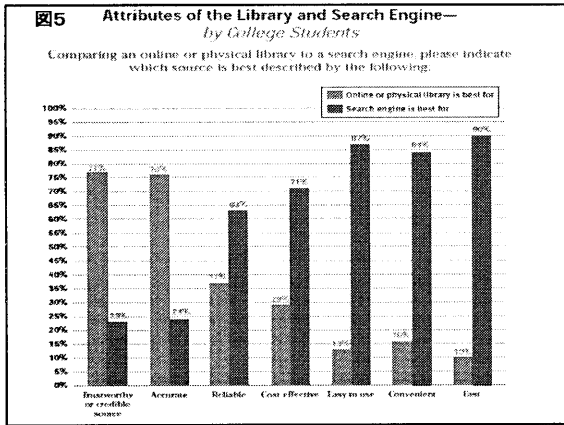
Source Considered	College Students	Total Respondents	First Choice	College Students	Total Respondents
Search engines	90%	91%	Search engines	72%	80%
Library (physical)	66%	55%	Library (physical)	14%	11%
Online library	49%	47%	Online library	10%	6%
Bookstore (physical)	38%	37%	Bookstore (physical)	2%	2%
Online bookstore	14%	10%	Online bookstore	2%	2%

Source: *Perceptions of Libraries and Information Resources*, OCLC, 2005, questions 1325 and 1335.

図4 First Source of Help at the Library—  
by College Students and Total Respondents

What is the first source you typically go to for help with your problem?  
Base Respondents who sought help at the library





**3-3) ライブレファレンスの評価**

調査概要: ノースカロライナ州の公共図書館、大学図書館、政府関係機関図書館等の利用者に対するチャット・レファレンスに関する調査(2004年2月実施)

結果:

- 利便性への評価が高い。(図7)
- 仕事・学業に関わる質問が半分を占める。(図8,9)
- 回答の完全性、回答提供の速さ、図書館員への有用性、ソフトの使いやすさ、に対する各評価が極めて高い。(図10)

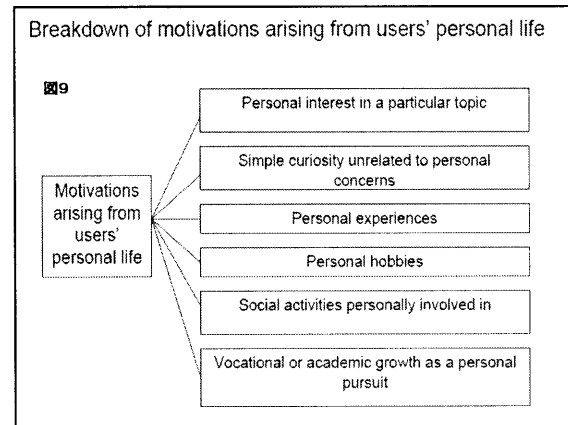
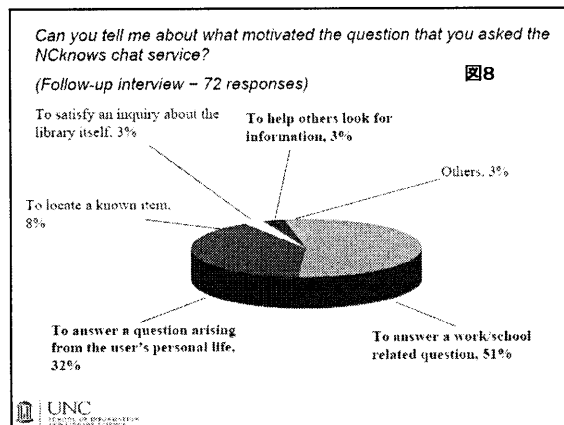
出典: Luo, L. and Pomerantz, J. "Evaluation of a chat reference services from the user's perspective."  
<http://www.webjunction.org/do/DisplayContent?id=12461>

Why did you use the chat service to get this question answered rather than any of these other services?

(Follow-up interview – 68 responses) **図7**

- Convenience (47%).
- Other means of seeking information were not helpful (15%).
- Curiosity (13%).
- Serendipity (12%).
- Recommended by others (7%).
- Personal characteristics/habits (7%).
- Other reference services were not available (1.5%).

UNC  
UNIVERSITY OF NORTH CAROLINA  
CHapel Hill, NC



How satisfied were you with the ...? (Exit Survey) 図10

	Completeness of the answer	Speed that the librarian answered your question	Helpfulness of the librarian	Ease of use of the software
Very satisfied	68.5%	67.7%	81.2%	82.7%
Satisfied	23.55%	24.9%	13.1%	14.2%
Dissatisfied	5.4%	5.6%	3.4%	1.8%
Very dissatisfied	2.6%	2.1%	2.4	1.3%
Total: n =	387	381	382	387

UNC

### 3-4) レファレンスライブラリアンのスキルとデジタルレファレンス

**調査概要:**

- RUSA Guidelines for Behavioral Performance of reference and information service providers で提示されたレファレンスインタビュー時のレファレンスライブラリアンに求められる行動・態度等とデジタルレファレンスの成功との関係について分析。

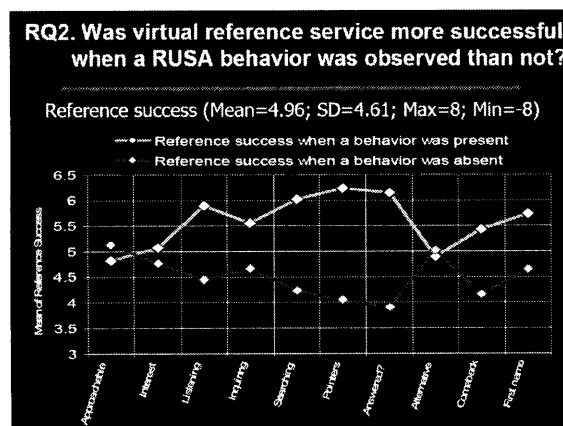
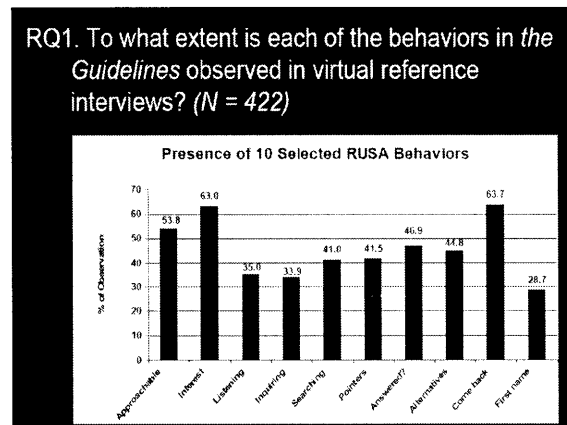
**結果:**

- Approachability, interest, come backの各項目の使用頻度は50%を超えていた。(図11)
- ほぼすべての項目にわたり、各項目が観察されたレファレンス事例において、サービスの成功が認められた。(図12)

出典: Kwon, N. "Assessing virtual reference success using 2004 RUSA behavioral guidelines."  
<http://www.webjunction.org/do/DisplayContent?id=12534>

### RUSAのレファレンスライブラリアンの行動類型

行動類型	内容
利用しやすさ (approachability)	図書館員の歓待 HPの開放性
関心 (interest)	興味・関心をもって臨む
聞き取り/調査 (listening/inquiring)	インタビューによる要求の把握
検索 (searching)	検索戦略の構築、検索実行
評価 (follow-up)	回答の評価



### 4. デジタルレファレンスの再定義

Webサービスとの差別化をどう図るか

- 文献という情報源のもつ特性に基礎をおいた情報サービスへの特化
- クイックレファレンスから  
リサーチコンサルテーションへの展開
- 情報と利用者との仲介者機能から  
“教育・学習支援専門職”へ

## 文献情報の特性に基づくサービス

図書館サービスとWebサービスとの根本的な  
差異とは

⇒ コンテンツの信頼性・妥当性を保証  
する情報源に依拠したサービス

**Criteria for Selection of MARS Best  
Reference Websites**

## リサーチコンサルテーションの本格的導入へ

リサーチコンサルテーション  
研究調査・学習支援機能  
クイックレファレンスとは区別

University of Michigan University Library  
Research Consultation Program  
University of Chicago Library  
Research Consultations

## 仲介者機能から 学習・調査研究支援機能への転換

- レファレンスライブラリアンの従来の位置づけ  
利用者の情報要求と情報源との仲介機能  
⇒ 仲介機能自体はWebサービスに！
- 学習・研究調査支援専門職への展開  
仲介機能を通じて実現すべき支援機能  
⇒ 学習・研究調査支援機能の発揮。
- Webサービスの技術・資源を取り入れた  
学習・研究調査支援としてのレファレンスサービス


Collaborative Reference Database Project

私立大学図書館協会東地区部会研究部  
2006年度第1回研修会(2006. 9. 26)

---

記録する・使う・伝える  
—レファレンス協同データベースの試み—

---



<http://crd.ndl.go.jp/>

国立国会図書館関西館事業部  
図書館協力課 山元 真樹子

Collaborative Reference Database Project

### 0 この事業の位置付け

オンライン チュートリアル	大学	東京大学附属図書館 オンラインチュートリアル 広島大学図書館 オンラインチュートリアル
	公共	私立大学図書館協会東地区協議会 Pathfinder Bank
事例 データベース	大学	九州地区大学図書館協議会 レファレンス事例DBシステム 私立大学図書館協会東海地区協議会 レファレンス事例集
	公共	岡山県立図書館 デジタル岡山大百科 東京都立図書館 しらべま専科
	専門	江戸東京博物館図書室 レファレンス事例集


レファレンス協同データベース

(参考資料)『レファレンス研究分科会報告2004~2005』

Collaborative Reference Database Project

### 1 事業の概要

- (1) 目的
- (2) データベースの内容
- (3) 経緯
- (4) 現状

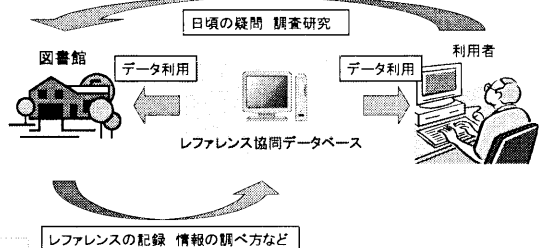


Collaborative Reference Database Project

### (1) 事業の目的

レファレンス協同データベース事業とは:

参加館が作成したレファレンスに関するデータを、データベース化してインターネットで提供し、図書館のレファレンス業務と利用者の調査研究を支援する。



Collaborative Reference Database Project

### (2) データベースの内容

- R** **レファレンス事例データ**  
参加館で行われたレファレンスサービスの記録
- M** **調べ方マニュアルデータ**  
特定のテーマやトピックに関する情報源の探索方法を説明した情報
- C** **特別コレクションデータ**  
個人文庫や貴重書など、参加館が所蔵する特殊なコレクションに関する情報
- F** **参加館プロフィールデータ**  
レファレンス協同データベース事業の参加館に関する情報

Collaborative Reference Database Project

### (3) 事業の現状

① **参加館数** 428館 (2006年7月末現在)

**公共図書館：281館**

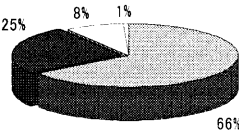
- 都道府県立図書館 54館
- 政令指定都市立図書館 16館
- 市区町村立図書館 211館

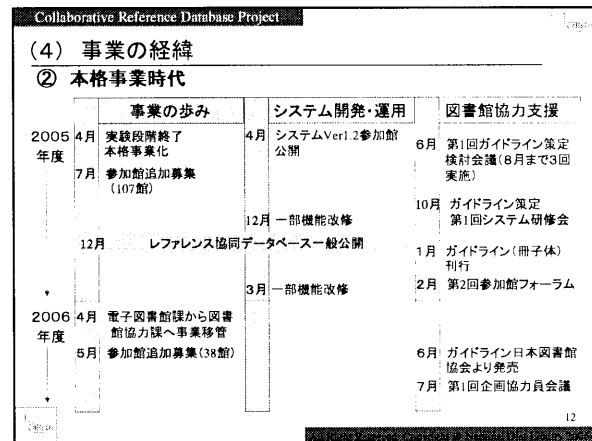
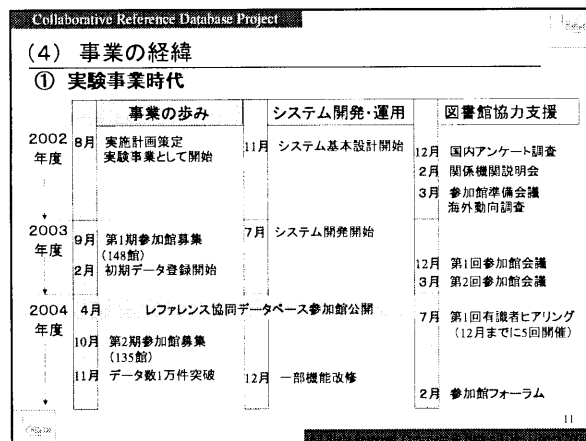
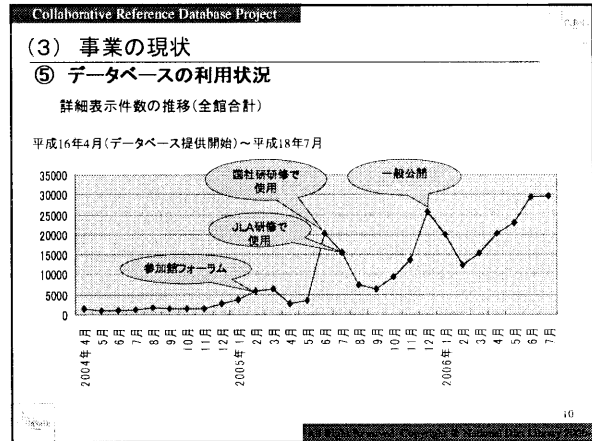
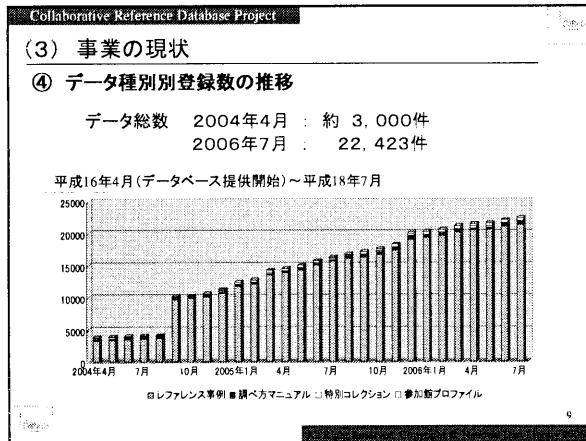
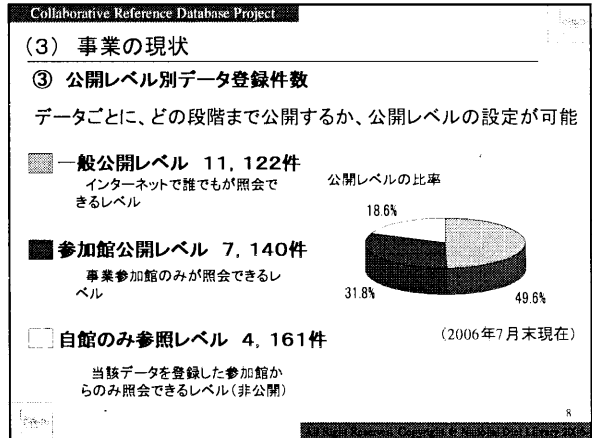
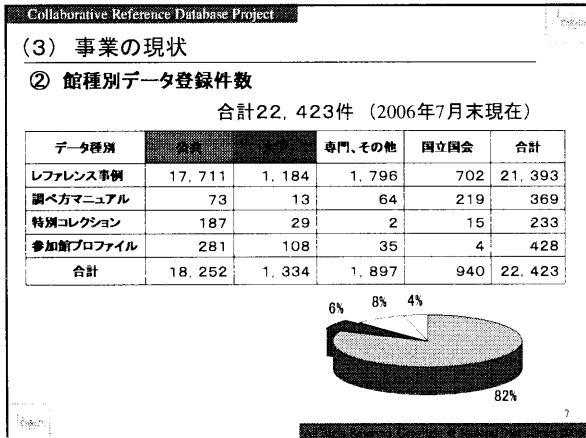
**大学図書館：108館**

- 国立大学図書館 39館
- 公立大学図書館 8館
- 私立大学図書館 61館

**専門図書館、その他：35館**

**国立国会図書館、支部図書館：4館**








Collaborative Reference Database Project

## 2 レファレンス協同データベース・システム

- (1) 利用者別利用範囲
- (2) 検索機能
- (3) データ登録・更新機能
- (4) 相互協力のための付帯機能



13

Collaborative Reference Database Project

### (1) 利用者別利用範囲

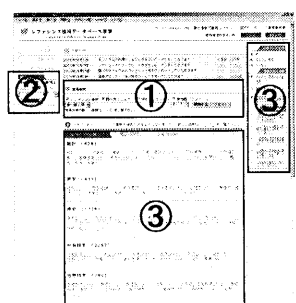
	参加館利用者	一般利用者	
システム	データ検索機能	○	
	データ閲覧機能	○	
	データ登録機能	○	×
	データ更新・削除機能	○	×
	参加館支援機能	○	×
データ	一般公開データ	○	○
	参加館公開データ	○	×
	自館のみ参照データ	○※	×

14

Collaborative Reference Database Project

### (2) 検索機能 (参加館、一般共通)

- ① 簡易検索  
4種類のデータを一度に検索  
各データベースの主な項目を一括検索
- ② 詳細検索  
各データベース別に項目を指定して検索  
And, or検索・絞り込み検索が可能
- ③ ブラウジング  
画面からカテゴリ等を選択することでデータが検索可能  
分類(NDC)・地名・人名  
検索される言葉  
検索される事例  
おすすめ事例



15

Collaborative Reference Database Project

### (3) データの登録・更新機能 (参加館のみ)

ウェブフォーム

入力用ワークシート

自館のシステム

◆ウェブフォーム

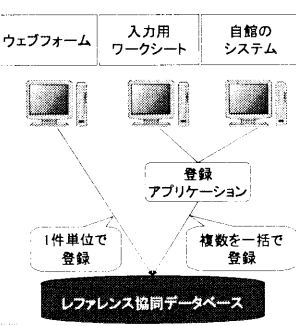
- ・リアルタイム
- ・ローカル情報入力不可

◆入力用ワークシート

- ・登録の日システムに反映
- ・ローカル項目記述可能
- ・Excelを使用

◆自館のシステム

- ・図書館パッケージシステム
- ・Accessなど



16

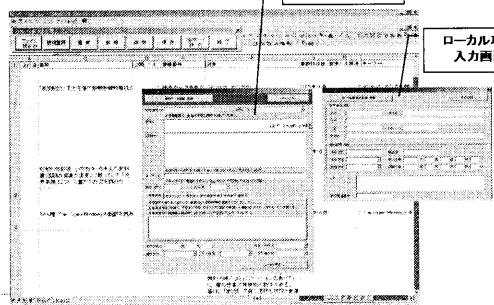
Collaborative Reference Database Project

### (3) データの登録・更新機能 (参加館のみ)

入力用ワークシート

レファレンス事例  
新規登録画面

ローカル項目  
入力画面



17

Collaborative Reference Database Project

### (4) 相互協力のための付帯機能 (参加館のみ)


- ① コメント機能  
データの品質を向上させるために、参加館間でコメント(情報や意見)を交換する機能  
レファレンス事例、調べ方マニュアルデータのみ対象
- ② 掲示板機能  
参加館職員のコミュニケーションツール
- ③ 未解決レファレンス事例の電子メール配信機能  
未解決レファレンス事例に関する相互支援のため、当該データの公開情報を、電子メールで希望者に配信する機能  
NDCを指定可能

18

Collaborative Reference Database Project

### 3 記録する・使う・伝える

- (1) 記録する
- (2) 使う
- (3) 伝える



19

Collaborative Reference Database Project

### (1) 記録する

#### ① 標準フォーマット

システムにデータを登録する際のデータフォーマットであるとともに、国立国会図書館が、データを図書館間で交換するための標準的な記述要素として提案するもの

レファレンス事例データフォーマット      調べ方マニュアルデータフォーマット

<p>(中核的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 質問</li> <li>■ 回答</li> <li>■ 申込請求事項</li> <li>■ 回答プロセス</li> <li>■ 参考文献</li> <li>■ 開架先</li> <li>■ 申込み者</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理番号</li> <li>■ 公開レベル</li> </ul> <p>(付加的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 事例作成日</li> <li>■ NDCの種</li> <li>■ NDC</li> <li>■ 内容種別</li> <li>■ 質問者区分</li> <li>■ キーワード</li> <li>■ 請求種別</li> <li>■ 解決未解決</li> <li>■ 備考</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 登録番号 <input type="checkbox"/> 登録日時 <input type="checkbox"/> 最終更新日時 <input type="checkbox"/> 参加館ID</p>	<p>(中核的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 請求テーマ</li> <li>■ 調べ方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理番号</li> <li>■ 公開レベル</li> </ul> <p>(付加的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 調べ方作成日</li> <li>■ NDCの種</li> <li>■ NDC</li> <li>■ キーワード</li> <li>■ 完成/未完了</li> <li>■ 参考文献</li> <li>■ 備考</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 登録番号 <input type="checkbox"/> 登録日時 <input type="checkbox"/> 最終更新日時 <input type="checkbox"/> 参加館ID</p>
---	--	--	---

20

Collaborative Reference Database Project

### (1) 記録する

#### ① 標準フォーマット(続き)

特別コレクションデータフォーマット      参加館プロフィールデータフォーマット

<p>(中核的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コレクション名</li> <li>■ コレクション名ヨミ</li> <li>■ 内容</li> <li>■ 夾歴</li> <li>■ 所蔵点数</li> <li>■ 船積</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 公開レベル</li> </ul> <p>(付加的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 紹介文庫</li> <li>■ 目録等</li> <li>■ 利用条件</li> <li>■ 備考</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 登録番号 <input type="checkbox"/> 登録日時 <input type="checkbox"/> 最終更新日時 <input type="checkbox"/> 参加館ID</p>	<p>(中核的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 図書館ID</li> <li>■ 公開レベル</li> <li>■ 図書館名(略称)</li> <li>■ 図書館名ヨミ</li> <li>■ 郵便番号</li> <li>■ 住所</li> <li>■ 電話番号1</li> <li>■ 電話番号2</li> <li>■ 電話番号3</li> <li>■ FAX番号</li> <li>■ E-Mail</li> <li>■ E-Mail(管理者)</li> </ul>	<p>(付加的な情報)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 館蔵情報</li> <li>■ 交通アクセス</li> <li>■ 注意事項</li> <li>■ 沿革</li> <li>■ 特色</li> <li>■ 利用条件</li> <li>■ URL</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 登録番号 <input type="checkbox"/> 登録日時 <input type="checkbox"/> 最終更新日時</p>
--	---	---	--

21

Collaborative Reference Database Project

### (1) 記録する

#### ② 活用性の高いデータとはどのようなものか

<p>条件1 検索できること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 用語(全文、キーワード)で検索</li> <li>➢ 主題(NDC)で検索</li> <li>➢ 登録番号などで検索</li> <li>➢ 質問者区分を工夫する</li> </ul>	<p>条件2 実際に読んで役立つこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 回答になる</li> <li>➢ 調べ方の過程が分かる</li> <li>➢ レファレンスツールが分かる</li> <li>➢ 雑学になる</li> </ul>
---	--

↑

標準フォーマットに従って入力する      +α

22

Collaborative Reference Database Project

### (1) 記録する

#### ③ ガイドライン

「レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン」  
<http://crd.ndl.go.jp/jplibrary/guideline.html> (平成17年10月14日策定)

- 第1章 ガイドラインの趣旨を理解するために  
⇒参加館の認識を共通のものにする
- 第2章 レファレンス協同データベースの概要を知るために  
⇒データベースの構造とデータの用途
- 第3章 データを作成するために  
⇒データ作成の標準化と効率化
- 第4章 データを公開するために  
⇒データ公開の条件
- 第5章 データの質をさらに高めるために  
⇒質を高めるポイント、コメント機能の活用

23

Collaborative Reference Database Project

### (2) 使う

#### 利用者別レファレンス協同データベースの活用

レファレンス情報源として利用	レファレンスサービスをよりよく活用するために利用	図書館情報学の研究素材として活用
研修教材として利用	調べものの情報源として利用	司書養成の素材として活用
サービス改善のためのデータとして利用	その他(執筆・出版のヒント、雑学)	その他研究素材として活用
図書館員	一般利用者	研究者

レファレンス協同データベース

レファレンス事例データベース      調べ方マニュアルデータベース      特別コレクションデータベース      参加館プロフィールデータベース

24

Collaborative Reference Database Project

### (2) 使う

レファレンス情報源として利用

- ◆ レファレンスサービスに従事する図書館員の共通基盤  
図書館員個人が経験できるレファレンス質問は、少なく、そして、偏っている。共通の基盤が必要である。

知識創造型社会 ← ICTの発達  
インターネット情報  
の増大

図書館に寄せられる可能性のある質問  
= 無数(数百万件/年)

個人が経験できるレファレンス質問  
= 100件(?) ~ 1,000件(?) / 年 → 調査の糸口

共有されているレファレンス事例  
(レファレンス協同データベース等)  
= 20,000件以上 → 調査の糸口

25

Collaborative Reference Database Project

### (2) 使う

サービス改善のためのデータとして利用

- ◆ レファレンスサービスのPDCAサイクル

広義の「レファレンスサービス」

act: 調べ方マニュアル作成  
蔵書評価、配架見直し  
研修、その他

plan: 目標の設定

do: レファレンスサービス(質問・回答サービス)  
質問の受付  
インタビュー  
調査  
回答  
レファレンス記録票

check: レファレンス事例作成  
統計処理

レファレンスサービスの改善措置

26

Collaborative Reference Database Project

### (3) 伝える


- ◆ 自館のデータでレファレンスサービスを伝える
  - 職員に伝える
  - 設置母体に伝える
  - 利用者に伝える
- ◆ データベース全体でレファレンスサービスを伝える
  - 他の図書館に伝える
  - 国民に伝える

27

Collaborative Reference Database Project

## 4 これからのレファレンス協同データベース

- (1) 平成18年度の活動
- (2) 私立大学図書館への期待



28

Collaborative Reference Database Project

### (1) 平成18年度の活動

- ◆ 企画協力員の設置
- ◆ データベースの充実  
『調べ方マニュアル集(仮)』刊行
- ◆ 相互支援の強化  
コメント機能活用の促進
- ◆ 研修利用の促進
- ◆ リプレイスに向けての検討
- ◆ システム研修会、参加館フォーラムの開催

29

Collaborative Reference Database Project

### (2) 私立大学図書館への期待

活用	参加館	レファレンス情報源として利用
	未参加館	研修教材として利用
		サービス改善のためのデータとして利用
協力	未参加館	事業への参加
		データの登録
	参加館	専門資料とノウハウを用いた情報提供
		よりよいシステムにするための提案

よろしく願っています。

30

私立大学図書館協会  
東地区部会研究部  
2006年度第1回研修会  
平成18年9月26日

## 記録する・使う・伝える

### ーレファレンス協同データベースの試みー

### 配布資料

#### ◆レファレンス協同データベース事業 私立大学参加館

都道府県	参加館名	都道府県	参加館名
北海道	札幌大学図書館	岐阜県	岐阜聖徳学園大学羽島キャンパス図書館
埼玉県	文教大学越谷図書館	愛知県	愛知淑徳大学図書館
東京都	青山学院大学図書館	愛知県	愛知大学名古屋図書館
	桜美林大学図書館		中部大学附属三浦記念図書館
	嘉悦大学図書館		豊田工業大学総合情報センター
	学習院大学図書館		名城大学附属図書館
	国立音楽大学附属図書館	京都府	京都精華大学情報館
	慶應義塾大学信濃町メディアセンター		同志社大学総合情報センター
	慶應義塾大学三田メディアセンター		立命館大学図書館
	国際基督教大学図書館	大阪府	大阪工業大学図書館
	国土館大学附属図書館		大阪国際大学総合メディアセンター
	上智大学図書館		関西大学図書館
	昭和女子大学図書館		近畿大学中央図書館
	成蹊大学図書館		摂南大学図書館
	拓殖大学八王子図書館		梅花女子大学図書館
	拓殖大学茗荷谷図書館		ブール学院大学図書館
	多摩大学メディア&インフォメーション・センター図書館		平安女学院大学情報メディアセンター
	東京工科大学図書館		桃山学院大学附属図書館
	桐朋学園大学音楽学部附属図書館		兵庫県
	東邦大学医学メディアセンター	甲南女子大学図書館	
	文化女子大学図書館	神戸女子大学図書館	
	法政大学図書館	兵庫医科大学付属図書館	
武蔵大学図書館研究情報センター	武庫川女子大学附属図書館		
明治学院大学図書館	岡山県	岡山理科大学図書館	
明治大学図書館	広島県	広島経済大学図書館	
早稲田大学図書館		広島女学院大学図書館	
神奈川県	慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター		安田女子大学図書館
	慶應義塾大学理工学メディアセンター	福岡県	九州産業大学図書館
	湘南短期大学図書館	沖縄県	沖縄国際大学図書館
	鶴見大学図書館		
	東洋英和女学院大学図書館		
横浜商科大学図書館			

お問い合わせ: 国立国会図書館関西館 事業部図書館協力課 協力ネットワーク係  
E-Mail: [info-crd@ndl.go.jp](mailto:info-crd@ndl.go.jp) Tel: 0774-98-1475

## 1 レファレンス協同データベース データ・サンプル

### (1)レファレンス事例データ・サンプル

管理番号	今出川-2005-1
公開レベル	一般公開

中核的な項目	
質問	乃木希典の家紋を知りたい。
回答	千鹿野茂著『探訪江戸明治名士の墓』(新人物往来社、1993)に乃木希典の墓(都立青山霊園)の調査があり、「家紋、持ち合い四つ井筒」とあり。家紋名が確定できたので、同著『日本家紋総鑑』(角川書店、1993)にて、家紋の意匠を確認した。
事前調査事項	質問者が日本語による乃木希典の伝記類を事前に調査
回答プロセス	<p>家紋を知りたい理由は、質問者が米国の大学教員であり、「日本人の殉死思想と死生観」というテーマの博士論文を大学出版局から刊行するにあたり、本文頁に転載したいというものであった。目的は、学術書へ家紋転載であるため、ヴァリエーションの多い家紋のなかでも極力正確を期す方針をとった。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 乃木神社のホームページを検索すると関連画像①の家紋を確認(<a href="http://www.nogijinja.or.jp/">http://www.nogijinja.or.jp/</a> 最終確認 2005/07/27)。しかし、デフォルメされている疑いあり。</li><li>2. 『日本の参考図書』第4版(日本図書館協会、2002)を参照し、家紋関連の参考図書として、千鹿野茂著『日本家紋総鑑』(角川書店、1993)が存在することを確認する。</li><li>3. 千鹿野茂著『日本家紋総鑑』にて、乃木神社ホームページの家紋を探すも合致する家紋がみあたらない。基本的に検索は「家紋名」からになっており、家紋意匠の「形」から検索するのはかなり難しい。</li><li>4. 乃木の家紋名を調査するには伝記的記述を参照しておく必要があるため、データベース「人物レファレンス事典」(日外アソシエーツ)を検索して、各種人物情報事典を点検するが見当たらない。また自館 OPAC で所蔵する乃木の伝記を参照するもやはり言及がない。</li><li>5. 視点を変え、どのような「家紋の探し方」があるか知るため、同著者執筆の他の資料をインターネット上でNACSIS Webcat 及び雑誌記事索引を検索し、いくつかヒットする資料を参照する。</li><li>6. その結果、同著『探訪江戸明治名士の墓』(新人物往来社、1993)があることがわかり、墓から家紋にアプローチすることにする。同書内に、乃木希典の墓(都立青山霊園)の項目があり、「家紋、持ち合い四つ井筒」と報告あり。</li><li>7. 3の『日本家紋総鑑』に戻り、「井筒」の項を参照すると家紋群のなかに「四つ持ち合い井筒」の意匠(関連画像②)があり、この紋の意匠が乃木の墓(都立青山霊園)から取ったものであるとの記述がある。</li><li>8. 念のため、乃木神社にホームページの家紋の由来を問い合わせる。同神社・権禰宜の文書での回答をみると、乃木の甥にあたる方が調べた「祖先」の乃木玉木家の定紋(関連画像③)に、丸枠を神社側で付加した意匠であることが判明した。</li></ol>

照会先	東京・乃木神社 〒107-0052 東京都港区赤坂 8-11-27 電話:03-3478-3001 FAX:03-3478-3005 <a href="http://www.nogijinja.or.jp/">URL:http://www.nogijinja.or.jp/</a> (last access 2005/07/27)
参考資料	千鹿野茂著『日本家紋総鑑』 角川書店, 1993
	千鹿野茂著『探訪江戸明治名士の墓』 新人物往来社,1993
	千鹿野茂著『都道府県別姓氏家紋』 柏書房, 2004
	沼田頼輔著『綱要日本紋章學』 明治書院, 1928

データの記載内容により質問者が特定される可能性があります。この場合には、公開について、質問者本人の同意を得ておくことも有効な手立てです。なお、同意を得て公開した場合には、その旨を「備考」に記すことが望まれます。特に、プライバシーへの配慮を有する場合には、注意が必要です。

付加的な情報			
調査種別	事実調査		
事例作成日	2005年7月27日		
解決/未解決	解決		
キーワード	乃木希典      家紋		
NDC	9 版      280		
内容種別	人物		
質問者区分	米国大学教授		
備考	この質問の受付回答の経緯は、京都新聞「なるほど図書館活用講座」(2005/8/3 朝刊)に掲載している。また、データの公開については、本人の了承を得ている。		
関連画像	乃木神社ホームページの家紋	神社側で乃木玉木家の家紋に○枠を付加して、改変したもの	
	乃木希典の墓の家紋	『日本家紋総鑑』で報告されている「持ち合い四つ井筒」(都立青山霊園・乃木希典の墓より採取)	
	乃木玉木家の家紋	乃木の甥にあたる方が調査した祖先の乃木玉木家の家紋。調査した記録の写しが乃木神社にある。この家紋に○枠をつけて、乃木神社のホームページの家紋意匠にしている。	

画像を探すことが目的の事実調査であるため、提供した画像を添付して、提供したサービスをよりの確に反映したデータ作りをしています。

# データ品質向上へのポイント！(こんなことを意識してみよう) #

レファレンス事例データには、レファレンスサービスの情報源としての利用や、レファレンスサービスのPRとしての利用など、様々な用途があります。特に参加館において、質が高いと判断したデータや、公開することによってレファレンスサービスのアピールになると判断したデータは、定期的に点検し、必要に応じて改善しましょう。

実際にPRに使用した場合には、それに関する情報を掲載することも有効です。

参考 ⇒ ガイドライン 2.2「レファレンス協同データベースには、どのような用途があるか」  
ガイドライン 5.1.1「レファレンス事例の質を高めるポイントは何か」

## (2) 調べ方マニュアルデータ・サンプル

管理番号	101063
公開レベル	一般公開

中核的な情報	
調査テーマ	県史・市町村史(地方公共団体が編集・刊行したもの)
調べ方	<p>[当館の所蔵を調べるには]</p> <p>●NDL-OPAC で検索する場合</p> <p>(1)戦後に受入・刊行されたもの</p> <p>都道府県史の場合、[件名:都道府県名(ex.北海道) 歴史(レキシ)]から、市町村史の場合、[件名:〇〇市(シ)、〇〇町(マチ)、〇〇村(ムラ)]から検索できます。</p> <p>(2)戦前に受入されたもの</p> <p>件名がついていないので、書名キーワードに都道府県・市町村名などを入力して検索します。見当たらない場合は、語尾の町・村などをはずして入力してみてください。あるいは、下記(1)~(8)のような書誌・文献目録で書誌事項を確認してから検索します。</p> <p>●目録カードで検索する場合</p> <p>書名・著者名(〇〇市など)・件名(都道府県、市町村名)から検索できます。郡史(誌)は、頭にその府県名を付している傾向が見られるので、検索する場合には注意が必要です。(特に戦前のもの)</p> <p>戦前に刊行されたものでも、主要なものは戦後刊行の収書中にあります。また複製版が刊行されている可能性もあるので、戦後のカードあるいはNDL-OPACも検索してみてください。</p> <p>[刊行の有無や、書誌事項を確認するには]</p> <p>人文総合情報室に開架されている以下の文献目録をごらんください。</p> <p>(1)『地方史文献総合目録』(上・下巻、索引 1970-75 &lt;GB1-6&gt;)</p> <p>明治~昭和45年に刊行のものを収録しています。所蔵機関も記載していますが、「国会」の印があっても必ず当館の蔵書目録で所蔵を確認してください。</p> <p>(2)『全国市町村史刊行総覧』(1989 &lt;GB1-E13&gt;)</p> <p>昭和20年~63年3月刊行の自治体編集・発行分のみ収録しています。</p> <p>以下のような資料もご利用できます。</p> <p>(3)『新版地方史研究必携』(1985 &lt;GB34-20&gt;)</p> <p>pp.479-482「地方誌史目録」のうち、「(2)都道府県史刊行一覧」(明治~昭和58.3刊分)</p> <p>(4)『角川日本地名大辞典』(1978-90 &lt;GB11-38&gt;) 各巻巻末「参考図書目録」</p> <p>(5)『日本歴史地名大系』(1979- &lt;GB11-44&gt;) 各巻の「文献解題」</p> <p>(6)『日本史総覧 VI 近代・現代』(1984 &lt;GB8-122&gt;)</p> <p>pp.435-461「明治以降都道府県郡市区史誌目録」</p> <p>(7)『藩史大事典 第8巻』(1990 &lt;GB8-E9&gt;) 「史料・文献総覧」</p> <p>(8)『地域研究・郷土資料図書目録』(1997 &lt;GB1-G36&gt;)</p> <p>明治~1997.4までに刊行されたものを収録。</p> <p>史誌だけでなく、郷土研究に関する文献を幅広く収載しています。</p> <p>その他、人文総合情報室に開架してある地方史(誌)目録や、各県の百科事典などもご利用になれます。</p>

付加的な情報	
調べ方作成日	2002/07/19
NDC の版	9 版
NDC	210(日本史)
キーワード	都道府県-歴史
	市町村-歴史
完成/未完成	完成
参考資料	
備考	<a href="http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/theme_honbun_101063.html">http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/theme_honbun_101063.html</a>

調べ方マニュアルデータは、質の保持への努力が必要なデータです。「調べ方作成日」を必ず記入し、一定の時間が経過したデータについては、情報源の再確認をする必要があります。

調べ方マニュアルデータは、参加館それぞれの刊行物やホームページで公開していることが多くあります。このような場合には、それらの情報の掲載場所を、「備考」に掲載することが望まれます。

## # データ品質向上へのポイント！ #

レファレンス事例データが、利用者の個別の情報ニーズに応じて提供されたサービスの記録であるのに対し、調べ方マニュアルデータは、特定の利用者グループのために編集した付加価値の高い情報です。データの作成にあたっては、「何について」、「誰のために」作成されるのかを意識し、より質の高い情報を提供する必要があります。

複数の担当者が確認し、正確な内容、適切な表記をするように務めるとともに、定期的に点検し、必要に応じて、情報を更新していくことが望まれます。

参考 ⇒ ガイドライン 2.2.2「調べ方マニュアルデータには、どのような用途あるか」  
 ガイドライン 5.1.2「調べ方マニュアルデータの質を高めるためのポイントは何か」



### (3) 特別コレクションデータ・サンプル

公開レベル	一般公開
-------	------

中核的なデータ	
コレクション名	田中稲城文書(竹林文庫内)
コレクション名ヨミ	タナカイナキモンジョ(タケバヤシブンコナイ)
内容	<p>初代帝国図書館長・初代日本文庫協会(現・日本図書館協会)会長を務めた田中稲城の記録文書群。主な内訳は、以下のとおりである。なお一部は、国立国会図書館憲政資料室において、マイクロフィルム(1974複製)2リールで保管されている。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 帝国図書館設立関係の草稿・文書約 160 点 帝国図書館設立関係では「書籍館ニ就キテノ卑見」、「帝国図書館設立の議」、「帝国図書館設立案」、「図書館新築説明書」(建築構想図面二枚付)、「開館式祝文々辞」等、建議から館運用案に至る草稿・文書類が含まれ、国立図書館成立前史・成立過程を伺い知る記録群となっている。また、田中稲城の著作『図書館管理法』の原稿や履歴書もある。</li><li>2. 書翰約 810 点 図書館関係・個人約 140 点、欧文約 150 点、旧岩国藩主吉川家及び郷里関係約 520 点他穂積陳重、井上哲次郎、加藤弘之、加藤高明、牧野伸顕、外山正一、狩野亨吉等、差出人には近代日本の礎を築いた人物名が連なる。欧文書翰は、大英博物館やハーバード大学図書館からものが多く、東京図書館長・帝国図書館長時代が中心となる。吉川家及び郷里関係は、田中の出身地岩国の教育に関する相談事や、宮内省からの叙位式通達、園遊会の招待状等である。</li><li>3. 欧米留学関係約 20 点 「ハーバード大学図書館ニ付報告」、「ウースター図書館の記・プロヴィデンス図書館の記」等が含まれる。欧米留学は明治二十一年(1888)、文部省より1年半に亘って図書館に関する学術修業を命じられたもので、主な訪問先はハーバード大学図書館、米国議会図書館、大英博物館、仏・独の国立王立図書館等となっている。</li><li>4. 学生時代の講義筆記・詩文類約 140 点等</li></ol>
来歴	<p>近代図書館史研究者として知られる竹林熊彦(1888-1960)が、帝国図書館の成立過程を研究するにあたり、昭和初期に田中稲城の遺族・田中誠二氏から記録文書類を寄せられたことに遡る。竹林はこの資料群を用いて、「田中稲城一人と業績一」(『図書館雑誌』第 36 卷 3 号、1942)・「田中稲城著作集」(『図書館雑誌』第 36 卷 6 号・7 号・9 号、1942)、『近世日本文庫史』(大雅堂、1943)等を発表した。竹林没後の昭和三十六年(1961)、遺族・竹林春彦氏から田中の記録文書類を同志社大学図書館に寄贈されたことが所蔵の由来となる。ながらく未整理のままであったが、整理作業が完了し 2005 年 4 月から公開のはこびとなった。</p>
所蔵点数	全 1,339 点数
継続	無

付加的な情報			
利用条件	1. 閲覧:①所属機関(一般の方の場合は公共図書館)を通じた事前の照会と紹介状が必要、②貴重資料扱いのため館内の指定場所で開催 2. 複写:プライバシー保護に抵触しない資料については、必要と認められた場合複製コピーからの複写が可能 3. 貸出不可(但し、展示会等への出品は別途相談)		
目録等	『同志社大学竹林文庫 Manuscript Register』、『項目記入表』(全10冊:ISAD(G)準拠した資料1点ごとの内容記述)、『Finding Aids』(全3冊:年譜・書簡差出人一覧等)		
紹介文献	井上真琴・大野愛耶・熊野絢子「公開なった田中稲城文書」(『図書館雑誌』99(3),2005, 「竹林文庫の記録文書類、ついに公開」(『同志社大学総合情報センター報』No.29,2005 URL:http://www.doshisha.ac.jp/gakujo/center/pdf/cent29.pdf [最終確認 2005/07/28]) 「田中稲城」(『近現代日本人物史料情報辞典』補遺版、吉川弘文館、2005年11月刊行予定)		
備考	田中稲城文書の所有者及び管理者は、同志社大学総合情報センター 元所有者は、東京大学工学部名誉教授・田中誠之氏(東京在住)		
関連画像	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <p>田中稲城肖像写真</p>  </td> <td style="vertical-align: top;"> <p>山口県岩国市岩国徴古館が写真のネガフィルムを所蔵            肖像公開については遺族・田中誠之氏の承認あり            国立国会図書館には写真プリント・フィルムともに所蔵がないことを確認(2005.1)</p> </td> </tr> </table>	<p>田中稲城肖像写真</p> 	<p>山口県岩国市岩国徴古館が写真のネガフィルムを所蔵            肖像公開については遺族・田中誠之氏の承認あり            国立国会図書館には写真プリント・フィルムともに所蔵がないことを確認(2005.1)</p>
<p>田中稲城肖像写真</p> 	<p>山口県岩国市岩国徴古館が写真のネガフィルムを所蔵            肖像公開については遺族・田中誠之氏の承認あり            国立国会図書館には写真プリント・フィルムともに所蔵がないことを確認(2005.1)</p>		

利用するための制限事項等は、「利用条件」に記入します。

冊子目録を作成したり、デジタルアーカイブを構築したりしている場合には、それらの情報を「目録等」に記入します。

本や雑誌で紹介している場合には、それらの情報を、「紹介文献」に記入します。

画像は、コレクションを広報する上で、有効です。ただし、画像の登録にあたっては、著作権上問題がないことや、転載許諾依頼に対する対応などを確認したうえで登録します。

## # データ品質向上へのポイント! #

図書館が所蔵する特別コレクションは、レファレンスサービスの有力な情報源になります。利用条件なども明記し、レファレンス情報源として十分な情報を記載するようにします。

また、データの公開により、特徴あるコレクションの存在を説明する際の資料として利用できます。紹介記事やデジタルアーカイブがある場合には、これらの情報も明記し、コレクションの網羅的な情報を記載するようにします。

参考 ⇒ ガイドライン2.2.3「特別コレクションデータには、どのような用途があるか」

#### (4) 参加館プロフィールデータ・サンプル

館種	1110001
公開レベル	一般公開

中核的な情報	
図書館名(正式)	国立国会図書館(National Diet Library)
図書館名(略式)	国会図書館(NDL)
図書館ヨミ	コクリツコッカイトショカン
郵便番号	100-8924
住所	東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号1	03(3581)2331 (代表)
電話番号2	03(3506)3300 (音声・自動応答)
電話番号3	
FAX 番号	
E-Mail(管理者)	*****@ndl.go.jp
E-Mail	

電子メールレファレンスを行っている場合には、「E-Mail」に記入します。

付加的な情報	
URL	<a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a>
開館情報	国立国会図書館は東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの館でサービスを行っています。それぞれの館についての利用時間や休館日などは以下のサイトの「サービスポイント」でご確認下さい。 <a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a>
利用条件	国立国会図書館は東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの館でサービスを行っています。それぞれの館についての入館資格などは以下のサイトの「サービスポイント」でご確認下さい。 <a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a>
沿革	国立国会図書館は東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの館でサービスを行っています。それぞれの館についての沿革は以下のサイトでご確認下さい。 <a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a>

「開館情報」、「利用条件」等、付加的な情報について自館のホームページで情報を提供している場合には、その情報が記載されている URL も記入します。

特色	<p>国立国会図書館は東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの館でサービスを行っています。それぞれの館の所蔵資料やサービスなどについては以下のサイトの「サービスポイント」でご確認下さい。</p> <p><a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a></p>
注意事項	<p>&lt;個人の方へ&gt;個人の方からの文書(電子メール、FAX、郵送)によるレファレンスには応じておりません。お近くの公共図書館や大学図書館にご相談いただき、回答が得られなかった場合は、その図書館を通じて国立国会図書館に対してレファレンスを申し込むことができます。まずはお近くの図書館や所属の大学図書館にご相談ください。</p> <p>&lt;図書館員の方へ&gt;電子メールレファレンスサービスは登録制です(登録対象は図書館のみ)。詳細は以下のサイトの「図書館員のページ」&gt;「サービス」&gt;「レファレンス」でご確認ください。</p> <p><a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a></p>
交通アクセス	<p>国立国会図書館は東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの館でサービスを行っています。それぞれの館への交通手段については以下のサイトの「サービスポイント」でご確認下さい。</p> <p><a href="http://www.ndl.go.jp/">http://www.ndl.go.jp/</a></p>

サービスに関する制限事項がある場合には、必ず明記します。

# データ品質向上へのポイント! #

参加館プロフィールデータは、事業で公開しているレファレンス事例データ、調べ方マニュアルデータ及び特別コレクションデータに関する問い合わせ先や、協力レファレンスの依頼先を参照する用途があるため、データの作成にあたっては、運用体制の整備を踏まえて情報を整理することが必要です。またレファレンスサービスの情報源となる十分な情報を提供するため、サービスや蔵書の特徴に関する情報を整理することも必要です。

参加館プロフィールデータは、レファレンス事例データ等他のデータを一件でも公開している場合には、それに準じて公開する必要があります。館内での合意に基づき、適切な情報を提供してください。

参考 ⇒ ガイドライン2.2.4「参加館プロフィールデータには、どのような用途があるか」

## 2 レファレンス協同データベース標準フォーマット

### (1)レファレンス事例データ・フォーマット

No	項目名	項目内容	区分	項目の説明	簡易 検索 項目	詳細 検索 項目
1	管理番号	各参加館が独自に設定した事例管理番号	必須	最大で全角15文字(30バイト)以内	×	○ (前方)
2	公開レベル	データの公開レベル	必須	"自館のみ参照"、"参加館公開"、"一般公開"から選択	△	△
3	質問	レファレンス質問の内容	必須		○	○
4	回答	質問者に対して回答した内容	必須	公開レベルが"自館のみ参照"の場合は任意扱い	○	○
5	回答プロセス	回答のために経た調査プロセス	任意	"回答"の記述内容や「調査種別」等に応じて、可能な範囲で記述	○	○
6	事前調査事項	質問者が、事前に調べていた事項に関する情報	任意	資料の書誌事項や、事前に照会した機関など	○	○
7	NDC	レファレンス事例の主題分類を示す日本十進分類法の分類番号	任意	3桁(要目表)を基本とするが、1桁、2桁での入力も可	×	○ (前方)
8	NDCの版	「NDC」を付与する際使用した『日本十進分類法』の版	任意		×	×
9	参考資料	回答を作成するにあたって、参考にした資料	任意	参考にしたレファレンス情報源、レファレンス資料、レファレンスツールなど/複数登録可	○	○
10	キーワード	レファレンス事例の中心的な内容や主要な概念を表現している語	任意	フリーキーワード(件名標目等の統制語を使用してもよい)/複数登録可	○	○
11	照会先	回答の情報源として、質問者に示した図書館外部の人・機関	任意	複数登録可	○	○
12	寄与者	データ作成に際し、情報提供等をした図書館外部の人・機関	任意	複数登録可	×	○
13	備考	自由記入欄(補足事項等)	任意	内容は公開可能なものであること	○	○
14	事例作成日	レファレンス事例データを作成した日付	任意	年は西暦、和暦とも可/「日」が登録されていないものや、表記が正しくないものは不可	×	○
15	解決/未解決	レファレンス質問が解決したのか、未解決なのか	任意	"解決"、"未解決"から選択/質問者に対し回答した時点で未解決であっても、事後の調査により解決した場合は"解決"となる	×	△
16	調査種別	調査の種類	任意	"文献紹介"、"事実調査"、"書誌的事項調査"、"所蔵調査"、"所蔵機関調査"、"利用案内"、"その他"から選択	×	△
17	内容種別	レファレンス事例のジャンル	任意	"郷土"、"人物"、"言葉"、"地名"から選択、もしくは各参加館独自の内容種別に応じての記述も可	×	△
18	質問者区分	質問者の分類	任意	"未就学児"、"小中学生"、"高校生"、"学生"、"社会人"、"団体"、"図書館"から選択、もしくは各参加館の分類規則に準じて記述	×	△
19	登録番号	データの固有ID	自動付与		×	○ (完全)
20	登録日時	データがシステムに登録された日時	自動付与		×	○
21	最終更新日時	データがシステム上で最後に更新された日時	自動付与		×	○
22	提供館コード	データを提供した参加館のコード番号	自動付与	参加館プロフィールと関連付けされている	×	○ (完全)
23	関連画像	データに関係する画像	任意	画像形式:「PDF」「PNG」「GIF」「JPEG」「JPG」 画像サイズ:1画像あたり300Kbyteまで 画像数:1データあたり5つまで	×	×

※網掛け部分はデータの中核的な情報

■検索項目について

○:単独検索項目 △:絞込検索項目 ×:対象外

前方一致検索の場合には(前方)、完全一致検索の場合には(完全)と注記しています。

(2)調べ方マニュアルデータ・フォーマット

No	項目名	項目内容	区分	項目の説明	簡易 検索 項目	詳細 検索 項目
1	管理番号	各参加館が独自に設定した事例管理番号	必須	最大で全角15文字(30バイト)以内	×	○ (前方)
2	公開レベル	データの公開レベル	必須	"自館のみ参照"、"参加館公開"、"一般公開"から選択	△	△
3	調査テーマ	調べ方マニュアルのタイトル	必須		○	○
4	調べ方	調べ方の内容	必須		○	○
5	NDC	調べ方マニュアルの主題分類を示す日本十進分類法の分類番号	任意	3桁(要目表)を基本とするが、1桁、2桁での入力も可	×	○ (前方)
6	NDCの版	「NDC」を付与する際使用した『日本十進分類法』の版	任意		×	×
7	参考資料	調べ方マニュアルを作成するにあたって、参考とした情報源	任意	参考にしたレファレンス情報源、レファレンス資料、レファレンスツールなど/複数登録可	○	○
8	キーワード	調べ方マニュアルの中心的な内容や主要な概念を表現している語	任意	フリーキーワード(件名標目等の統制語を使用してもよい)/複数登録可	○	○
9	備考	自由記入欄(補足事項)	任意	内容は公開可能なものであること	○	○
10	調べ方作成日	参加館が調べ方マニュアルを作成した日	任意	年は西暦、和暦とも可/「日」が登録されていないものや、表記が正しくないものは不可	×	○
11	完成、未完成	調べ方マニュアルが完成したか、未完成で現在作成中か	任意	"完成"、"未完成"から選択	×	△
12	登録番号	データの固有ID	自動付与		×	○ (完全)
13	登録日時	データがシステムに登録された日時	自動付与		×	○
14	最終更新日時	データがシステム上で最後に更新された日時	自動付与		×	○
15	提供館コード	データを提供した参加館のコード番号	自動付与	参加館プロフィールと関連付けされている	×	○ (完全)
16	関連画像	データに関する画像	任意	画像形式:「PDF」「PNG」「GIF」「JPEG」「JPG」 画像サイズ:1画像あたり300Kbyteまで 画像数:1データあたり5つまで	×	×

※網掛け部分はデータの中核的な情報

■検索項目について

○:単独検索項目 △:絞込検索項目 ×:対象外

前方一致検索の場合には(前方)、完全一致検索の場合には(完全)と注記しています。

(3)特別コレクションデータ・フォーマット

No	項目名	項目内容	区分	項目の説明	簡易 検索 項目	詳細 検索 項目
1	コレクション名	特別コレクションの名称	必須		○	○
2	コレクション名ヨミ	特別コレクションのヨミ	必須	全角カタカナ	○	○
3	公開レベル	データの公開レベル	必須	“自館のみ参照”、“参加館公開”、“一般公開”から選択	△	△
4	内容	特別コレクションの概要	必須	主題、特徴など	○	○
5	来歴	特別コレクションの由来	任意	収集などに関する情報	×	○
6	利用条件	利用上の制限の有無	任意	制限がある場合は、その内容を記載する	×	×
7	目録等	特別コレクションの検索手段となる目録等の情報	任意	冊子体、データベースのタイトルなど	○	○
8	紹介文献	特別コレクションを紹介した文献の情報	任意	雑誌記事、ウェブサイト等	○	○
9	所蔵点数	特別コレクションの所蔵点数	任意		×	×
10	継続	収集を継続しているか、いないか	任意	“有”、“無”から選択	×	×
11	備考	自由記入欄(補足事項等)	任意	内容は公開可能なものであること	○	○
12	コレクションID	データの固有ID	自動付与		×	○ (完全)
13	登録日時	データがシステムに登録された日時	自動付与		×	△
14	最終更新日時	データがシステム上で最後に更新された日時	自動付与		×	△
15	提供館コード	データを提供した参加館のコード番号	自動付与	参加館プロフィールと関連付けされている	×	○ (完全)
16	関連画像	データに関する画像	任意	画像形式:「PDF」「PNG」「GIF」「JPEG」「JPG」 画像サイズ:1画像あたり300Kbyteまで 画像数:1データあたり5つまで	×	×

※網掛け部分はデータの中核的な情報

■検索項目について

○:単独検索項目 △:絞込検索項目 ×:対象外

前方一致検索の場合には(前方)、完全一致検索の場合には(完全)と注記しています。



(4)参加館プロフィールデータ・フォーマット

No	項目名	項目内容	区分	項目の説明	簡易 検索 項目	詳細 検索 項目
1	図書館コード	データの固有ID	自動付与		×	○ (完全)
2	館種	『レファレンス協同データベース参加規定』に基づく参加館の区分を示すコード	必須	参加承認時に付与	×	△
3	公開レベル	データの公開レベル	必須	“自館のみ参照可能”、“参加館公開”、“一般公開”から選択	△	△
4	図書館名（正式）	参加館の正式名称	必須		○	○
5	図書館（略式）	参加館の略名	必須		×	×
6	図書館ヨミ	参加館の正式名称のヨミ	必須	全角カタカナ	○	○
7	郵便番号	参加館の所在地の郵便番号	必須		×	×
8	住所	参加館の所在地	必須		○	○
9	電話番号1	参加館の連絡先となる電話番号	必須	レファレンス協同データベース事業に関する問い合わせ先の電話番号	×	×
10	E-Mail（管理者）	レファレンス協同データベース事業の担当者（部署）のE-Mailアドレス	必須	事業に関するお知らせ等の配信先となる/データベースでは他館からの参照はできない	×	×
11	電話番号2	参加館の連絡先となる電話番号	任意	代表番号など	×	×
12	電話番号3	参加館の連絡先となる電話番号	任意	レファレンスサービスに関する問い合わせ先の番号など	×	×
13	FAX番号	参加館の連絡先となるFAX番号	任意		×	×
14	E-Mail	参加館の連絡先となるE-Mailアドレス	任意	レファレンスサービスを受け付けるE-Mailアドレス（参加館同士の連絡に利用する場合は、その旨明記する）	×	×
15	URL	参加館のホームページのURL	任意		×	×
16	開館情報	参加館の開館情報	任意	休日、開館時間など/参照すべきウェブサイトのURLでも可	×	×
17	利用条件	利用制限に関する情報や、利用にあたっての注意事項	任意	参照すべきウェブサイトのURLでも可	×	×
18	沿革	参加館の沿革	任意	参照すべきウェブサイトのURLでも可	○	○
19	特色	所蔵資料、サービス等の特徴	任意	参照すべきウェブサイトのURLでも可	○	○
20	注意事項	データベースに関する注意事項	任意	登録しているデータに関する問い合わせの際に注意すべき事項など	×	×
21	交通アクセス	参加館への交通アクセス	任意	参照すべきウェブサイトのURLでも可	×	×
22	登録日時	データがシステムに登録された日時	自動付与		×	○
23	最終更新日時	データがシステム上で最後に更新された日時	自動付与		×	○
24	関連画像	データに関する画像	任意	画像形式:「PDF」「PNG」「GIF」「JPEG」「JPG」 画像サイズ:1画像あたり300Kbyteまで 画像数:1データあたり5つまで	×	×

※網掛け部分はデータの中核的な情報

■検索項目について

○:単独検索項目 △:絞込検索項目 ×:対象外

前方一致検索の場合には(前方)、完全一致検索の場合には(完全)と注記しています。



### 3 レファレンス協同データベース・データ公開基準(一覧表)

区分	※登録条件 (ガイドライン 3.1.5)	参加館公開の条件 (ガイドライン 4.3.1)	一般公開の条件 (ガイドライン 4.3.2)
レファレンス事例データ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報が記載されていないこと</li> <li>・公序良俗に反していないこと</li> <li>・著作権法に抵触していないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①個人のプライバシーが尊重されていること</li> <li>②質問者の特定につながる恐れがないこと</li> <li>③差別表現等の点で問題がないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①中核的な情報が記されていること</li> <li>②記載内容に関する典拠となる情報源(出典、照会先、寄与者等)が適切な記載方法で記入されていること</li> <li>③「事例作成日」が記入されていること</li> <li>④歴史上の人物や著名人に関する事例の場合に、公開された確かな情報源に基づいており、かつ、個人情報に対する配慮がなされていること</li> <li>⑤過去の事例の場合、現在でも内容が適切であると判断できること</li> <li>⑥未解決事例の場合、調査のプロセスが記入されていること</li> </ul>
調べ方マニュアルデータ		<ul style="list-style-type: none"> <li>①個人のプライバシーが尊重されていること</li> <li>②差別表現等の点で問題がないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①中核的な情報が記されていること</li> <li>②「調べ方作成日」が記入されていること</li> <li>③過去の事例の場合、現在でも内容が適切であると判断できること</li> </ul>
特別コレクションデータ		<ul style="list-style-type: none"> <li>①個人のプライバシーが尊重されていること</li> <li>②差別表現等の点で問題がないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>中核的な情報が記されていること</li> </ul>
参加館プロフィールデータ		<ul style="list-style-type: none"> <li>①個人のプライバシーが尊重されていること</li> <li>②差別表現等の点で問題がないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自館のレファレンス事例データ、調べ方マニュアルデータ、特別コレクションデータのいずれか1つでも「一般公開」としている場合は、一般公開すること</li> </ul>

## 体験的レファレンス・サービス論

ー友達 100 人できるかなー

関東学院大学図書館

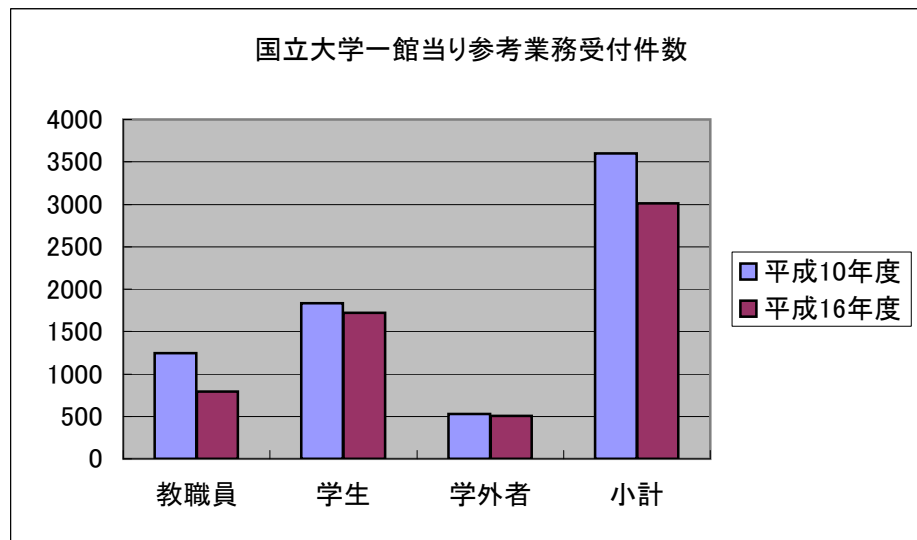
高梨 章

1. 『大学図書館実態調査』平成 10 年度と 16 年度の比較から  
教員（利用者）の激減 事項調査の激減
2. レファレンス PR のターゲット／教員  
人社系は道草  
雑誌記事索引／他の記事一覧  
研究／タイムスパンの長さ  
PR なんか信じない
3. 仕掛けるレファレンス／アラート機能を人間が行う  
Dissemination 「宣伝、普及」  
alert 「油断のない、用心深い」／ on the alert 「油断なく見張って」
  - a. 複写依頼から、その先に進む道は、複写依頼の中にある  
克雪技術研究 1 (1969) p.99-109 斎藤博英「低温水による道路の消雪」  
『雪氷の研究展望と文献目録』  
雑誌『談叢』創刊号 談叢発行所 1934
  - b. 所在調査の影に主題（事項）調査あり  
質問はユーザーとライブラリアン双方で作るもの
  - c. 普段から目を通してしている雑誌と、そうでない雑誌／ペラペラめくり
  - d. コミュニケーションとは、遊戯である
  - e. 図書館員のダメさもまた武器となる／アフターケア  
初回を次回につなげる  
(時期は過ぎても) 気にかけてもらえる嬉しさ
4. 利用教育について
5. 担当者の孤独化について
6. 情報産業はぶらぶら歩き  
ぶらぶら歩きと総合化

## 国立大学図書館一館当り参考業務受付件数

単位:件数

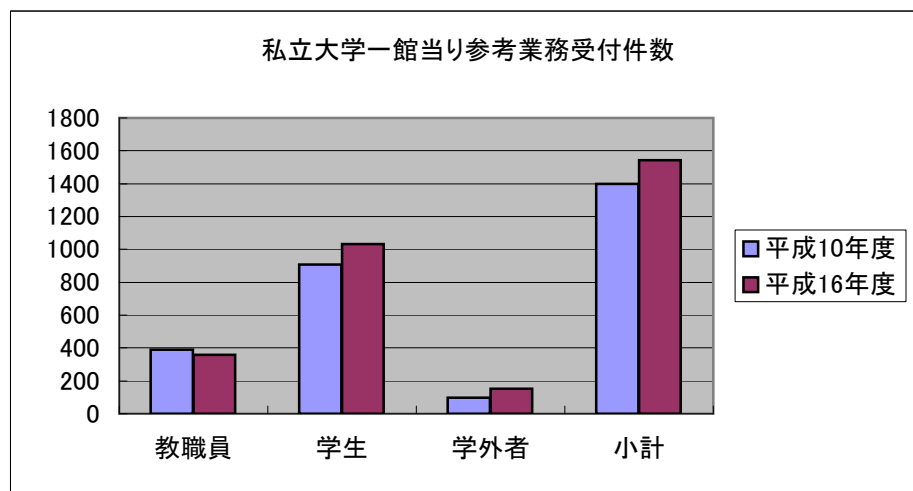
	平成10年度	平成16年度
教職員	1243	790
学生	1833	1717
学外者	525	507
小計	3601	3014



## 私立大学図書館一館当り参考業務受付件数

単位:件数

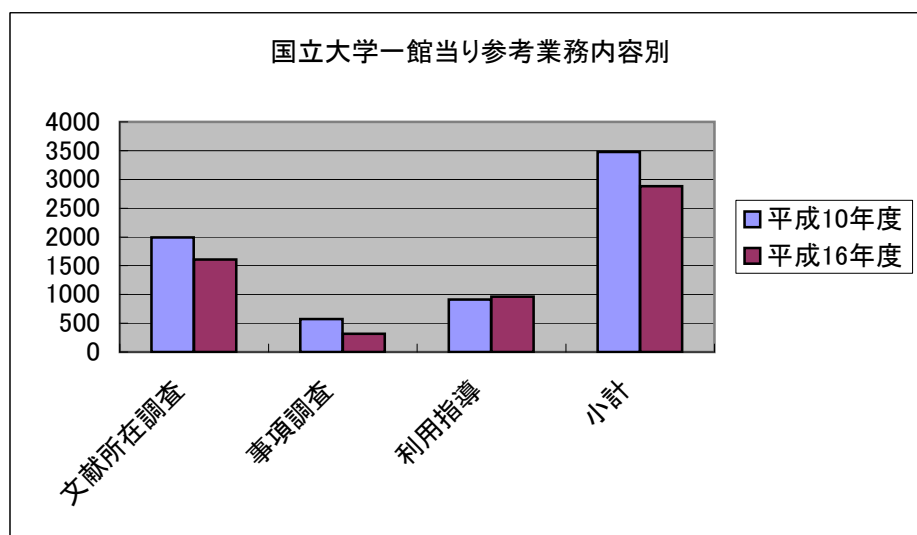
	平成10年度	平成16年度
教職員	389	359
学生	908	1033
学外者	99	152
小計	1397	1544



## 国立大学図書館一館当り参考業務内容別

単位: 件数

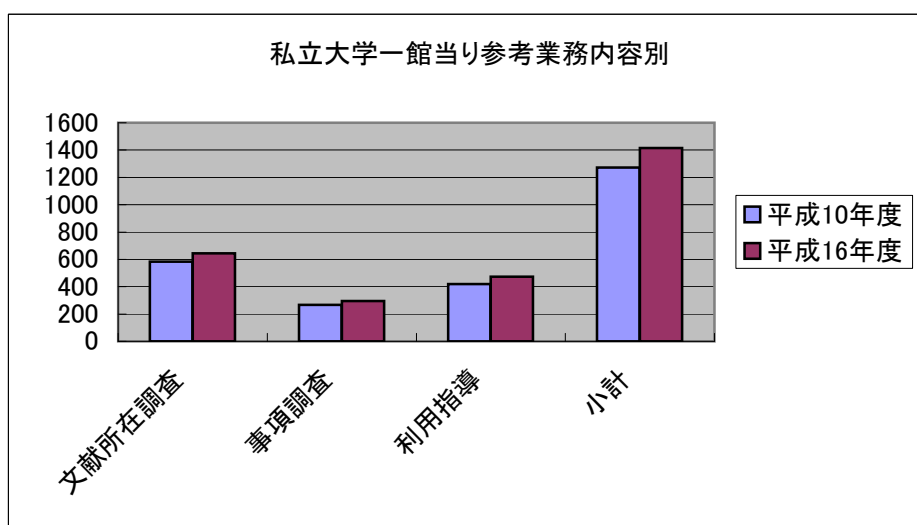
	平成10年度	平成16年度
文献所在調査	1991	1608
事項調査	573	316
利用指導	912	960
小計	3476	2884



## 私立大学図書館一館当り参考業務内容別

単位: 件数

	平成10年度	平成16年度
文献所在調査	584	645
事項調査	268	295
利用指導	419	474
小計	1271	1414



## 参考文献抜粋抄

1. 「ある時期のある論文を抜き出して利用するだけでは足りない面があります。何年の何という雑誌の何号に、こういう論文がありましたと、そこだけコピーをして発表する学生がおりますが、私はそれを厳しく戒めます。同じ号にどんな論文が載っていたか、それとの関わりでその論文の意見や、性格が決まるのです。その点で、簡単にコピーしてくる情報収集のスタイルも、人文社会科学では必ずしも十分なスタイルとはいえません」（寺崎昌男・発言「シンポジウム 東大図書館の今後を考える」『東京大学附属図書館月報 図書館の窓』 25(3) 1986. 3)
2. 「例えば白鳥が読売記者時代、同紙に書いた記事を国会図書館で新聞をめくりながら探していた折、ふと目につく『当世美形展』と題する写真入りの美人コンクールなどに、思わずニヤリと時をすごしたこと、あるいは『とざあい、と一ざい』と大見出しののんびりした社会探訪記等々が、一夏の館通いに何らか楽しいはずみとなったのは事実だった。更に言えるのは、そうしたいわば余分な記事に見入ったこともまた、明治末七年間の白鳥を考えるのに少からず役立ったということである。ところで今は必要なものは労少なく集められる。研究者にはこの上なしの状況である。だがこの便利さは、ことに文学研究の場合など結果的にやせたものを生むように促しはしないか」（兵藤正之助「どこまで進む便利さぞ」『本』 12(11) 1987. 11)
3. 「コピー要求が 1 件でたら、そのタイトルをよくみてみましょう。……あっ、これはトリチウムの透過率に関係のある文献ではありませんか。そこでいろいろ聞いてみると、この文献を必要とする背景などが分かってきます」「研究者の文献利用の場合、そのコピー1件とれば、その研究がすべて終わってしまうわけではありません。……そういうコピーが1件でて、それに関連した要求があれば、こういう文献もありますよ、とって知っているかぎりの文献を必死に売付けていきます。文献が要求に合わなければ、合わない理由を手短かに聞いて、質問の内容を狭めていくようにしていきます。……研究者は自分の守備範囲については強く、とくに過去の文献には通じているので、……新着ならば、研究者に安心して売付けられます」（志知大策「なりふりかまわず 100% 当てるレファレンス」『情報の科学と技術』 38(3) 1988)
4. 「Ask Reference 実施のいろいろな段階の 1 つとして、まず利用者カードを作成してみようという考え方があつた。どのような事項をもちこめばよいかというと、一言にしていけば、文献利用歴とそれに必要な事項およびその結果すべてである。従来のシステムでは、1年に1度来た人でも、毎週来ている人でも

おなじようにしか扱えないが、Ask Reference では利用者カードによって個別  
的に応待できるのである」(志知大策「情報の利用と提供(その2)」『ドクメ  
ンテーション研究』 23(11) 1973.11 p.385-391)。

5. 「今はまだ利用者がやってきますが、大した用事じゃありません。・・・ 図  
書館では、学総目などをひっくり返して、所在を確かめて、依頼をして原文献  
を取り寄せて、利用者に渡す。・・・ 探し物というのは、特に情報の探し物は、  
何があるかと何処にあるかが不可分離であるときに初めて人間のやるに値す  
る仕事であって、何処にあるかだけならそれは機械のやる仕事、マテハンです。  
ところが、これが大学図書館の参考業務と称する部門の仕事です。しかも、大  
学図書館の方々に、図書館のどの仕事が一番好きか、やりたいかとうかがうと、  
異口同音に参考業務だとおっしゃる。救いがありません」(井上如「学術情報  
における逐次刊行物の役割」『逐次刊行物研究分科会 300 回とっば記念例会報  
告集』 1987)。
6. 「人間のか弱さ、もろさ、あるいは頼りなさともいうべきこれらの特徴は、  
ある意味では大切な特徴であり、人間にしかできない思考、コンピュータでは  
置き換えることのできない思考の原点と見ることもできるのである」(佐伯胖  
『コンピュータと教育』)。
7. 「それは“効率的”どころかむしろ“非生産的な代物”だ。しかし、コミュ  
ニケーションとは元々そういうものではなかったのだろうか。効率的に情報が  
A点からB点に間違いなく移動することがコミュニケーション、半歩譲って、  
コミュニケーションのすべてだったのだろうか? いったい誰がここにまで効  
率的だの、非生産的といった概念を持ち込んだのだろうか。コミュニケーション  
とは、まず遊戯ではなかったのか? その中で我々は他者と出会う可能性を期  
待していたのではなかったのか? 効率的なコミュニケーションとは「用件だ  
けの電話」のようなものだ。用件は伝わるが人間は伝わらない」(松岡裕典  
「コンピュータ・ネットワークは新たな神話世界か?」『現代思想』 v.18-9  
'90.9)
8. 「もしも情報専門家が同僚として受け入れられている場合なら、やり取りは  
もっと前の状態から始めることができるし、実りももっと多いはずである」(T  
aylor, Robert S. “Question-Negotiation and Information Seeking in Lib  
raries” *College and Research Libraries*, vol.29 no.3, May 1968)
9. 「授業に何の関心ももたず、・・・ただ勉強したくないというだけでなく、腹の  
底から、勉強しないで済むことを望んでいる連中、・・・まるで町角に立って五十

ドル紙幣をやるといっているのに、なかなかもらい手がいなくて苦労しているようなものだ。なぜ彼らは、自分たちにくれるというものをうけとらないのだろうか？ 習う気のない子供たち、全然勉強する気のないやつらに教えようというのか？ そうだ。よろしい、それではどうやって？ どういうふうに？ ここで返事がつまる」（エヴァン・ハンター『暴力教室』）

10. 「学校では、教師が学生に教えているようにみえる。しかし、教師はただ公認された『真理』を語っているのであり、彼らの関係は『隣り合わせ』ではない。ここには『向かい合わせ』の対関係はほとんどない。対関係は、共同の規則なるものの危うさが露出する場所である。寧ろひとは、ここからのがれるために、一般的な真理にすがりつく」（柄谷行人『探究 I』）

11. 「ぼくはそこで由良君美という・・・俊才助教授と出会った。・・・エリアス・カネッティの英訳だの、ケネス・バーグだのノースロップ・フライだの、・・・今から見ると実に傍若無人に「ナウ」いテキストが、この人のゼミナールには次々と繰り出されてきた。・・・夢野久作を読む、ということになって、ではすぐ何冊か読んでくること、という本の中にホッケが這入ってたのである」（高山宏「ぼくのクロス・クラシクス」『リブラリア』 v.0 1988）

12. 「それほどレファレンスが好きになるコツって何ですか？」 「レファレンスの好きな友だちをつくることですよ。食べものと同じで、おいしいと言いつつ、はじめておいしくなるように、レファレンスも面白いねと言いつつ・・・それが何よりですよ、あなた」（『植草甚一読本』晶文社 1975）

\*原文では「本」とある箇所を「レファレンス」と置き換えました。

13. 「ぶらぶら歩きを不可欠とする社会制度が二つある - 情報産業と夜の娯楽街と。この両者は仕事への準備のある特殊な形態を要求するのだが、この特殊形態がぶらぶら歩きなのだ」（W. ベンヤミン「遊歩する人」『現代思想』 1985.3）

14. 「遊歩者のぶらぶら歩きは、分業に反対するデモンストレーションである」（同上）

## レファレンスツールとしてのパス ファインダー

東京学芸大学附属図書館の事例

東京学芸大学学術情報部 村田 輝

## はじめに

- パスファインダーの現在
- パスファインダーとはどのようなものか？
- 東京学芸大学におけるE-TOPIAパスファインダー
  - －特徴、背景、作成の実際、活用
- レファレンスサービスにおける意義と今後の展望

## パスファインダーの現在

- 私立大学図書館協会東地区部会企画広報研究分科会、「パスファインダーバンク」(<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/pfb/>)
  - －各機関が作成したパスファインダーの収集・提供
- 鹿島みづき[ほか](2005)『パスファインダー・LCSH・メタデータの理解と実践：図書館員のための主題 検索ツール作成ガイド』長久手町(愛知県)：愛知淑徳大学図書館(発売：東京：紀伊国屋書店)
  - －パスファインダーのあらましと作り方を紹介
- 石狩管内高等学校図書館司書業務担当研究会(2005)『パスファインダーを作ろう：情報を探す道しるべ』東京：全国学校図書館協議会(学校図書館入門シリーズ；12)
  - －学校図書館におけるパスファインダーの活用

## パスファインダーとは何か

- 「初學者の即時のニーズに応えるさまざまなタイプの基本的資料をコンパクトにまとめたリストで、利用者の文献探索を一步步支援するツール」
- 「『観光』や『公害』などの特定のテーマについて百科事典・図書・新聞・ネット上の情報などを自ら調べる道しるべとなるリーフレットのことで、調べ学習や問題解決型の学習をサポートするツール」
- 「あるトピックに関する資料・情報を系統的に集める手順をまとめたもので、インフォメーションガイドやトピカルガイドと呼ばれることもある。」
- 「特定の主題領域に限定した案内地図」(MIT図書館における最初のパスファインダーの開発目的)

## パスファインダーの基本的特徴

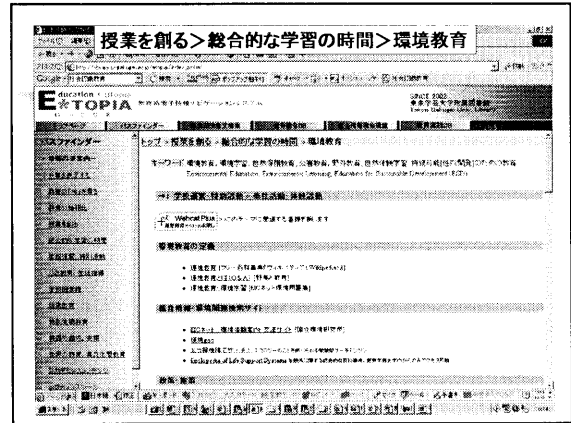
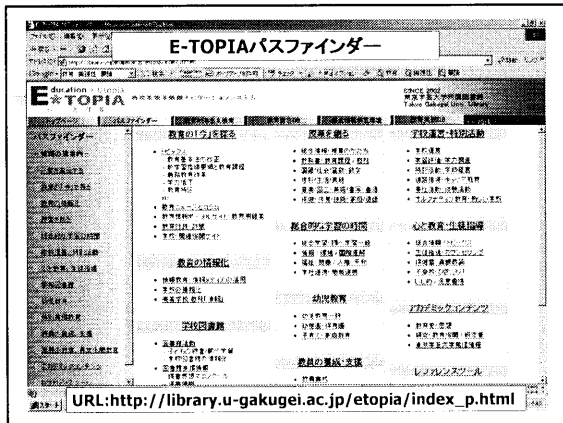
1. 特定のトピックや主題ごとに編集されている。
  - 図書館利用者の〇〇について知りたい、というもっとも基本的な要求に答えるためのツール
2. コンパクトな資料・情報源のリストである。
  - 厳選された情報源のリスト
3. ナビゲーション機能がある。
  - 探索手順に沿った構成、自ら情報を探すための手がかりの提示、教育的効果を意図 ⇒ 利用者の自立

## パスファインダーの例

地球温暖化に関する資料の探し方  
([http://www.lib.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/lib/passfinder/data/chikyuu\\_ondanka.ppt](http://www.lib.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/lib/passfinder/data/chikyuu_ondanka.ppt))

提供：北広島市図書館





### E-TOPIA Pasfinderと図書館 Pasfinder

	E-TOPIA Pasfinder	図書館 Pasfinder
想定利用者	図書館利用者+教育関係者(ネットユーザー)	図書館利用者
情報のタイプ	Web情報中心	図書館資料中心
主題領域	教育実践情報(構造的)	さまざま(ピンポイント)
情報の構成	主題ごとの特徴を生かした構成	探索手順に沿って

- ### Pasfinder作成の背景
- 教員養成大学の中核としての本学の役割
  - 教育学部(教員養成課程)に対する社会的要請 ⇒ 実践性
  - 教育学・教育実践における教育実践情報の重要性
  - グレイな領域としての教育実践情報
  - 情報の収集とナビゲーションの必要性

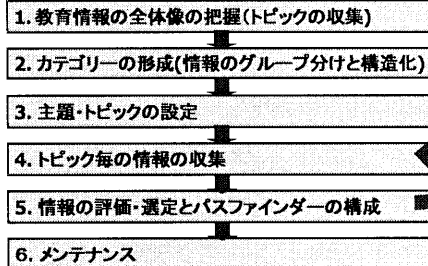
- ### E-TOPIA Pasfinderが対象とする教育情報
1. 初等中等教育の教育関係者が必要とする情報  
大学関係者のみでなく、小・中・高等学校の現職の教員等
  2. いわゆる学術情報とは異なる教育情報  
・学校現場に直結した実践情報  
(教育実践記録、学習指導案、教育実践研究等)  
・教育政策と関連した時事的情報
  3. 情報のタイプは主としてWeb情報  
・フロー情報(速報性・多様な発信者による多様な情報)  
・グレーリテラチャーとしての教育実践資料

- ### パッケージ化されたナビゲーションの必要性
- 目録やメタデータ、検索システムがあるだけでは十分に探せない。
  - 対面型のレファレンスサービスのみでは不十分  
— 利用者が限られる  
— 担当者の知識の格差や継承の問題
- 情報の世界への見取り図を示し、資料・情報に導いていくナビゲーション機能、それを蓄積・共有化できるツールが必要

## パスファインダーという考え方の導入

- 道しるべ = ナビゲーション
- 主題、トピックに対する関心
- レファレンスサービスの製品化
- レファレンス技能・知識の体系化・共有化

## E-TOPIAパスファインダーの作成の流れ



## パスファインダーの活用

- レファレンスカウンター
  - 教育関係の情報を広く集めたいという要望への対応
  - 教育関係のレファレンス質問への回答に使用
  - 教育実習での資料探しへのアドバイス
  - 学校図書館司書講習受講者(現職教員)からの相談
- 講習会
  - 教職志望者、教育学専攻者には必ず紹介
- ネット利用
  - Google等でのヒット結果からの利用も多い

## ネット利用の状況 (アクセスの多いページトップ10)

カテゴリ	アクセス数(1か月)
授業を創る > 国語	1812
学校運営・特別活動 > 進路指導・キャリア教育	1560
教育の「今」を探る	1474
授業を創る	1464
授業を創る > 保健体育	1381
学校運営・特別活動 > 学習評価・学力調査	1332
世界の教育・異文化間教育 > 世界の教育事情	1129
学校運営・特別活動 > 特別活動・学級経営	879
特別支援教育	840
心と教育・生徒指導 > 生徒指導・カウンセリング	824

## E-TOPIAパスファインダーの今後(私見)

- 利用を促進するために
  - OPACへの登録
  - 教育関係者向け講習会
  - 大学の教育・研究活動の中への位置づけ
- メンテナンス
  - Web情報の選書基準の策定
  - 図書館資料との連携
  - 拡大 or 精選

## レファレンスサービスの問題点

- レファレンスに必要な知識が体系化されていない? ⇒ 必要な知識と技能が継承されていない?
- レファレンスは体で覚える? ⇒ 経験と修行と才能による名人芸の世界?
- レファレンスライブラリアンをサポートするツールが不足している ⇒ 個人の知識量で対応する他にない?
- レファレンスの対象は森羅万象 ⇒ 個人での対応には限界がある
- レファレンスライブラリアンは少数 ⇒ サービスを受けることのできる利用者は限られている

## レファレンスツールとしてのパス ファインダー

- 図書館がつくる自前のレファレンスツール
  - 必要なものを使いやすいように作り、必要に応じて変えていくことができる。⇒ 最適化
- レファレンスのノウハウの蓄積と共有化
  - レファレンスのノウハウをドキュメント化し、公開する。  
⇒ レファレンスの知識・技能を開いていく
- パスファインダーの活用
  - 情報リテラシー教育への活用
  - 蔵書構築への活用
  - ライブラリアンのスキルアップへの貢献
- これからの(レファレンス)ライブラリアンの仕事は  
パスファインダーをつくること？

ご静聴ありがとうございました。

# 国際基督教大学図書館のレファレンスサービスの変遷

国際基督教大学図書館 松山龍彦

## I. レファレンス体制の変遷

### 1. インターネット以前 (~1993)

- 全職員 20 名中レファレンス専任職員 2 名
- 2 名はレファレンスデスク常駐
- 伝統的レファレンス業務内容
- インターネット黎明期 (図書館は未導入)

### 2. 変革期 (1994~2001)

- 全職員 18 名中レファレンス A チーム 2 名、レファレンス B チーム 6 名
- 8 名 (最盛期は 15 名) でデスク (1 名駐在) を輪番制で担当
- CD-ROM 他ニューメディアの提供
- インターネット図書館導入

### 3. インターネット定着以降 (2002~)

- 全職員 14 名中レファレンス主担当 4 名
- 4 名はレファレンスサービスセンターに常駐
- QuestionPoint 導入

## II. 現状と今後のビジョン

### 1. レファレンスサービスセンター

- デスクの共有
- レファレンス質問の共有
- 技術情報の共有
- サポートセンターとしての役割

### 2. QuestionPoint とその活用方法

- QuestionPoint の 3 つの機能
  - 質問・回答の送受信
  - 質問・回答のデータベース化
  - 質問のネットワーク転送
- Q&A との統合

### 3. これからのレファレンスと図書館

- アーカイブとレポジトリ
- 情報リテラシー教育
- 学習・研究ポータル

## 今後のレファレンスライブラリアンの役割と育成について：意思決定を行う立場から

慶應義塾大学信濃町メディアセンター 市古みどり

図書館員および教員にとって、大学図書館は必要不可欠な存在であるという意識は高いと思われる一方（本当にそうだと言い切れる自身がありますか？）、そうあるべく機能するためにはさまざまな問題が存在する。現状をいくつかの視点で捉えた場合、日本におけるレファレンスライブラリアンは今後どういう存在として機能できるか、あるいは機能すべきであろうか。レファレンスライブラリアンは大学の使命である人材の育成にどう貢献できるのであろうか。

### 1. 以下の視点で大学図書館全体、レファレンスサービスの現状を把握する

#### 視点1. 使命

大学の使命：人材を育成し社会に送り出すこと。

図書館の使命：大学の教育・研究を支援することで間接的に人材育成の一端を担う。

#### 視点2. 大学教育における環境の変化

全入時代、留学生、授業の改善、IT活用、ほか

#### 視点3. 学生たちの変化

ケータイ、インターネット、ググル、考える能力、ほか

#### 視点4. 図書館の変化

来館者数、レファレンス質問数、電子資料の増加、オリエンテーション・文献検索セミナーの実施と増加、授業での情報リテラシー教育、ほか

#### 視点5. 図書館員の仕事の変化

委託化、電子資料の増加による業務内容の変化、細分化される仕事、マニュアル、ほか

#### 視点6. 予算、人事

予算削減、予算構造、専任職員の減少、異動、メンター不在、キャリアパス、研修、ほか

#### 視点7. 利用者の求めるレファレンスサービス

レファレンスサービスを必要としている人、応じる方法、場所、ほか

視点8．質問のタイプ

視点9．回答のために用いるツールの変化

視点10．担当者のバックグラウンド、資質、経験

## **2. 今、レファレンスライブラリアンに求められているものは何か？予算の獲得、人材の確保、資料・環境整備の困難な中で、レファレンスサービスをどう変えてゆくか？**

方向性に関する一提案

理想は、サブジェクトライブラリアン、リエゾンライブラリアンの採用もしくは養成を行い、研究者レベルにも対応できるレファレンスサービスを提供すること。現実的には、レファレンス業務として当面重点を置くべき仕事を見極め、それに集中すべき。

現実路線の中心業務とすべきもの

1. 情報のナビゲーション
2. 情報リテラシー教育

前提：自ら情報を扱うプロとしての質を高めていくために開発すべきこと

1. 資料を知る努力
2. コミュニケーション能力
3. 説得力
4. 企画力
5. 教員との関係作り
6. サービス精神
7. 研究までゆかなくとも探究心、発表する、語学学習、何か一つの強みを持つ、ほか

参考文献

- 1) 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科．今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）中間報告 大学図書館の課題と新たな試み．2006.3.（文部科学省平成17年度「先導的・大学改革推進委託事業」）
- 2) 永田治樹、斎藤未夏、竹居哲郎、近藤伴成．大学図書館職員の専門性と人材育成のあり方に関する研究．筑波大学附属図書館研究開発室年次報告 2005, p.37-45.
- 3) 大埜浩一．大学図書館員の能力開発とオープン化．現代の図書館 44(2):76-81,2006.
- 4) 高山正也．図書館界における人材の育成：現状と問題点．情報の科学と技術 53(3):122-127, 2003.

- 5) 村橋勝子. 人材育成のための諸要件: 組織、マネージメント、適正評価、モチベーションなど. 情報の科学と技術 53(3):128-134, 2003.
- 6) Guidelines for behavioral performance of reference and information service providers. <http://www.ala.org/ala/rusa/rusaprotools/referenceguide/guidelinesbehavioral.htm>(2006.8.25 参照)
- 7) Professional competencies for reference and user services librarians. <http://www.ala.org/ala/rusa/rusaprotools/referenceguide/professional.htm>  
(2006.8.25 参照)
- 8) 川崎良孝編. 技量の継続的向上を求めて: 図書館員の研修に関する国際動向. 京都大学図書館情報学研究会, 2004.
- 9) Gregory, Gwen Meyer ed. The successful academic librarian: winning strategies from library leaders. Meford, NJ: Information Today, 2005.

## 《2006年度研修会の総括と回顧》

研究部 研修委員長 浮塚 利夫

2006年4月より、研修委員会のメンバーは事務局担当を除いて半数が交代した。研修会は例年2回開催しているが、委員が半数交代した初年度に年2回の開催は困難であり、今年度の研修会は1回とし、9月26・27日に開催した。

2006年度の研修はレファレンスサービスに焦点をあて、進展著しいデジタル情報に対応したレファレンスサービスの最新動向と、一方で図書館員にとって自明であるレファレンスサービスの有用性が利用者には十分に理解されていない現実があり、図書館と利用者の溝を埋める方策を考えるという主旨で企画した。

研修会は講演中心の構成となり、研修テーマ全体にかかわる総論として、大学図書館のレファレンスサービスの歴史を概観し、今日のレファレンスが抱える課題や問題点を研修会で共有することを主な目的とした。基調講演ではレファレンスサービスを図書館サービスの複合体として捉え、利用者と情報をつなぐ役割や人的支援の機能について再検討し、これらを大学図書館の機能としてどのように位置づけるのかを明らかにすることや、効果的にサービスを行う方策を追求する必要性が指摘された。

各論にあたる講演や事例報告では、デジタル化に対応した“デジタルレファレンスサービス”、“共同データベースの構築”、“レファレンスツールとしてのパスファインダー”、“QuestionPointの活用”、“レファレンスライブラリアンの資質や育成”など、様々な課題について事例報告を交え取り上げた。このことはそれぞれの大学図書館が今後のレファレンスを考えるうえで、有益であり、大変に参考になったものと委員一同自負している。

参加者は117大学148名の多数が参加し、レファレンスサービスの関心が高かったことが知れる。1日目の夕刻に行われた懇親会にも102名が参加し、研修会の熱気そのまま懇親会に移り、活発な意見交換が行われて一層の親睦を深めることができた。

なお、アンケートの回答でも好意的な意見が多数寄せられ、研修会は成功裏に終わったといえる。

講演資料については、今年度から私立大学図書館協会東地区部会研究部のホームページにレジュメが掲載される予定であり、研修会の内容を参加者以外にも広く知らしめることができるようになる。

また、参加者からレジュメとは別に講演に使用したパワーポイントの資料が欲しいという意見が寄せられた。レジュメと同様に講演者の許諾を得たものはホームページに掲載する予定である。



2007 年度私立大学図書館協会東地区部会研究部

活 動 計 画 (案)

(2007 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日)

1. 研究部活動方針

- 1) 研究活動
- 2) 研修活動
- 3) 研究部ホームページの安定的運用

2. 活動計画

1) 運営委員会

研究部の活動計画、予算・決算、研究部の運営その他について協議。  
年 8 回程度開催。

2) 運営委員・研究分科会代表者合同会議

研究分科会活動計画・運営その他について協議。  
2007 年 5 月、11 月の年 2 回開催。

3) 研究会

「研究分科会報告大会」(研究分科会活動成果発表)の開催。  
2007 年 12 月開催予定。会場未定。

4) 研修委員会

研修会開催(年 2 回)のため、年 10 回程度開催予定。

5) 研修会

第 1 回 2007 年 6 月 28～29 日 於：早稲田大学  
第 2 回 2007 年 11 月 29～30 日 於：東京理科大学

6) 研究分科会

14 研究分科会が、月例研究会・夏期研究合宿等の活動を実施する。

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| (1) 分類研究分科会         | (8) 西洋古版本研究分科会       |
| (2) 逐次刊行物研究分科会      | (9) 企画広報研究分科会        |
| (3) パブリック・サービス研究分科会 | (10) 和漢古典籍研究分科会      |
| (4) 図書館運営戦略研究分科会    | (11) 北海道地区研究分科会      |
| (5) レファレンス研究分科会     | (12) メタデータ研究分科会      |
| (6) 理工学研究分科会        | (13) 情報リテラシー教育研究分科会  |
| (7) 相互協力研究分科会       | (14) Lラーニング学習支援研究分科会 |

以 上

## 《関係規程》

# 私立大学図書館協会東地区部会研究部細則

(昭和 29 年 4 月 1 日 制定)  
(昭和 34 年 5 月 8 日 改訂)  
(昭和 34 年 10 月 14 日 改訂)  
(昭和 44 年 2 月 18 日 改訂)  
(昭和 63 年 6 月 28 日 改訂)  
(平成 7 年 8 月 2 日 改訂)  
(2000 年 6 月 9 日 改訂)  
(2004 年 6 月 18 日 改訂)

第 1 条 この細則は、私立大学図書館協会会則（以下会則という）第 33 条第 1 項第 3 号、第 39 条及び第 40 条に基づいて、私立大学図書館協会東地区部会（以下東地区部会という）に研究部（以下研究部という）を設置し、事務所を東地区部会研究部担当理事校（以下研究部担当理事校という）に置くことを定める。

第 2 条 研究部は、会則第 39 条の目的達成のために次の事業を行う。

- ① 研究会の開催
- ② 研究分科会の育成
- ③ 報告書の発行
- ④ 西地区部会研究会との連絡、情報の交換
- ⑤ その他研究部の目的達成に必要な事項

第 3 条 研究会は研究発表及び研究部の事業についての報告その他を行う。

- 2 会場は東地区加盟校が輪番で担当する。

第 4 条 研究分科会は各研究分科会ごとに適宜開催し、その研究の進行状況、成果その他を研究部担当理事及び研究会に報告するものとする。

- 2 各研究分科会は本研究部より助成金を受けることができる。
- 3 各研究分科会は本研究部より特別助成金を受けることができる。

第 5 条 報告書は第 2 条の各事業の状況及び研究成果を発表するもので、研究部担当理事が編集の責任に当たる。

第 6 条 本研究部には、次の役員を置く。

- ① 研究部担当理事 1 名
- ② 運営委員 8 名

（東地区部会役員校 3 名 東地区加盟校 5 名）

第 7 条 研究部担当理事には、研究部担当理事校の代表者が当たり、本研究部を代表し、かつこれを統轄する。

第 8 条 運営委員は、隔年 4 月東地区加盟館から研究部担当理事が推薦し、東地区部会役員会の承認を得た上、研究部担当理事をたすけて本研究部の運営に当たる。

第9条 研究部には、本研究部の運営を円滑ならしめるため、運営委員会を置く。

第10条 運営委員会は、研究部担当理事が招集し、次の事項を行う。ただし、必要に応じて各研究分科会代表者あるいは当該研究会会場校代表者の出席を求めることができる。

- ① 研究部の事業計画
- ② 研究会の運営に関する事項
- ③ 各研究分科会間の連絡、情報の交換
- ④ 研究部報告の編集、発行
- ⑤ その他本研究部の運営に関する事項

第11条 本研究部の経費は、東地区部会の助成金及びその他を充てる。ただし、必要に応じて実費を徴収することができる。

第12条 研究部の運営について必要な事項は別に定めることができる。

第13条 本細則の改廃は、東地区部会総会の承認を要する。

## 附 則

- 1 本細則は昭和29年4月1日よりこれを実施する。
- 2 本改訂細則は昭和34年5月8日よりこれを実施する。
- 3 本改訂細則は昭和35年10月14日よりこれを実施する。
- 4 本改訂細則は昭和44年2月18日よりこれを実施する。
- 5 本改訂細則は昭和63年6月28日よりこれを実施する。
- 6 本改訂細則は平成8年4月1日よりこれを実施する。
- 7 本改訂細則は2001年4月1日よりこれを実施する。
- 8 本改訂細則は2004年6月18日よりこれを実施する。

# 私立大学図書館協会東地区部会研究部研究分科会申し合わせ

(昭和 48 年 4 月 1 日 制定)

(昭和 55 年 6 月 18 日 改訂)

(平成 7 年 9 月 25 日 改訂)

(2002 年 4 月 1 日 改訂)

(2003 年 4 月 1 日 改訂)

(2004 年 4 月 1 日 改訂)

(2005 年 4 月 1 日 改訂)

第 1 条 この申し合わせは、私立大学図書館協会東地区部会研究部に研究分科会を置くことを定める。

第 2 条 本研究分科会は、私立大学図書館協会東地区部会研究部細則の当該条項に則って活動するものとする。

第 3 条 各研究分科会は、以下の要件を備え、かつ、複数の大学に所属する者若干名をもって構成されるものとし、研究部運営委員会の議を経て研究部担当理事の承認を得なければならない。

- ① 当該年度の研究テーマ
- ② 当該年度の研究回数
- ③ 当該テーマの研究に必要とされる条件
- ④ 会費徴収額

第 4 条 各研究分科会は代表者 1 名を置くものとする。

第 5 条 各研究分科会の活動期間は 2 年とし、更新することができる。更新にあたっては、研究部運営委員会の議を経て担当理事の承認を得なければならない。

第 6 条 新規に研究分科会を発足するにあたっては、会員更新担当理事に対し、第 3 条の要件を更新年度の前年 12 月までに示さなければならない。

第 7 条 会員更新担当理事は、研究分科会更新前年度の所定の日までに、加盟館代表者に、第 3 条各号の事項を通知し、加盟館における参加者選定の基準を示さなければならない。

第 8 条 加盟館代表者は、更新前年度の所定の日までに、各研究分科会の参加者を決定し、会員更新担当理事に通知するものとする。

- 2 会員更新担当理事は、この通知に基づき、当該研究分科会代表者に諮ったうえ、各研究分科会の会員として登録する。

第 9 条 各研究分科会の活動期間中に、途中入退会者があった場合、研究分科会代表者は書面をもって、月例担当理事に通知するものとする。

- 第10条 各研究分科会は、研究部より助成金を受けることができる。
- 2 各研究分科会は、研究部より特別助成金を受けることができる。但し、助成にあたっては、研究部運営委員会の議を経て担当理事の承認を得なければならない。
- 第11条 研究分科会代表者は、当該研究分科会を主宰するとともに、毎月末までに翌月の開催計画を、月例担当理事に連絡するものとする。
- 第12条 研究分科会代表者は、毎年研究部担当理事に、研究分科会の活動状況及び会計報告をしなければならない。
- 第13条 研究分科会代表者は、研究部担当理事の求めに応じて、研究部運営委員会に出席することができる。ただし、議決権を持つことができない。
- 第14条 各研究分科会は、その研究の成果を研究部の開催する研究会において原則として発表しなければならない。
- 第15条 研究分科会代表者は、毎年2回（5月・11月）開催される運営委員会・代表者合同会議に出席しなければならない。但し、代表者が出席できない場合は代理による出席を認める。代理も不可能である時は、特に研究部が認めた場合この限りではない。
- 第16条 本申し合わせの改廃は、研究部運営委員会の議を経て研究部担当理事の承認を得て行うものとする。

#### 付 則

- 1 本申し合わせは、2004年4月1日から施行する。
- 2 本申し合わせは、2005年4月1日から施行する。

# 私立大学図書館協会東地区部会研究部研修委員会規則

(昭和56年4月 1日 制定)

(平成 2年4月 1日 改正)

(平成 8年3月28日 改正)

第1条 この規則は、東地区加盟館館員の資質の向上を図るため、私立大学図書館協会東地区部会研究部（以下

研究部という）に、研修委員会（以下委員会という）を設置することを定める。

第2条 前条の目的達成のため委員会は、次の活動を行う。

- (1) 研修会等に関する情報の収集、提供
- (2) 研修会等の企画、実施
- (3) 関連する機関、団体との連絡・協力
- (4) その他目的達成のために必要な活動

第3条 委員会は6名の委員をもって構成し、うち1名は研究部担当理事校（以下担当理事校という）から選出

する。

第4条 委員の任期は2年とし、再任はさまたげない。ただし、担当理事校から選出された委員の任期は担当理

事校の担当期間とする。

第5条 委員に欠員が生じた場合はすみやかに補充するものとし、その任期は前任者の残任期間とする。

第6条 委員会は研修会等を企画・実施する際、その必要に応じて、実行委員若干名を置くことができる。

第7条 委員会に委員長を置く。

2 委員長は委員会を招集し、議事を進行する。

第8条 委員長及び委員は東地区加盟館から研究部担当理事（以下担当理事という）が推薦し、東地区部会役員

会に諮り、これを委嘱する。

第9条 委員長は委員会の活動について、担当理事に対し、少なくとも年2回以上報告しなければならない。

第10条 委員会の事務経費については、私立大学図書館協会東地区部会研究部細則第11条を準用する。ただし、

研修会等を実施する際の費用は、原則として受益者負担とする。

第11条 委員会の運営に関する事項は委員会申し合わせとして別に定めることができる。

第12条 この規則の改廃については研究部運営委員会の承認を必要とする。

## 附 則

この規則は平成8年4月1日より施行する。